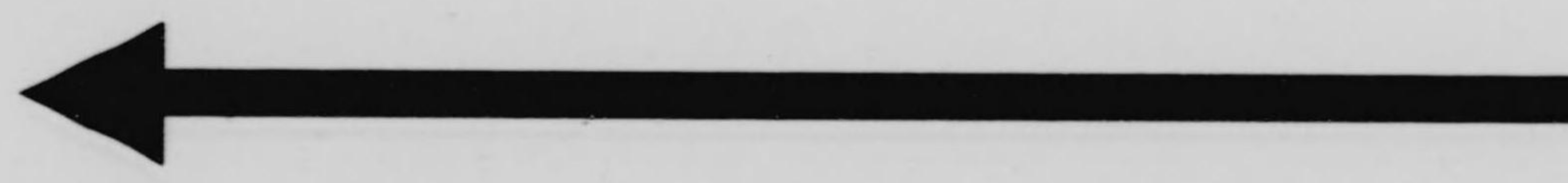


364
974



始





オブローモフ

(前)

山内封介 著
ゴンチャロフ 譯

新潮社出版

大正

15. 8. 11

内交

序

トルストイの『戦争と平和』、ドストエーフスキイの『カラマゾフ兄弟』、ゴンチャロフの『オブローモフ』と、斯う數へただけでもそこに偉大なる響きがある。ロシアでなければ見られない人生の偉大なる繪姿が浮ぶ。是等の作は露國三大藝術家の代表的傑作として實にロシア文學の誇りであるばかりでなく、またロシア生活の偉大なる象徴として永久にロシアを代表すべき國寶以上の國寶であるばかりでなく、それと同時に廣い人間の結晶として全人類の胸に共鳴すべき世界的名著である。その中でも『オブローモフ』は、ロシア生活の全局とロシア國民の根本特質とを表現した綜合的大伽藍として、獨特の價值を持つて居る。

ゴンチャロフは此の作に於て、恰もゴゴリが舊ロシアの消極的特徴を深刻に描寫したやうに、彼以前に誰も氣附かなかつたロシア生活の根本特徴を捕捉して、之を極めて精細に表現して居る。そして綜合的描寫を主とする凡ての作家の如く、彼はその觀察したる特徴を殆んど全ロシアの生活に推し擴げた。それが爲めその特徴は非常に廣い範圍に擴大されて居る。彼は鋭敏な心理的觀察に優れた幾多の典型のうち、オブローモフ家の領地オブローモフカ村に於ける住民の懶惰、安逸、遲鈍な生活を描きながら、このオブローモフ主義を全ロシアの痼癖した状態のシムボルとして表現して居る。恰も眠れる獅子のやうに、異常な力を備へて居りながら、凝つとして動かない勇士(ロシア)のシムボルとして描いて居る。

ゴンチャロフは數多いロシア作家の中でも、特にロシア實生活の斯うした國民的特徴に深甚の注意を拂つ

た第一人者である。そして此の特徴が深く彼の精神を支配し、それがロシアの實生活に對して、避け難い悪影響を及ぼして居るやうに思つた。その思ひが凝結して、遂に彼の手から昏睡せるロシアの偉大なる描寫が現はれたのである。

ロシアの片田舎の死滅した生活、生きながら死人のやうに、ぼんやりと夢の中に没つて居る生の恐怖、其の中に住んで居るロシア人の重苦しい昏睡の状態、彼等がオプロモフ主義即ち懶惰といふ深い泥沼の中に次第に吸ひ込まれて行く光景——是れは正しく夢の國であり、懶惰の國である。この夢の國からオプロモフは美しい天賦を持つて生れた。彼は聰明で、敏感で、且つ善良な性質の結晶でありながら、恰もオプロモフカ村に於ける無活動と、沈黙と因循とのために害はれたやうになつて居る。小説の第一編に出て居る『オプロモフの夢』といふ長い一章は、丁度畫家がその一生の傑作に對するが如く、ゴンチャロフが長い間全精神を凝めて書いた有名な一章で、この作がまだ全體として出ない前に一度公にされたこともあるが、この一章に於て作者はこの夢の國と、少年オプロモフがその情氣に充ちた空氣の中で次第に害はれて行く徑路とを緻密に描いて居る。

オプロモフは自分の過去の生活を夢に見る。その夢に於て彼の眼の前に少年時代の光景がそれからそれと移つて行く。彼は數限りなき追憶の群より心が興奮して、夢の中で泣いて居る。彼の前には兩親の靜かな村が描かれる。周圍には開墾された寂しい野原が擴がり、遠く彼方には森林が連つて、古い地主の家と花園とが見える。その花園で、彼は乳母に伴はれて散歩して居る。寢臺の上で眼覺めた小さなイリユーシヤ(オ

プロモフの名)に衣服を着せる。イリユーシヤは頻りに駄々を捏ねる。彼は早やその子供らしい智慧で、自分は貴公子である、傍に侍づく人々は皆な自分の召使で、自分の所有で、自分は意のままに彼等を自由に指揮することが出来ると思つて居る。彼の傍には何時もワニカヤフリカヤステブカが侍づいて、彼の命を助ける。どんな望みでも、どんな用事でも、言はない先から便じて呉れる。彼は少年の身體の發育に必要な凡ての努力と動作と、意志の發達に必要な凡ての配慮と困難とをまるで知らずに過す。この若様に對する家從等の阿諛と追従とは、少年の意志と自發力とを人為的に弱めて居る。彼は恰も温室の花のやうに、乳母や侍女や兩親の配慮と保護との下に成長する。人々は何時までも彼を人形のやうに見護つて、子供らしい愉快と悪戯の自然に發するのを堅く抑へ付けて居る。兩親の手を離れるが最後、忽ち無數の危險が襲ひ來ると言つて、彼を威嚇する。少年は唯兩親の家ばかりが心配の無い樂土で、周圍は凡て見知らぬ恐ろしい怪物や危險で充ち塞がれて居るのだと思ふやうになつた。彼はビク／＼もので、村の向うの窪地や森林には狼が駈け廻り、盜賊が巢を喰つて居るのだと思つて居る。人々はイリユーシヤの幼な心に早くも實生活の恐怖を吹き込み、自身に頼らずして他人に頼るやうな習慣を作つた。そればかりではない。彼の智育を全然阻止して、學問などで自分を苦しめないやうにと絶えず彼を説得し、一切の課業より彼を放任した。兩親の心遣ひはたゞ小兒の肉體の方面のみ注がれた。謂はゞ蒸暑い温室の中で、軟かい眞綿に纏まつて、一人の孱弱い、フレグマチツクな、生氣のない子供が成長して居ると見ればいゝ。そこに懶惰と因循と無活動との習慣が、少年の心に永久醫すことの出来ない疲勞を植ゑ付け、情氣と安逸とに對する傾向を發達させた。それ

に兩親の家と云ひ、居村と云ひ、少年の周圍の空氣は、彼の心に一層有害な影響を及ぼさずにはおかなかつた。彼の身邊には永久の惰眠と、遲鈍な動物的生活と、たゞ一つ午餐に就いての心遣ひとがあるだけである。オプロモフカ村に於て一切の事は倦怠と微睡の中に固結して、たゞ朝だけが午餐の支度をするので幾分生活らしい兆候を見せる。然し午餐が済むと、オプロモフカはまたいつもの重苦しい息詰まるやうな惰眠に復る。そして暑氣と静寂と夢の印象とは、感じ易い少年を唆つて、一種病的な幻想の迷宮に運んで行く。

ゴンチャロフはその非凡なる心理的精緻を以て、少年の精神に於ける是等の捉へ難い心的經驗を再現して、殆んど眞に迫つて居る。オプロモフカ村が愈々本當の睡眠の國となつて現はれる時、その靜かさは唯僅かに睡眠者の寢言で破らるゝだけである。寢ては起き、起きては茶を啜み、夕暮の涼へを取り、夕餉を済ましてはまた寢に就く。斯様にして来る日も来る日も同じ生活の單調な夢のやうな線が續いて行く。人々は皆草のやうに生え出て、惰眠と飲食との氣懈るい日を送つては、枯れるやうに死んで行く。爺さん婆さんの無意味な譚語の外には、絶えて此の動物的平安を破るものがない。午餐と睡眠とを外にしては、何等の心遣ひも、何等の興味も無い。たゞ稀にカルタを戯つたり、過ぎし年の面白さうなエピソードを想ひ出したりするくらゐがせめてもの慰藉である。斯うした實生活上の特質が、鋭敏な觀察力を備へたゴンチャロフの眼に映じて、非常に強烈な印象を與へる。そして此の印象を作者はホーマーのやうに平明に描いて、此の平明な調子によつて、更にその印象を強めて居る。それに作者自身の語る所に據れば、彼自から此のやうな特質と共通な傾向を有つて居つたがために、彼の想像には早くも偉大なるロシアのオプロモフ主義の光景が出來上つたと

いふ。實際オプロモフは作者自身を描いたのではないのかと思はれる節さへある。要するに主人公の少年時代を再現した『オプロモフの夢』は、ロシア實生活のタイプが如何にして出て來たか、如何にして構成されたかといふことを説明したものである。

農奴制時代に於けるロシアの貴族生活の事情は受動的な、懶惰な、そして無活動な性質を發達させるのに、最も都合よく出來ては居るが、然し是等の特質は恐らくロシア人の生來の性質であつて、またオプロモフのやうな性格を産み出した主なる原因である。ゴンチャロフはホーマーのやうな平明な調子を以て、オプロモフの青年時代及び大學時代の事を物語つて居るが、その頃オプロモフは懶惰な性質を改め、有益な活動的生活に慣れ、高尚な理想に燃え立ち、出來得るだけ勞働しようと企てた。所が、やがて生來の性質と、過去の教育によつて養成された氣質とは最後の勝利を占めて、制し難い懶惰と抑へ難い安逸とは、若い、壯健な、賢いオプロモフを寢室と長椅子とに結び付けて、一生それから離れられないものにしてつた。寢返りをするのでさへ、しようかしまいかと長い間闘つた上でなければ出來ないほどの懶惰者になつてつた。彼はベテルブルグのゴロホワヤ町に靜寂と平安のオアシスを造つて、其處へ埃だらけな、不潔な、どんよりとした、氣鬱るいオプロモフカ村を移した。彼の居間では、曾て生活や活動の事に就いて物語られたことがない。到る所に蜘蛛が網を張り、塵が山と積つてインキ壺にはもう長い間一滴のインキすらない。塵だらけな机の上には、一人の友人が指先で畫いた『オプロモフ主義』といふ文字が其の儘残つて居る。オプロモフは毎日朝から晩まで、長椅子に横はつたまま、何を心配するでもなく、たゞ靜かに移つて行く冥想の

跡をそれからそれと辿つて居る。彼は仕事のために奔走したり、パンの斷片を得るために心配したりする必要は無い。その日／＼のくだらない、空疎な慮りは更に彼の精神を煩はさなかつた。その事を考へながら彼は一人で楽しんで、それを恰も自分の特權でもあるかの如く從僕のザハールに話して居る。オブローモフに取つて、寢臺の上の平安と瞑想とは何よりの悦樂であつて、彼はそれを何か道德的満足でもあるかの如く考へて居る。彼は要するに一種の享樂派である。が、彼の享樂は結局恐るべき動物的平安に墮して了つた。作者は生きた生活が徐々に破壊されて行く光景と、泥沼に沈んで行く其の経過とを、痛ましいほど深刻に描いて居る。殊に作者がオブローモフの美しい天性を描いたといふことが、事件の悲劇を一層強めて居る。オブローモフの善良な、皎潔な、そして感じ易い性質は、多くの事實や、對人關係のうちによく現はれて居る。彼は知合の文學者との談話に於て、文學に關する極めて適切な深い考へを述べたこともある。

オリガとの一件は肥え太つた懶惰なオブローモフの心中に、まだ青春の血潮と衷心の歡喜とが秘められて居るといふことを證するに十分である。オリガとの關係は泥沼の中から脱け出ようとするオブローモフ自身の方から言つても、また彼を救ひ出さうとする友人の方から言つても最後の試みであつた。オリガとの接觸の初め、オブローモフの心は甚く波打つた。うら若い娘に對する熱烈なる愛慕の情が、彼の精神を支配したのである。それがため暫くの間彼の生活は一變した。彼の生活には俄かに春と詩とが入り込んだやうに思はれた。彼はオリガの天性の美と音楽とに有頂天になつて、次第に元氣づいて來、話好きとなつた。二人は能く連れ立つて散歩したり、語り合つたりした。さういふ所を見ると、今迄のオブローモフとは思はれなかつ

た。けれどもそれは暫くの間で、家庭教育と遺傳の根強い萌芽とはまたもや勝利を占めた。彼は自分の生活と習慣とを根本的に改めなければならぬ時に當つて、そして新生活を始めるために必要な機會の到來した時に當つて、尻込みをした。丁度ネヴワ河の流水期は彼の元氣を挫いた最後の場合であつた。

彼は再び元の古巢に潜り込んで、今度は最早二度と出て來なかつた。オリガとシュトリツとは彼をオブローモフ主義より救ひ出す望みの綱が最早全く絶えて了つたと信じた。オブローモフは自から彼等に無駄な骨折をしないやうに願つて、シュトリツに斯う言つて居る。『僕は此の穴の中に辛うじて生え着いて居る。無理に引離したら死ぬであらう』と。今やオブローモフの唯一の願ひは、誰も彼の生活に手を觸れないやうに、彼の靜かな平和な眠りを醒まさないやうに、そして日々の些細な心配で彼を煩はさないやうにすることであつた。結局彼はワイボルグスカヤ・ストロナに移つて、其處で平安に自分の生涯の終りを待つて居る。外面的にも内面的にも、彼は何物にも心を打込まなかつた。書物や新聞紙を読むことすらしなかつた。そして靜かに世を終つて居る。作者の語を假りて言へば、『永久の平安と永久の靜寂とは日より日に懶く氣懈るく滑つて、遂に彼の生活機能は靜かに休止した。』

あはれ巨人の一生よ、それは北國の熊の冬籠りの夢であつた。三十三年間坐り通したといふロシヤ古傳説の勇士イリヤ・ムウロメツの前半生を象つた過去のロシヤの夢に過ぎなかつた。社會生活が六十年代間際の新らしい風潮と、新らしい問題と、新らしい要求とによつて、根柢より動かされた時に當つて、ゴンチャロフはオブローモフと彼を生み出したロシヤ實社會の凡ゆる事情とを、ロシヤ生活の惡夢として、過去の屍骸と

して描いたのである。

オブローモフの友人シュトリツはオブローモフと全くコントラストを爲して居る。シュトリツの父は几帳面な、勤勉な獨逸人で、少年のオブローモフに読み書きを教へた教師である。斯ういふ父親によつて嚴重に教育されたシュトリツは、オブローモフとは違つて、全く事務的な、實際的な、理智に長けた堅實な人物であつた。彼は空想に耽つたり、安逸や懶惰に溺れたりすることの出来ない男であつた。彼の本領は勞働である。彼の活動的天性に取つて何より必要なものは、有利な生産的事業と永久の勞働とである。シュトリツは幼年の頃から斯う考へてゐた。人生は勞働である。勞働の無い所に生活はない、實生活に於ては是非共自己に信賴し、自己の力を頼まなければならぬと。この考へが彼の心に獨立心と堅實な意志とを發達させたのである。まだ若い時分、彼が自活して自から生活の資を得なければならなくなつた時、彼は毅然として實生活の奮闘場裡に立つて、實に必要なために働いたばかりでなく、自分の勞働を衷心より熱愛した。勇健な、樂天的な、そして意志の強いシュトリツは、大地から足を離さずに、堅實に自己の道を歩いた。何等の理想的計畫も立てず、力不相應の問題にも没頭せず、常に周囲の社會の實狀を參酌して事を行つて居る。彼は自己の勞働を一般人類の事業に獻けながら、周囲に湧立つ實生活と自分との間に、密接な交渉のあるのを感じたのである。然るにオブローモフは實生活を全く離れて了つた。實生活も亦彼を置き去りにしてずん／＼前に進んだ。『イヤ君、君は滅びて了つた、古いオブローモフカよ、左様なら君の時代はもう過ぎ去つて了つた』と、シュトリツはオブローモフに向つて言つた。シュトリツの積極的性格には猶ほ彼の調和的氣質と堅忍性

とを數へなければならぬ。斯ういふ性質があつたために、如何なる不利の事情も、彼の精力と人生に對する彼の信仰とを動かすことが出来なかつた。然しそれと同時にシュトリツの天性には偏狭な方面のあつたことを否む譯には行かない。詩や藝術や宗教や哲學の世界は、彼に取つては全く没交渉であり、不可解であつた。この方面に於ては彼よりもオブローモフの方が遙かに廣く、且つ敏感である。シュトリツは全然實生活の外面的建設に没頭して、未だ曾て高尚な問題に心を動かしたことがない。

オリガはオブローモフが全く例の惰眠に溺れる前に、幾分彼に活氣を與へた女である。小説では意志の強い、理智に富んだ娘として描かれて居る。彼女は獨立心の盛んな點に於て、活動的生活に對する傾向に於て、シュトリツと似通つた所がある。また藝術と自然と人生問題とに對する欲求は、彼女をオブローモフとも近づかして居る。オリガは自信の強い、活動的な女であつたから、自から實生活の困難な問題に没頭し、之が實現に努力することを好んだ。その問題の一つはオブローモフを新しい生活に蘇らせ、彼をオブローモフ主義より救ひ出し、彼の生活に活氣と波瀾とを與へることであつた。最初オリガの試みは成功した。オブローモフは如何さま此の惻かな天才的な娘の魅力に打たれて、復活したやうであつた。彼は今迄の自分の寢臺を棄て、埃だらけな居室を棄て、一日中オリガと散歩したり、音楽を聴いたり、希望ある未來の計畫を立てたりした。けれども長い間の習慣は新生活の努力よりも根強く彼を支配して、オリガの心盡しも所詮申妻がなかつた。そこに至ると、オリガの理智はオブローモフに對する愛情よりも強かつた。彼女はオブローモフに手紙を書き送つて、その手紙の中で自分に必要な生活はオブローモフのやうな生活ではないといふこと

を論理的に證明して、きつぱり彼と手を切つた。オリガがシユトリツの所へお嫁に行つて、此の醒めた、冷靜な實際家と幸福に暮らして居るといふことが、彼女の理智的な天性を一層裏付けて居る。オリガの意力と獨立心とは一面ツルゲーニエフの女主人公、例へば『その前夜』のエレナや、『ルウデイン』のナタリヤなど、餘程似通つた所がある。

此の作の主要人物の性格に就いては是丈に止めておいて、是からは此の作と當時の社會との關係に論及し、此の作の社會的價値を考察して見なければならぬ。ゴンチャロフは此の作に於てロシアのオプロモフ主義を描かうとしたのであるが、それと同時に此のオプロモフ主義に對して、理智の醒めた、意志の強い、活動的な人物のタイプをも描かうとしたのである。斯種の人物に對する要求は其時代の最も痛切な問題であつたからである。たゞゴンチャロフが斯ういふ人物のタイプをロシア人の間に見出さないで、ロシアに籍を有する獨逸人のシユトリツを選んだといふことは注意すべき點である。此の點は丁度ツルゲーニエフが『その前夜』の主人公インサロフをロシア人の間に見出さないで、ブルガリヤ人の間に求めたのと好一對である。實際ツルゲーニエフもゴンチャロフも是等の積極的人物を描きながら、彼等に理智とか、精力とか、意力といふやうな積極的性質を附して居るが、その代り精神上の敏感と、趣味の廣さと、藝術や美に對する熱愛とは彼等に全く缺けてゐた。『その前夜』のインサロフにしても、『處女地』のソロミンにしても、また『オプロモフ』のシユトリツにしてもさうである。丁度ツルゲーニエフが、空想家のルウデインに對するにレジユエフを以て

し、美術家のシユーピンに對するにインサロフを以てし、詩人のニエジュダノフに對するにソロミンを以てしたやうに、ゴンチャロフはオプロモフに對するにシユトリツを以てしたのである。そして是等の積極的人物を評價するには、その當時の事情を顧みなければならぬ。即ち是等の積極的人物を産み出し、彼等を過去の空想家や理想主義者に對立せしめたその時代の實生活の事情を斟酌して考へなければならぬ。此の作の出たのは五十年代の終りであるが、當時の實生活の事情は新時代のロシア青年を驅つて、社會生活の要求と現實の問題と困難な労働とに熱中せしめたのである。その際空想や遠い未來の計畫や、藝術の玩賞などに耽つて居る餘裕は少しもなかつた。『自然は神殿に非ずして一大工場なり、人はその中に於て皆な労働者なり。』これが當時のロシア青年の標榜であつた。ツルゲーニエフとゴンチャロフとは同じく四十年代の人として、詩と美と個人の道徳的向上とを目標とする四十年代の理想に對して深く執着しながら、同時に彼等は新時代の要求と問題とに對しても敏感であつた。それが爲め彼等はその藝術的勞作によつて新時代のために盡すことが出来たのである。空論や、空想でなく、偉大なる社會的労働に従事しなければならぬといふ新しい現實主義の傳道の影響を受けて、新たに生れ出たばかりの新人のタイプを鋭く觀察した結果として、時代精神はおのづから作家の藝術的意匠にも現はれて居る。斯くして『オプロモフ』の偉大なる意匠も現はれ、また實生活の労働者等の新しい典型も澤山現はれて、それがチエルヌイセーフスキイの小説『何を爲すべきか』の主人公ラフメートフに至るまで一聯列を爲して居る。

然し『オプロモフ』の社會的價値は何と言つてもロシア社會の病源たるオプロモフ主義を描寫した所に

在る。此の點から言つて、この小説は實生活の客觀的描寫として、ロシア社會の暗黒面を殘る限なく暴露したものである。倦怠と惰眠と因循と、次第に泥沼に沈んで行く光景とが濃く鮮やかに寫されて居る。同時に此の小説はロシアの農奴制が、自墮落の結果意志と精力と生活の希望とを失つた地主に對し、及びその配下の農奴に對して如何なる惡影響を及ぼしたかといふことを指摘した點に於て、農奴制に對する力強い反抗とも見られる。殊に此の作に於けるオプロモフ主義の描寫は、漸やく萌したばかりの社會的覺醒を背景として、當時まだオプロモフ主義を脱し得なかつたロシアの社會を震駭させずにはおかなかつた。この作が公衆に如何なる感動を呼び起し、如何に驚くべき印象を社會に與へたかといふことを了解するためには、當時の社會を一瞥するだけでも十分である。農奴解放（一八六一年）まで僅かに三年を控へた社會的革新の眞最中、文壇に於ては惰眠と沈滞と安逸とに對して頻りに遠征が唱へられ、社會は元氣よく勇ましく向上發展の途に進むべく呼び出された。此の呼聲に應じて出たのが即ち『オプロモフ』で、此の作は當時恰も爆裂彈の如く知識階級の頭上に落ちたのである。人々は最初から此の作に於て小説以上の何物かを感じた。深くロシア社會の根柢に觸れて居る何物かを見た。であるから何人もオプロモフに對して平氣な態度では居られなかつた。各人皆な此の人物を我身に推し當て、自分の個人性のうちにオプロモフのやうな性格のあるのを見出した。それは此の作に於て作者の綜合力が殆んどその頂點に達して居るからである。オプロモフは單に農奴制の下に發達した一地主の典型ではない。彼は身分階級の如何を問はず、凡てのロシア人に共通な性格を一身に網羅して居る民族的タイプである。ドブロリユーボフが『オプロモフ主義とは何ぞや』と題す

る有名な評論に於て、オニエーギンやベチヨリンを初め、ペリトフ、ルウデインに至るまで凡ゆる時代のヒーローをオプロモフと比較したのは慥かに一見識である。彼にして若しその比較をもつと擴大して行つたら、凡ゆる小説中の人物に於て、オプロモフの性格を見出すことが出来たであらう。

實際我々はオプロモフに於て、農奴制の下に發達した懶惰、無氣力、貴族的懦弱、病的臆病といったやうな受動的性質と共に、曾て農奴を支配したことのない普通のロシア人と雖も遁れることの出来ないやうな性質をも見るのである。それは企業心の絶無、盲目的服従、鳩のやうな温順と柔和である。この點から言へば、オプロモフは地主や貴族的タイプの範圍を脱して居る。彼は全く民族的タイプである。或はもつと廣く解して、ドン・キホーテや、ドン・ジャンや、ハムレットのやうな一般人類的タイプとも言へよう。

オプロモフに比べると、シュトリツの性格描寫は餘程見劣りがする。それは作者がその創作力に據らないうで、單にオプロモフの相手として、無理に引出したためであらうが、全く故意に造られたやうな、死んだ、抽象的人物となり終つて居る。是れが此の作の有する缺點である。その他にロシアの批評家等は此の作の弱點として、事件の不足と描寫の冗漫とを擧げて居る。また作の主題に於ても、オプロモフとオリガとの關係の如き、幾分不自然な點が無いでもない。けれども是等は此の作の有する大なる價值に比べては、些々たる瑕瑾に過ぎない。

ゴンチャロフは公平無私なる客觀的作家として、單に周圍の實生活を有るがままに再現する外、何等教訓とか譴責とかいふ特殊の目的を有たなかつたにも拘らず、『オプロモフ』は社會的に偉大なる教訓と効果と

を興へた。當時の人の證する所に據れば、人々は『オプロモフ』に於て、ロシアの社會組織の不完全な理由を明かにしたばかりでなく、各自自身のうちにオプロモフの分子を認めて、今更のやうに恐れ戦き、オプロモフのやうに一生を何の痕跡もなく、あだに過さんとするやうな心掛を放棄し、オプロモフとの共通性を悉く自身のうちより絶滅しようと言つたといふことである。斯様にして冷靜なる自然派であり、また其の性格に於て社會的傳道師たるには不適當であつたゴンチャロフは、その結果に於ては却つて偉大なる社會的指導者の職責を完うした。つまり彼の作物は、彼の創作的意匠以外に、若くはそれ以上に、新時代を教ゆるところが多かつたのである。

斯かる世界的名著が、山内君の翻譯によつて公にされるのは、獨り我が文壇の喜びであるばかりでなく、我が最近の翻譯界に於ける最も大なる收穫であると言はなければならぬ。この作の如きは疾うに譯さるべくして、未だ一度も譯されなかつた名著の一つである。今本書の譯者として、最も熱心なるロシア文學の研究家山内君其人を得たのは、まことに適任であると信ずる。わけてもロシア語に堪能なる同君の手によつて直接原書から翻譯されたといふことが、此の譯本の大なる權威であらねばならぬ。今更めて私が推奨するまでもなく、我が文壇は同君の長い間の忠實なる努力に向つて、衷心の感謝と喜悅とを吝まないであらう。

昇 曙 夢 識

改譯に序す

拙譯『オプロモフ』が世の中へ出てから丁度十年になる。その間私は我國の文壇に別れて、長らくロシア内を放浪してゐた。

が、私は幸か不幸か久し振りに我國へ歸つて來た。また東京に根を卸し始めた。で、此の機會を利用して自分の目撃した新ロシアとロシア人とその事業とを出来るだけ詳細に、我同胞諸君に紹介したいと思つた。

所が、斯う思ふ時に必ず私の頭に浮ぶのは、『オプロモフ』である。「ロシアとロシア人とその事業とを知る爲には、何よりも先に『オプロモフ』を読む必要がある。」數年間に互つてロシアとロシア人とその事業とを目撃した私は、遂に斯うした單純な結論に到達したのである。實際、ゴンチャロフが今から約七十年ばかり前にその繊細な筆で描き出した『オプロモフ』一篇こそは、確かにロシアとロシア人とその事業との縮圖であり、その運命の豫言書であると云つて差支へない。

で、私は自分の拙劣な筆でロシアとロシア人とその事業とを紹介するくらゐならば、寧ろ先づ我同胞諸君に『オプロモフ』を一讀して貰つた方がいゝと思つた。が、遺憾なことには拙譯『オプロモ

フ』は何時頃からか既に絶版になつてゐたので、私は自分の希望を満足させる爲には『オプロモフ』の再刊を思ひ立たなければならなかつた。而も實際にロシヤの事情やロシヤ人の生活状態を目撃した眼で舊拙譯を見ると、随分汗顔に堪へぬ個處が澤山にある。

勿論、字書のみを通して出来上つた翻譯が、完全を期し難いのは、已むを得ないことであり、實生活を描寫した小説中に、實物や實際生活を目撃しなければ了解し難い點が多々あることもまた當然である。どうせ再刊するならば、何方にしても徹底的に改譯しなければならぬ。改譯するならば、單なる訂正的な改譯に留めず、嚴密な意味に於ける改譯をしようと私は決心した。

此度再び新潮社から出版した新譯『オプロモフ』は、以上の動機により、斯うした決心の下に嚴密に改譯したものである。ロシヤを知り、ロシヤ人を研究し、更にロシヤ文學の妙味を味はんとする人は、先づ此の『オプロモフ』を一讀されんことを譯者として責任を以てお勧めする。

『オプロモフ』とその作者なるゴンチャロフに就いては、今こゝに改めて紹介する必要がある程よく我國に知られてゐる。殊に、『オプロモフ』の藝術的並に社會的價値に就いては、本譯書の卷頭に掲げた昇曙夢先生の大論文が餘す所なく論じ盡してゐる。で、私が更にゴンチャロフ並びに『オプロモフ』に就いて何事かを書くのは、全く蛇足に近いことになつた。加之、本譯書は前後兩編に分けて發行され、前編の頁數は後編に比し著しく多い。で、若し何か書くならば、私が再刊を思ひ立つた動

機、即ち『ロシヤ及びロシヤ人の運命豫言書』としての『オプロモフ』と云つたやうなことやその他『オプロモフ』とその作者ゴンチャロフに就いての二三解説的なことを後編の末尾に添へたいと思つてゐる。

が、要するに私はロシヤへ入る前に『オプロモフ』を翻譯して我同胞諸君に提供し、歸來と同時に再び之を自分のロシヤ土産として改めて諸君の前に提供し得た。之は、譯者自身に取つては大いに意味の深いことと思はれるが、廣く我讀書界に取つてもまた決して無意味ではあるまいと多少自負させて貰つて置く。

一九二六年七月

譯者識

ゴンチャロフの小傳

イヴァン・アレクサンドロヴキチ・ゴンチャロフは千八百十二年六月六日にシンピルスクの或る豪商の家に生れた。彼は先づ貴族の計營に關する土地の學塾で初等教育を受け、次に莫斯科の或る塾で中等教育を修め、更に莫斯科大學の文科へ入つた。其處でバヴロフヤ、ナデョージディンヤ、シ・ヴキレフなどの講義を聞いた。其同窓生中には彼の所謂スタンケウキチ黨員が大勢居つたが、彼は在學中にも、また卒業後も此の黨員とは餘り深く交際しなかつた。大學を卒業すると直ぐに故郷のシンピルスクへ歸つて官途に就き、程なくベテルブルグへ轉任した。彼は此處で十五年以上も官吏生活をしてゐた。

千八百五十二年に帆船『バルラダ號』に便乗して世界漫遊に出かけ、途次我が長崎へも來た。西からベリが我國を威嚇した同じ時代に、社會と人生との冷靜なる觀察者が北から來つて持ち歸つた我國の印象は、其の便乗した帆船の名を取つて『バルラダ號』と題した旅行記に書かれてゐる。旅行を終つた後も尙ほ七十年代の始まで官吏生活を續けたが、其後退職してベテルブルグに居住してゐた。

文壇に於ける彼の活動は千八百四十七年の處女作『平凡なる物語』に始まつた。其の後十年にして『オプローモフ』の前編を公にし、翌年には後編を完成した。なほ此の間に彼の旅行記『バルラダ號』も出た。その他、彼は『險崖』及び少數の短篇小説をも殘してゐる。

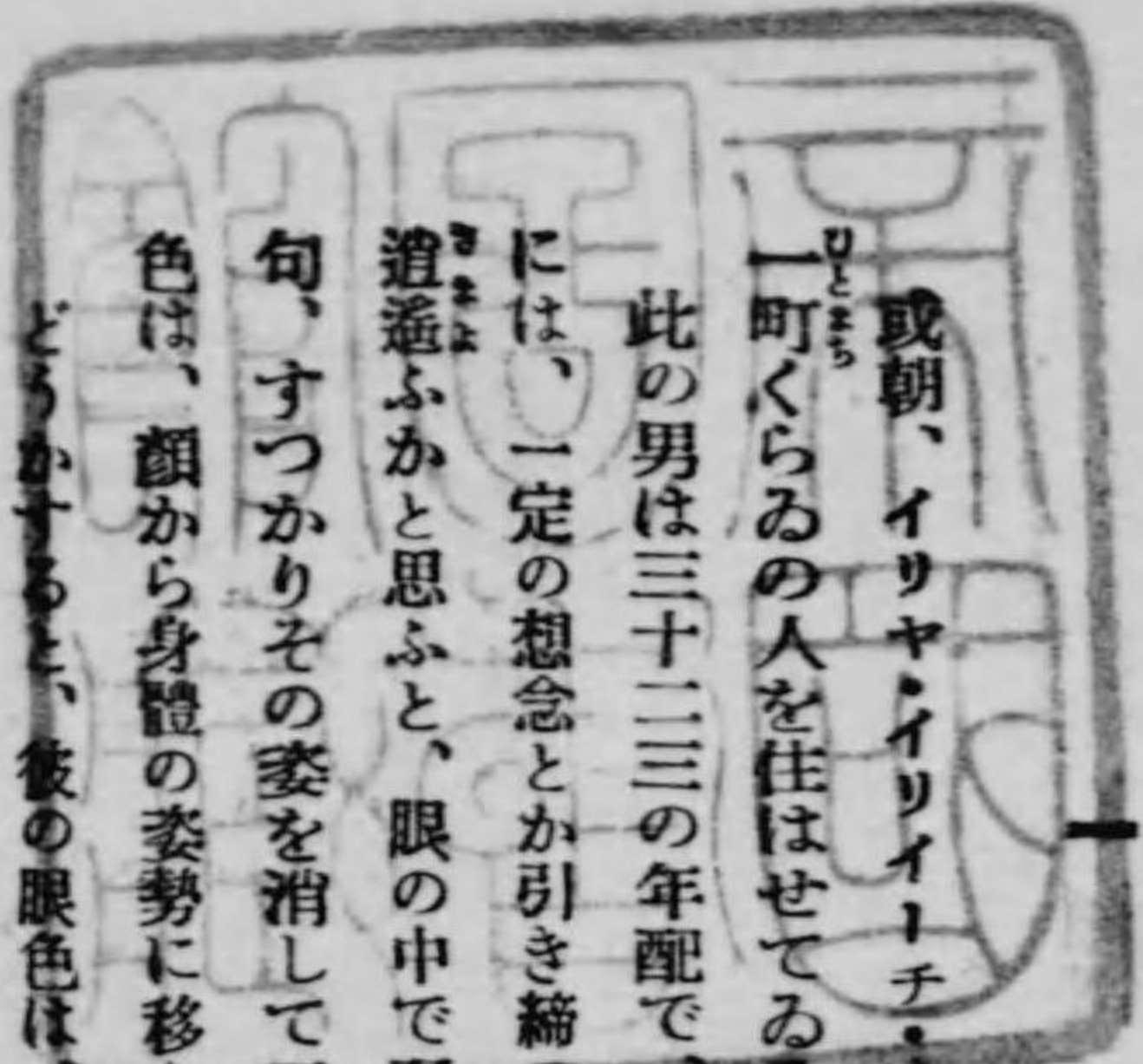
彼が死んだのは千八百九十一年九月十五日で、今ではアレクサンドル・ネフスキイ大聖堂の墓地に安らかに眠つてゐる。

譯者 識

オプローモフ

ゴンチャロフ著
山内封介譯

第一編



或朝、イリヤ・イリイ・チ・オプロモフは、ゴロホーワヤ街道の大きな澤山の家の中でも、殆んど田舎の一町くらの人を住はせてゐる家の自分の借間の寢床の上に横はつてゐた。

此の男は三十三の年配で、中背で、愉快な顔付で、暗灰色の眼を有つてゐた。けれども、彼の顔の輪郭には、一定の想念とか引き締つた表情などは、現はれてゐなかつた。思想は自由な小鳥のやうに、彼の顔を逍遙ふかと思ふと、眼の中で羽叩いたり、半ば開かれた唇の上に止つたり、額の皺の中に隠れたりした揚句、すつかりその姿を消して了ふ。すると、彼の顔ちうには、悠たりとした穩やかな光が漲り、その悠長な色は、顔から身體の姿勢に移り、なほ部屋衣の襪の中にまで移つて行くのであつた。

どうかすると、彼の眼色は、疲労か、でなければ倦怠とでも云ふやうな表情で暗まされることがあつた。けれども、その疲労も倦怠も、彼の顔から、柔か味を一分間でも追ひ拂ふことは出来なかつた。その柔か味は彼の顔ばかりでなく心全體の主要な、そして根本的な表情で、彼の精神は、眼にも、微笑にも、また頭や手の運動にも、必ず判然と明瞭に輝いてゐた。だから、觀察の淺薄で冷淡な人間は、オプロモフをちらり一

目見たゞけで（お人好しに違ひない。單純な人間に違ひない！）と言ふだらう。けれども、もつと深く、もつと同情の眼で彼の顔を永く眺める者は、快い沈思の中に、にこ／＼しながら彼の顔を去ることが出来るに相違ない。

イリヤ・イリイチの顔色は、紅くもなければ淺黒くもなく、かと云つて確に蒼白いと云ふのでもなく、區別して見ようのない色であつた。或はさう思はれたのかも知れない。と云ふのは、オプローモフは、年齢不相應に肥滿してゐたからである。それは、運動の不足か、それとも空氣の不足かによるらしい。いや、その兩方の不足の爲らしい。何れにしても、彼の身體は、艶のない非常に白い頸や、小さなふつくりとした手や、柔らかい肩などから考へて見ると、男にしては餘りに華奢過ぎるやうに思はれた。

彼の舉動は彼が昂奮した時でさへ、例の柔か味と、何となく上品な氣憐れさを保つてゐた。若し、彼の心の底から、心配の黒雲が、彼の顔に押し寄せでもしようものなら、彼の眼は、忽ち眩み、その額には皺が現はれ、疑念と悲哀と驚愕との遊戯が始るのであつた。けれども、此の不安が一定の想念の形に結晶するやうなことは、稀であつた。それが更に意圖に變るやうなことは、猶更稀であつた。そしてどんな不安でも、一度の溜息で解決され、彼が感覺 失ふか、或は假睡（まどろみ）んでゐる中に消えて了ふのであつた。

オプローモフの部屋衣は、彼の顔の落着いた輪郭にも、又彼の華奢な身體にも、非常によく釣合つてゐた。彼の着てゐた部屋衣は、ベルシヤの織物で作つた東洋風そのまゝのもので、房も毛も格好もなく、ヨーロッパ風のところは、少しもなかつた。そして、非常に幅の廣いもので、オプローモフでさへ二巻ぐらゐるそれに

纏（まと）まることが出来た。袖も例の亞細亞流で、袖口の方から肩の方へ段々と廣くなつてゐた。此の部屋衣は、最初の艶を失ひ、その最初の自然の光澤なども、處々他の好都合な色に變つてゐたが、でもまだ東洋染料の鮮かさと、織物の丈夫さとを保つてゐた。

此の部屋衣は、オプローモフの眼から見ると、評價し難い種々な値打を有つてゐた。此の部屋衣は、柔かで靱（かた）々してゐるので、それを着てゐることを身體に感じなかつた。此の部屋衣は、從順な奴隷のやうに、身體の微動にさへ従ふのであつた。

オプローモフは、いつもネクタイも附けず、チョッキも着ずに室内を歩いてゐた。彼は、身體（からだ）が悠（おつ）たりとして自由なのが好きであつた。彼の穿いてゐるスリッパは、長くて柔らかで廣かつた。彼が見もせず、兩足を寢臺の上から床へ降（おろ）す時など、その兩足は屹度一度でスリッパに入つた。

イリヤ・イリイチが身體を横たへるのは、病人か、又は眠たい人間がするやうな必然でもなければ、疲れた者がするやうな偶然でもなく、また懶惰者がするやうな享樂でもなかつた。彼が身體を横たへるのは、彼の常態であつた。彼は、家にゐる時には——殆んど大抵家にゐた——いつも寢てゐた。いつも我々が彼を見出した例の室で寢てゐた。その室は、彼の寢室でもあれば、書齋でもあり、また應接間でもあつた。この外に、彼にはまだ三つの室があつたが、朝召使が彼の書齋を掃除する時、一寸その室へ行くくらゐであつた。しかも、その掃除は毎日ではなかつた。それ等の室にある家具類は、布で覆はれてゐた。窓掛は、みんな降されてゐた。

イリヤ・イリイチの寝てゐる室は、一寸見たところ、非常に美しく飾られてゐるやうに思はれた。其處には、一つの赤木の机と、絹布で覆はれた二脚の長椅子と、自然界にないやうな小鳥や果實を刺繡した美しい額立とが立つてゐた。其處にはまた、絹の幕や、絨毯や、幾つかの額や、青銅や、陶器や、その他種々な細々した美しい品物があつた。

けれども、純粹の趣味を有つた眼利の人は、其處に在る種々な物をチラリと一目見たゞけで、どうにかして避け難い禮儀の decorum を守り、せめて此の禮儀を無視すまいとする希望を讀むことが出来た。オプローモフは、自分の書齋を飾る場合、たゞそのことばかりを心配するのであつた。だが、繊細な趣味は、赤木作りのこんな重々しい優しみのない椅子や、揺ら／＼する本棚で満足させられる筈はない。一つの長椅子の背など、下に垂れ、膠附にした木は、處々離れてゐた。

額や、花瓶や、其他の品物も、皆さうした性質のものであつた。

けれども、主人自身は、自分の書齋の裝飾を至つて冷淡に無關心な態度で眺めてゐた。それは、如何にも（誰が此處へこんな物を持つて来て並べたのだ？）と訊ねてゞもゐるかのやうであつた。で、室内の有様は自分の品物に對するオプローモフの冷淡な態度と、も一つは、その品物に對する彼の下男ザハールの更に冷淡な態度の爲か、書齋の中をよく注意して見ると、如何にも亂雑で、なげやりにされてゐることが分る。

周囲の壁に掛つてゐる額の傍には、埃を附けた蜘蛛の巣が、齒形の飾のやうに粘着してゐる。鏡は、物を映すよりも、寧ろ石板の代用になるくらゐで、その上の埃には、何か書き留めて置くことが出来る。絨毯にも、

澤山な汚點がある。長椅子の上には、置き忘れた手拭が載つてゐる。卓子の上には、大抵の朝は、前の晩の食器や、鹽皿や、紙めまはした核が、載つてゐる。パンの小片なども散ばつてゐる。

若し、此の食器や、蒲團に寄せかけた喫んだばかりのパイプがなく、或はまた、パイプの上に横たはつてゐる主人がゐなければ、其處には、誰も住つてゐないと思はれない。それ程、何もかも埃だらけになつて色が褪せてゐた。つまり、人の住つてゐるやうな生々した痕跡がないのである。尤も、本棚には、二三冊の書物が、開かれたまゝ横たはつてゐる。新聞も載つてゐる。机の上には、インキ壺やペンが載つてゐる。けれども、開かれてゐる書物の頁は、埃に覆はれて、黄色くなつてゐる。餘程前から投げ出されたまゝと見える。新聞の番號も、去年のものである。若し、インキ壺へペンを筒き込みでもしようものなら、その中からは、蠅が吃驚して、羽音を發てながら、飛び出すに相違ない。

イリヤ・イリイチは、平常とは違つて、非常に早く、八時に眼を醒した。彼は、何かひどく心配してゐた。彼の顔には、驚怖ともつかず、また憂鬱や煩悶ともつかぬものが、代る／＼現はれてゐた。確かに、彼は内心の争闘に捉はれて、まだ理智の來援に會はないらしかつた。

心配と云ふのは斯うである。オプローモフは、前日、自分の村の村長から、不快な内容の手紙を受け取つたのである。村長が、どんな不快な事を書いてよこしたかは、分りきつたことで、それは不作、滞納、収入の減少など云ふやうなことである。尤も、村長は去年も、その前年も、丁度斯う云ふ手紙を自分の主人の許へよこしたのだが、しかし今度の手紙は、凡ての不快な突發事件のやうに、ひどくオプローモフを驚かし

たのであつた。

容易な事ではない！ 先づ何等かの手段方法を考へて見なければならぬ。殊に、イリヤ・ハリイイチが自分の仕事について心配をするのは、理由のあることである。數年前、初めて村長から不快な手紙を受け取つた時から、彼は領地取締の改良に就いて、種々な計畫を、頭の中に作り始めたのである。

此の計畫は、經濟や、警察や、その他の點に、種々な新しい方法を實施することであつた。けれども、計畫はまだ十分に練られてゐなかつた。が、村長の不快な手紙は、毎年繰り返されて、オプローモフの活動を促し、結局、彼の安靜を破つたのである。オプローモフは、計畫を終るに先立ち、何か思ひ切つた方法を講じなければならぬことを意識してゐた。

彼は、眼を醒ますや否や、起きて、顔を洗つて、茶を飲んで、良く考へて、何か工夫して、それを書附けようと内心計畫した。つまり、此の仕事に就いて當然爲すべきことを爲ようと計畫したのである。

彼は、此の計畫に苦しみながら、なほ三十分ばかり横たはつてゐたが、やがて、之は茶を飲んでからでも間に合ふ、茶はいつもの通り、蒲團の中でも飲める。のみならず、寢たまゝでも決して考へられぬことはいと判断した。

その通りにした。彼は、お茶を飲んでから、速くも寢床の上に身體を起し、も少しで立ち上らうとした。彼は、スリッパを見ながら、片方の脚をその上に降さうとさへした。が、直ぐにその脚を引つ込めた。

時計は九時半を打つた。イリヤ・ハリイイチはぶる／＼と戰慄をした。

「ほんたうに俺はどうしたんだらう？」と、彼は悲しさうな聲をたてゝ言つた。「あまりひどいぢやないか。もう仕事に取りかゝらなけりや！ 少ししつかりして、そして……」

「ザハール！」と、彼は叫んだ。

小さい廊下でイリヤ・ハリイイチの書齋から隔てられてゐる一室の中に、最初、鎖に繋がれた犬の唸るやうな音が聞え、次に人が何處から飛び降りるやうな音が聞えた。之は、ザハールが寢煖爐の上から飛び降りたのであつた。彼は、微睡に耽りながら、いつもこの寢煖爐の上に坐つて、時を過すのである。

灰色のフロックを着た老耄れた男が室の中へ入つて來た。彼のフロックの脇の下には裂目があつて、其處からシャツの片端が食み出てゐた。彼の着てゐるチヨッキも灰色で、それには、銅製の釦が附いてゐた。彼の頭蓋骨は、膝のやうに禿げてゐたが、その白髪混りの栗色の頬髯は、握り切れない程廣く、そして濃く、一方だけでも、鬚鬚の三倍くらゐもあつた。

ザハールは、神から授かつた自分の姿ばかりか、村にゐる時分から着慣れてゐる自分の上衣さへ變へようとしなかつた。下衣を縫ふ時も、村から持つて來た下衣を手本にして縫つた。灰色のフロックやチヨッキが、彼の氣に入つたのは此の不格好な衣服を着ると、從僕用の衣服を微かながら想ひ出すからである。彼は以前、亡くなつた主人達を、會堂やお客に送つて行く時、その衣服を着てゐたのであつた。で、從僕用の衣服は、彼にオプローモフ家の格式を想ひ出させる唯一の代表者であつた。

淋しい村に於ける地主の手廣い平和な生活状態を、此の老人に想ひ出させるものは、これ以外何にもなか

つた。年老いた主人達は死んだ。先祖代々の肖像畫は、家に残された。多分、天井裏の何處かに横たはつてゐるに違ひない。昔の生活状態や、家系の賤しからぬことに就いての傳説は、次第に消えて行き、ただ僅かに村に残つてゐる少數の老人達の記憶に生きてゐるだけである。だから、灰色のフロツクはザハールにとつて、尊いものであつた。彼は、此のフロツクの中に、それから主人の顔や身振に保存されてゐて、その両親を思ひ出させるやうな或る特徴の中に、そして彼が口の中で、又は口に出して罵つたが、然し、地主の意志と主人の権力との現れとして、内心尊んでゐる主人の我儘の中に、過去に於ける主家の盛大の微かな影を認めてゐたのである。

此の我儘なしに、彼はどう云ふ譯か、主人の権力を感ずることが出来なかつた。此の我儘なしに、彼は、主人の幼年時代と、自分達が疾くに見捨てた村と、此の舊家に就いての傳説と、年老いた召使達や保母達や乳母達が作つて代々傳へた唯一の家庭記録とを懸らせることが出来なかつた。

オプローモフ家は、昔の豪家で、この地方では有名な家柄であつたが、どうした譯か、次第に家産が傾いて、とう／＼新地主の間に認められなくなつて了つた。たゞ胡麻鹽頭の召使達が、お互に過去の確かな記憶を保存し、それを神聖のものとして、尊び傳へてゐるだけであつた。

ザハールが自分の灰色のフロツクを愛してゐたのは、斯う云ふ譯であるが、彼がその頬髯を大切にしているのは子供の時分に、多くの召使達が、斯う云ふ古風な貴族的な裝飾を有つてゐたのを見たからである。

イリヤ・イリイチは、頻りに考へ込んでゐるので、長い間、ザハールに氣が附かなかつた。ザハールは、

彼の前に黙つて立つてゐた。が、ゴホンと遂々咳をした。

「何だ、お前は？」と、イリヤ・イリイチは訊いた。

「お前さま、呼らつしやつたぢやねえか？」

「呼んだ？ 何故呼んだかしら——憶えてゐない！」と、オプローモフは、背伸をしながら答へた。「まあ彼方に行つて居れ。そのうちに想ひ出す。」

ザハールは、出て行つた。が、イリヤ・イリイチは、矢張り横たはつたまま、呪ふべき手紙のことを考へてゐた。

十五分ばかり過ぎた。

「さア、もう寝ちやゐられない！」と、彼は言つた。「起きなけりや……だが、待てよ、も一度村長の手紙をよく讀んで見て、それから起きるとしよう。ザハール！」

再た例の飛び降りる音と、呻くやうな音とが、一層強く聞えた。ザハールが入つて來た。が、オプローモフは、再た考へに沈んでゐた。ザハールは、不機嫌な顔をして少し横眼で主人を見ながら、二分間ばかり立つてゐたが、遂々扉口の方へ歩き出した。

「何處へ行くのだ？」と、オプローモフは、突然に訊いた。

「お前さま、何もおつしやらねえもの、其處に立つてゐたつて何になりますか？」とザハールは腹れ聲を出した。彼には、之れ以外の聲は出なかつた。彼の言ふ所によると、舊主人と一緒に犬を連れて獵に行つた時、

咽喉に強い風を受けて、聲を悪くしたと云ふことである。

ザハールは、室の真中に、半ば身体を振向けて立つたまま、矢張り横眼でオプローモフを眺めてゐた。「でも、まさかお前の足が枯れて、立つて居れないと云ふ譯でもあるまい？ 俺には心配があるのだ——だから一寸待つて呉れ！ もう彼方で寝飽きたらう？ 手紙を捜して呉れ、昨日村長から来たのを。あれを何處へ片附けたのだ？」

「どんな手紙です？ 俺手紙なんか見ましねえだよ。」と、ザハールは言つた。

「お前が、集配人から受け取つたぢやないか。ひどく汚れた手紙だ！」

「それをお前さまが何處へ置いたか——どうして俺知るべえ？」と、ザハールは、卓子の上に載つてゐる書類や種々な品物を、バタ／＼と敲きながら言つた。

「お前は、何事も知つてゐたことがないね。彼處の籠の中を見て呉れ！ それとも、長椅子の陰に落ちてゐやしないか？ そら、まだ長椅子の背が修繕してない。指物師を呼んで修繕して置くやうに言ひ附けたぢやないか？ お前が壊したくせに。お前は何事も考へないのだねえ！」

「俺壊したでねえだよ。」と、ザハールは答へた。「椅子の背は、自然に壊れたんだ。百年も保つ筈はありやしねえ。何時か壊れるにきまつてゐますよ。」

イリヤ・イリーチは、それを反駁する必要はないと思つた。

「どうだ、見附けたか？」と、彼はたゞ之れだけ訊いた。

「これ、この手紙は？」

「それぢやない。」

「でも、外に御座んしねえだ。」と、ザハールは言つた。

「では、もういゝ、彼方へ行け！」と、イリヤ・イリーチは、もどかしさうに言つた。「俺が起きて自分で探す。」

ザハールは、自分の室へ歸つたが、寝煖爐の上に飛び上らうとして、やつと両手を煖爐にかけるかかけないに、再た急い叫聲が聞えた。

「ザハール、ザハール！」

「あゝ、あゝ！」と、ザハールは、再た書齋の方へ行きながら呻いた。「何んと云ふ厄介なことだ？ 一層のこと死んだ方が、なんほいゝか知んねえ！」

「お前さま、何んで御座りやす？」とザハールは片方の手で書齋の扉を握り、うるさいと云ふしるしに、ぐつと横向になつて、オプローモフを見ながら言つた。で、ザハールは、横目で主人を見なければならなかつた。主人には、ザハールの一方の握り切れない程の頬髯だけしか見えなかつた。その頬髯の中からは、小鳥が二三羽も飛び出しさうであつた。

「ハンカチだ、速く！ 大概お前にも察しがつきさうなものぢやないか。分らない奴だね！」と、イリヤ・イリーチは、嚴然として言つた。

オプローモフ

ザハールは、斯うした命令や譴責を受けても、特に不満らしい様子や、驚いた様子を少しもしなかつた。斯うした命令や譴責は、主人にとつて最も自然なものと思つてゐたらしい。

「でも、ハンカチは何處にあるんです？」と、ザハールは、室の中をぐる／＼歩き廻つたり、椅子の上に何にも載つてゐないことが分つてゐるのに、椅子に一々觸つて見たりしながら、呻くやうに言つた。

「何んでも失くしてお了ひなさる！」と、彼は客間の方にありはしないかと、其處の扉を開けながら言つた。

「何處へ行くんだ？ 此處を捜せ！ 俺は一昨日以來其處へ行かない。さア、早く！」と、イリヤ・イリイチは言つた。

「何處へやつたんです？ ありやしませんよ！」と、ザハールは、両手をダラリと下げて、隅々を見廻しながら言つた。「ア、そこにあるぢや御座えませんか。」と、彼は俄かに腹立たしうな唖れ聲を出した。「お前さまの下に！ それ、端が出てゐますよ。自分がハンカチの上に寝て御座つて、そして俺に訊つしやるんだもの！」

そしてザハールは、答を待たずに出て行つた。オプローモフは、自分の手落の爲に、幾らか氣まづくなつた。で、直ぐに他の問題でザハールの罪を責める口實を見出した。

「お前は、何處でも綺麗にして置かね。埃と汚點ばかりぢやないか。そら、あの隅々を御覽。——何もしてやしない！」

「俺、何もしねえが……」と、ザハールは腹立たしうな聲で言つた。「骨は折つてゐますよ。生命も惜まね

えでさ。埃を拂つたり、大概毎日掃いたりして……」

彼は、床の真中や、オプローモフが食事をした卓子を指差した。

「これ、この通り」と、ザハールは言つた。「丁度御婚禮前のやうに、すつかり掃除が出来てゐます……この上、どうしろと言はつしやるだ？」

「だが、之は何んだ？」と、イリヤ・イリイチは、壁と天井を指しながら遮つた。「これは？ これは？」彼は、昨日から投げ出されてゐる手拭や、卓子の上に置き忘れてあるパン片の入つた皿などを指差した。

「これですか。これは片付けやすべえ。」と、ザハールは、丁寧に皿を取り上げて言つた。

「それだけぢやない！ 壁の埃と蜘蛛の巣はどうするんだ？……」と、オプローモフは、壁を指差しながら言つた。

「それは、光明週間迄にとりやすべえ。その時、聖像も掃除し蜘蛛の巣もとりやすべえ……」

「では、書物や額も掃除するのだらうな？……」

「書物と額は、降誕祭前に致しやす。その時、アニシャと一緒に、戸棚も除けて掃除するつもりですがよ。今はそんなものを除けること出来ましねえ。お前さま、いつも家に坐つて御座るだもの。」

「俺は時々芝居やお客に行くぢやないか、その時……」

「夜中にどうして掃除が出来やすべえ！」

オプローモフは、詰るやうにザハールを見た。そして頭を振つて溜息を吐いた。が、ザハールは、平氣で

窓の方を見ながら、溜息を吐いた。主人は斯う思つたらしい。(おい、兄弟、お前の方が俺よりよっぽどオプロイモフだよ)と。けれども、ザハールも斯う考へたらしい。(お冗談でせう！お前さまは變挺な情ないことを言ふ名人だが、埃や蜘蛛の巣なんか、何んとも思つて御座らねえだ)と。

「お前はねえ」と、イリヤ・イリイチは言つた。「埃から蠶魚が湧くことを知らないのか？ 俺は、時々壁に南京蟲がゐるのさへ見ることがある！」

「俺とこには、蚤も居りやすだよ！」と、ザハールは平氣で答へた。

「それがいゝと言ふのか？ 不潔ぢやないか！」と、オプロイモフは言つた。

ザハールは、顔全體に微笑を湛へた。その微笑は、眉や頬髯にまで及び、それが爲に頬髯は、兩側に押し寄せられた。顔ぢうには、丁度眉のあたりまで、赤い斑點が散り擴がつた。

「南京蟲が壁に居れば、どうして俺が悪いのです？」と、ザハールは、無邪氣に驚きながら言つた。「俺が南京蟲を作つたんぢやあるまいし！」

「不潔にして置くからだ。」と、オプロイモフは遮つた。「お前はいつも嘘ばかり言つてゐる！」

「不潔にしたのも、俺ぢや御座んしねえだよ。」

「お前のあの室では、毎晩鼠が駆け廻つてゐる。——よく聞える。」

「鼠だつて、俺が考へ出したものぢや御座んしねえだ。鼠でも、猫でも、南京蟲でも、そんなものは、何處にでも澤山に居りやすだ。」

「では、何故他所には、蠶魚や南京蟲がゐないのだ。」

ザハールの顔には、不審の色が、いや、そんなことはない、と云ふ落着いた確信が現はれた。

「俺とこには、何でも澤山に居りやす。」と、ザハールは頑固に言つた。「とても一匹々取り盡せるものぢや御座んしねえ。」

けれども、内心彼は斯う思つたらしい。(南京蟲がゐなかつたら、この人は、どんなに睡るか知れやしねえ！)

「掃けばいゝぢやないか。塵を隅々から掃き出してはばいゝぢやないか——さうすれば、すつかりゐなくなるんだ。」と、オプロイモフは教へた。

「掃除をしても、明日は散かりやすべえ。」と、ザハールは言つた。

「散かりやしない。」と、主人は遮つた。「散かつてたまるものか。」

「散かりやすとも——俺知つて居りやすだ。」と、召使は言ひ切つた。

「散かつたら、再た掃除をすりやいゝ。」

「何ですつて？ 毎日、隅々を掃除しろ、と言はつしやるだか？」と、ザハールは訊いた。「そんなにして生きてゐねえたつて、一層死んだ方がましだよ。」

「他所はどうして清潔なんだ？」と、オプロイモフは、問ひ返した。「向うの音楽の指揮者の住居を見るがいゝ。非常に綺麗になつてゐる。けれども、女中はたつた一人きりだ……」

「だが、獨逸人は芥なんか出しやしねえ。」と、ザハールは突然反對した。「あの人達がどんな葬し方をしてゐるか見りや分るだ。家族残らずで一週間くらゐ一つの骨を舐つてゐる。フロツクだつて親父の肩から息子に、息子からまた親父に行く。細君や娘達は短い衣服を着て、いつも牝雁のやうに足を縮こめてゐる……あの人は何處から芥を持つて來やすべえ？ それに、あの人はお前さまみたいに着古した下衣を幾年も戸棚の中に山のやうに溜めて置かねえし、またパンのかはだけでも冬の爲に片隅一ぱい溜めてありやす……あの人はパンのかはでも散かさず、それで堅パンを造つて、ビールと一緒に食ふんがす。」

ザハールは斯うした吝くさい生活を思つて、ベツと唾さへ吐いた。

「何もそんなことを言ふにや當らないぢやないか！」と、イリヤ・イリイチは反對した。「お前も拾つて置くがよい。」

「俺ならひよつとしたら拾ふかも知れねえが、お前さまそんなことさせねえだもの。」と、ザハールは言つた。

「馬鹿を言へ、何んでも俺の所爲にしやがる。」

「さうがすよ。お前さまいつも家に坐つて御座るだもの、お前さまが御座るにどうして片附けられやすべえ？ 一日出かけたら片附けるだ。」

「何を言ふのだ——彼方へ行け！ 自分の室へでも行つて居れ。」

「でも、本當ですよ！」と、ザハールは執拗く言つた。「今日でもお前さませえ出て行けば、俺アニシヤと二人ですつかり片附けやすだ。二人で間に合はなけりや、婆さんを雇つて、すつかり拭き掃除をしやすだ。」

「オイ！ 出鱈目を言ふな、婆さんを雇ふなんて！ 自分の室へ行け。」と、イリヤ・イリイチは言つた。

彼はザハールにこんな話をさせるのが不愉快であつた。彼は此のデリケートな問題に一寸でも觸れると、面倒が起ると云ふことをすつかり忘れてゐたのであつた。

オプローモフも清潔にしたかつた。けれども、どうかして自分の目に立たないやうに自然に掃除されるのを望んでゐたのである。ザハールに埃を掃いたり、床を拭いたりすることを要求すると、ザハールは屹度面倒なことを言ひ出す。斯うした場合、彼は家中の大掃除をしなければならぬと言ひ出す。それは斯う言ふことを一寸でも言ふと、主人が恐れ慌てるのをよく承知してゐたからである。

ザハールは出て行つた。が、オプローモフは思案に耽つた。幾分間か過ぎると、時計は更に三十分を報じた。

「やア、これは大變」と、イリヤ・イリイチは殆んど恐慌を感じたかのやうに言つた。「もうすぐ十一時だ。それに俺はまだ起きてゐない。今迄まだ顔も洗はなかつたのだ。ザハール、ザハール！」

「あゝ、あゝ、またか！」と言ふ聲が支關の間の方から聞え、次に例の飛び下りる音が聞えた。

「顔を洗ふ支度は出来てゐるのか？」と、オプローモフは訊いた。

「疾く出来て居りやす！」と、ザハールは答へた。「何故お前さま起きさつしやらねえだ？」

「何故お前は支度が出来たと言はないんだ！ 言へば疾くに起きるのだつた。彼方へ行け、俺も直ぐ後から行く。俺は仕事をしなけりやならない。書きものをしなけりやならない。」

ザハールは出て行つた。が、直ぐに何か書き附けた油染みた帳面と紙片とを持って入つて来た。

「では、書く序に勘定書を確めて下せえまし。金を拂はにやなんねえから。」

「何の勘定だ？ 何の金だ？」と、イリヤ・イリイチは不満さうに訊いた。

「肉屋も青物屋も洗濯屋もパン屋も皆な勘定を戴き度いと申しやすだよ。」

「金の心配ばかりさせるね！」と、イリヤ・イリイチは申いた。「何故勘定書を少しづつ持つて来ずに、一度に持つて来るんだ？」

「お前さまいつも明日にしろ、明日にしろつて俺を追ひ出したぢやねえか……」

「ぢや、今度も明日にしていゝんぢやないか？」

「いけねえだよ！ 手厳しい催促で、もう貸すこと出来ねえと申しやす。今日は朔日だから。」

「あゝ！」と、オプローモフは悲しさに言つた。「新しい心配だ！ だが、何故立つてゐるのだ？ 机の上には置けばいゝぢやないか。直ぐに起きて、顔を洗つてから見る。」と、イリヤ・イリイチは言つた。「顔を洗ふ支度は出来てゐるのか？」

「出来て居りやす！」と、ザハールは言つた。

「ぢや、今……」

彼は起ち上らうとして、呻きながら寢床の上に取り直りかけた。

「俺お前さまに言ふことを忘れてゐやしたが、」と、ザハールは言ひ始めた。「お前さまがまだ寢て御座らつ

しやる時に、支配人が庭番をよこして、是非引越して貰ひたい……部屋が入用だからと言ひやしたよ。」

「で、それがどうしたと言ふんだ？ 入用なら引越すまでぢやないか。何故お前はそんなことを俺に催促するのだ。お前はもうこれで三度もそれを言つた。」

「俺も矢つ張り催促されるからだ。」

「引越すと言つて置け。」

「支配人の方では、お前さまもう一月も前から約束をして、まだ引越さねえから、警察へ訴へると申して居りやすだ。」

「勝手に訴へるがいゝ！」と、オプローモフは判然と言つた。「も三週間も経つて、少し暖くでもなつたら、俺の方から引越すよ。」

「三週間経つて何處へ行きやすだ。家主は二週間すると人夫が来て室を壊すから（明日か明後日のうちに引越して貰ひたい）と言つて居りやすだよ。」

「エツ！ それは餘り急だ！ とんでもないことが起つたものだ、今直ぐ引越せなんて。そんな室のことを俺に言ふな。一度禁じて置いたのに再ただ。困つた奴だ！」

「でも、俺どうしやすべえ？」と、ザハールは答へた。

「どうする？——彼奴は俺を追ひ出したのだ！」と、イリヤ・イリイチは答へた。「俺に當つて見るんだ！ 俺の知つたことぢやない。だからお前は俺を煩はさないやうにして、お前の好きなやうにするがいゝ。たゞ

引越さないやうにするのだ。主人の爲に一骨折つて呉れてもいゝぢやないか。」

「でも旦那様、イリヤ・イリイチさま、俺どうしたらやうがすべえ？」と、ザハールは柔らかない腹れ聲で言ひ始めた。「家は俺のものでなし、追ひ立てを喰へば、他人の家を引拂はねえわけにや行かねえ。若し俺に家でもあれば、それこそ大喜びで……」

「何とかして家主を説き伏せることは出来ないか。(俺達は永年住ひ、家賃も滞りなく拂つたのだから)と言つてさ。」

「言ひやしたよ。」と、ザハールは言つた。

「で、先方はどう言ふのだ？」

「どうつて、(引越して貰ひ度い。室を改築せにやならねえから)つて頭張つてみやすだよ。家主の息子の結婚の爲に、お医者さまの室と此の室とで大きな一室を作りたいんださうで。」

「おや／＼！」と、オプローモフは悲しさに言つた。「あんな驢馬共が結婚をするとは何てことだ！」

彼は仰向に寝ころんだ。

「旦那さま、お前さま家主に一筆書くといゝだがね。」と、ザハールは言つた。「さうすれば、家主はこつちの方をかまはずに、彼方の室から壊し始めるかも知れねえだ。」

ザハールは斯う言ふ時に、片手で何處か右の方を指差した。

「ではよし、起きて書かう……お前は自分の室へ行け。俺は少し考へるから。お前には何も出来やしない。」

と、オプローモフは附け加へた。「こんな詰らないことまで俺が心配しなけりやならない。」

ザハールは出て行つた。オプローモフは考へ始めた。

けれども、彼は村長の手紙のことを考へようか、新しい部屋に引越すことを考へようか、それとも勘定書を整理しようかと思ひ迷つた。彼は満潮して来る生活上の心配の中に、茫然として頻りに寝返りを打ちながら矢張り横たはつてゐた。が、たゞ時々斯う云ふ断々な嘆息も聞えた。「ああ！ 不安な生活だ。何處迄も不安は付き纏つて来る。」

オプローモフがこんな優柔不斷を更に長く續けてゐたかどうか分らないが、兎に角、玄關の間で呼鈴が鳴つた。

「もう誰かやつて来たな！」と、オプローモフは部屋衣に纏まつたまま言つた。「が、俺はまだ起きてゐない——恥かしいことには違ひない！ 誰だらう、こんなに速く来たのは？」

オプローモフは横たはつたまま不審さうに扉口の方を眺めた。

二

二十五歳位の若い男が健康の色に輝き、頬や唇や眼に微笑を湛へながら入つて来た。此の男を見ると羨ましくなる。

彼は綺麗に頭髪を分け、非の打ちやうの無い服装をし、晴々とした顔と下衣と手袋と燕尾服とで人の眼を

射るやうであつた。チョッキには小さな澤山のメタルを附けた美しい鎖が懸つてゐた。彼はボイルの薄いハンカチを取り出して、それに東洋製の香水を吸ひ込ませ、それから、そのハンカチで無雑作に顔と、艶々しい頸とを撫で廻し、そして漆塗の靴を敲いた。

「ヤア、ウォールコフ君かね、今日は！」と、オプローモフは言つた。

「今日は、オプローモフ君。」と、晴々しいお客はオプローモフの方へ近寄りながら言つた。

「近寄らないやうにして下さい、近寄らないやうに、君は寒い處から來ただけだから！」と、オプローモフは言つた。

「おや、我儘者ですね、替澤者ですね！」と、ウォールコフは言つた。彼は帽子を置かうと思つて周圍を見廻したが、何處も此處も埃だらけなので、何處へも置かなかつた。燕尾服の兩方の裾を捲つて腰掛けようとしたが、凝つと安樂椅子を見ると、その儘立つてゐた。

「まだ起きなかつたのですね！ あなたの着てゐる部屋衣は何ですか？ そんなものはもう疾くに廢つて了つてゐるんですよ。」と、彼はオプローモフを恥づかしめた。

「これは部屋衣ではありません、夜衣です。」と、オプローモフは夜衣の廣い裾に親しさに纏まりながら言つた。

「お達者ですか？」と、ウォールコフは訊いた。

「達者なものですか！」と、オプローモフは欠伸をしながら言つた。「どうもよくないのです！ 心配の滿潮

に閉口してゐますよ。が、君は無事ですか？」

「僕ですか？ 無事です、達者で元氣です。——非常に元氣です！」と、若い男は如何にも壯健と元氣とを感じてゐるかやうに附け加へた。

「こんなに早く河處へ行つて來たのです？」と、オプローモフは訊いた。

「服屋へ。どうです、素晴らしい燕尾服でせう？」と、彼はオプローモフの前でぐる／＼と廻りながら言つた。

「立派なものですね！ なか／＼凝つたものだ。」と、オプローモフは言つた。「だが、背後はどうしてこんなに廣いのです？」

「これはレイト・フラックと云つて、乗馬用燕尾服です。」

「成程、さうですか！ でも君は馬に乗れますか？」

「乗れませんが、今日迄に合ふやうに特に燕尾服を注文したのです。今日は五月一日ぢやありませんか。ゴリユノーフ君と馬でエカテリンゴフへ行くのです。あ、君は知らないのですね？ ゴリユノーフ・ミーシャを——僕等は今日素晴らしい服装をするのですよ。」と、ウォールコフは興奮しながら附け足した。

「成程ねえ！」と、オプローモフは言つた。

「彼の男は栗毛を有つてゐるのです。」と、ウォールコフは續けた。「聯隊の者達も栗毛だが、僕は黒です。君はどうします。歩きますか、それとも幌馬車で行きますか？」

「いや……僕は止めます。」と、オプローモフは言つた。

「五月一日にエカテリンゴフへ行かないのですか！ どうしたんです、君、イリヤ・イリイチ君！」と、ウォールコフは驚いて言つた。「誰も彼も皆行くのに！」

「皆つて、そんなことはありませんよ！」と、オブローモフは氣懈さうに言つた。

「いらつしやい、ねえ、君、イリヤ・イリイチ君！ ソフィヤ・ニコラエーウナさんもリディヤさんと二人きりで、幌馬車で行くさうです。けれども、無蓋馬車の方には腰掛がありませんよ。だから僕等と一緒に……」

「いやです、僕は腰掛になんか腰掛けてみられないのです。それに、彼處に行つて何をするのです？」

「では、ミーシャから他の馬を借りたらどうですか？」

「何ですつて、飛んでもない！」と、オブローモフは殆んど獨語つやうに言つた。「君とゴリュノーフ一家とはどんな関係なのです？」

「あゝ！」と、ウォールコフは興奮して言つた。「ぢや、言はうかしら？」

「言ひ給へ！」

「誰にも口外しちやいけませんよ——ほんとですよ」と、ウォールコフはオブローモフの方に向つて長椅子に腰掛けながら續けた。

「御心配なく。」

「僕は……リディヤを戀してゐるのです。」と、彼は囁いた。

「それは面白い！ 何時から？ 彼の女は非常に愛らしいやうですね。」

「もう三週間になるのです！」と、ウォールコフは深い溜息を吐きながら言つた。「それにミーシャはダーシエンカを戀してゐるのですからね。」

「ダーシエンカと云ふと？」

「どうしたのです、オブローモフ君？ ダーシエンカを知らないのですか。街中を擧げて彼女の舞踏に夢中になつてゐるんですよ！ 今日僕はミーシャと二人でバレエを見に行くのです。ミーシャは花束を投げる筈です。彼の男には先生がなくちやいけませんよ、臆病の上に初心でしてね……あゝ、さうだ、カメラヤの花を買ひに行かなければならなかつた……」

「こんどは何處へ行くのです？ 用事が済んだら、晝餐を食ひに来ませんか。話したいことがあるのです。僕には二つの災難が……」

「来られません。チュメネフ公爵のところで晝餐することになつてゐますから。其處には、ゴリュノーフ家の者が皆と、そして彼女も、彼女も……リディヤ（のこゝろ）も行く筈です」と、彼は囁くやうに附け足した。「どうして君は公爵と交際を斷つたのです？ 實に楽しい家庭ではありませんか！ それに裕福な暮しでね！ さうだ、別荘だ！ 花の中に埋まつてゐるんです！ 廻廊もゴシック式でね、夏には、舞踏會があつて、生きた繪畫を展開するさうです。君も行きませんか？」

「いや、僕は行くまいと思ひます。」

「あゝ、何んと云ふ家だらう！ 此の冬なんか、水曜日毎に五十人以下のことはありませんでしたよ。どう

かすると百人くらゐ集まることも……」

「あゝ！ そんな退屈は地獄の退屈です！」

「何が退屈です？ 人数が多いだけ、餘計に面白いぢやありませんか。リディヤも其處に来てみました。僕はそれに氣づかなかつたが、突然に……」

忘れんとすれども、忘れ得ず、

心の焔を鎮めんと思へど……

彼は斯う歌ふと、喪心したやうに安樂椅子に腰掛けた。が、俄かに衝と立ち上つて、衣服の埃を拂ひ始めた。

「君のそこはほんとに埃だらけですわね！」と、彼は言つた。

「ザハールが相變らずでね！」と、オプローモフは訴へた。

「さア、出かけよう！」と、ウォールコフは言つた。「ミリーシャの花束を作るカメラリヤの花を買ひに *à la Revoyr*

(左様なら)

「ぢや、今晚バレーの歸りにお茶を飲みませんか、そして劇場での出来事を話して呉れませんか。」と、オプローモフは招待した。

「来ることは出来ませんね。ムシンスキイの所へ行く約束をしてありますから。今日は彼の家の記念日なんです。君も行きませんか。お望とさへあれば、御紹介しますが！」

「もう結構です、行つてもしやうがありませんから？」

「ムシンスキイのそこへ？ 冗談ぢやありませんよ、彼處には街中の人の半數が出入してゐるんです。其處へ行つてもしやうがないと云ふんですか？ あの家へ行けば、種々な話が聞けますよ……」

「それは、その種々な事を聞くのが退屈なのです。」と、オプローモフは言つた。

「では、メズドロフの家を訪ねて御覽なさい。」と、ウォールコフは遮つた。「彼處ならば一つの問題の、つまり藝術問題の話ばかりです。ウェネンヤ派だとか、ペートペン・ダ・パフだとか、レオナルド・ダ・ウキンチなどゝね……」

「いつも同じ問題では——退屈でたまりませんね！ 術學者だと見えますわね！」と、オプローモフは欠伸をしながら言つた。

「では、君の氣に入りますか。外にもまだ澤山いゝ家がありますがね、此頃では何處の家でも日を定めて晩餐會をやります。サウキーノフ家では毎木曜日に晩餐會があるし、マクラシン家では金曜日に、ウヤズニコフ家では日曜日に、チュメネフ公爵家では水曜日に晩餐會があるでせう。但し僕のところには毎日です！」と、ウォールコフは眼を輝かしながら話を結んだ。

「さうして毎日々々隔けづり廻るのは、君には退屈ではありませんか？」

オプローモフ

「退屈！何が退屈です？愉快でたまりませんね！」と、彼は平気で言つた。「朝は新聞を讀んで、E. Co. Hunt (社会の潮流) とニュースを知らなければならぬし、僕の職務は幸に、始終出勤しなければならぬと云ふ譯ではなし、たゞ一週に二度將軍の傍に坐つて晝食をするだけで、次には永く顔を出さなかつた家を訪問すればいいのです。それからロシア劇場へ行つても、フランス劇場へ行つても、新しい女優があるでせう。オペラが始まると、觀覽券を豫約する。そして今ではもう戀をしてゐます……夏にはな　て來ますしね。そのうちにミーチャも休暇が貰へるさうですから、一ヶ月ばかり二人で村へ行つて、少し變つた生活をして來るつもりです。獵をしたりしましてね。彼處には立派な人達が居りますから Bals Champêtres (田舎の舞踏會) を開くさうです。リダイヤとは森の中を散歩したり、小舟に乗つたり、花を摘んだり……あ！……」彼は嬉しさに夢中になつた。「だが、もう時間だ……失禮します。」と、彼は言つて、埃だらけの鏡に自分を映して、頻りに前後を見ようとした。

「一寸待つて呉れ給へ。」と、オプローモフは呼び止めた。「君に話したいことがあるのです。」

「Pardon (失禮) そんな暇はありませんね。」と、ウォールコフは慌てゝ言つた。「この次にしませう！だが、どうです、僕と一緒に牡蠣を食ひませんか？その時に話を聞かせませう。一緒に行つて、ミーシャに奢らせようぢやありませんか。」

「いや、僕はもう澤山です！」と、オプローモフは言つた。

「ぢや、失禮します。」

ウォールコフは出て行つたが、一寸振り返つた。

「これを見ましたか？」と、彼はびつたりと手袋に包まれた片手を差出しながら訊いた。

「何です、それは？」と、オプローモフは不思議さうに訊いた。

「新流行の Lacs (紐) ですよ！どうです、この締りかたは。鈕を絞める爲に二時間も苦しまなくともいゝのです。紐を引張るともうこの通りです。これはバリーから來たばかりの品で、お望みなら、君にも、試みに一組持つて來ませうかねえ？」

「有難う、持つて來て下さい！」と、オプローモフは言つた。

「では、これはどうです、本當に可愛らしいものでせう？」と、ウォールコフは澤山のメタルの中の一つを探し出して言つた。「片隅を折り曲げた名刺ですよ。」

「何が書いてあるか、分りませんか。」

「Pr. Prince M. Michel (プリンセス・ミッシェル) と、ウォールコフは言つた。「だが、姓のチュメネフは書き込んでありません。これはチュメネフが復活祭に卵の代りに僕に呉れたのです。失禮します M. P. (左様) 僕はまだ十箇所ばかり行かなけりやならない。あゝ、この世の中は何んと云ふ愉快なことだらう！」

彼は姿を消した。

「一日に十ヶ所も——不幸な人間だ！」とオプローモフは考へた。(而かもこれが生活なのだ！) 彼は強く兩肩を窄めた。(斯うした生活の何處に人間があるだらう？ 彼は一體何に興味を有ち、何に熱中してゐるのだ

らう？ 無論、劇場に行くのも悪くはない。リディヤとか云ふ女を戀するのも結構だ……その女は愛らしい女に相違ない！ 村でその女と花を摘んだり、舟に乗つたりするのもいい。が、たゞ、一日に十ヶ所も訪問するとは——不幸な人間だ！ 彼は仰向に寝轉び、自分がそんな空虚な希望や考へを有つてゐないこと、自分がそんなに醜態せず此處に横たはり、自分の人間としての價値と安靜とを失はずにゐられることを喜びながら斯う考へを結んだ。

新たに呼鈴の音が彼の思索を破つた。

新しいお客が入つて来た。

このお客は紋章入の釦の附いた濃緑色の燕尾服を着てゐた。滑らかに剃られたその顔は、黒味が、つた頬髯で釣合よく縁どられてゐた。眼には、疲勞したやうな、然し落着いた意識的な表情が浮んでゐた。つる／＼と艶のいゝ顔には、考へ深い微笑さへ漂つてゐた。

「やあ、ステイビンスキイ君かね、今日は！」と、オブローモフは快活に挨拶をした。「昔の同僚にやつと會へたわけだ！ だが近寄らないでお呉れ、近寄らないで！ 君は寒い所から来たのだから。」

「今日は、イリヤ・イリイチ君。僕は疾うから君のそこへ来ようと思つてゐたんだが、」と、客は言つた。

「君も知つてゐる通り、僕等の勤務はあゝいふ惨めな仕事だらう！ この通り、僕は靴一パイの書類を持つて報告に行くのだ。今でも、若し彼處で何か急用が出来る、使者に言ひ附けて此處に呼びに来るかも知れない。一分間でも自分の身體になる暇はないんだ。」

「君はまだ勤めてゐるのかね？ どうしてこんなに遅いのだ？」と、オブローモフは訊いた。「十時からではなかつたかね……」

「さうだつたがね、今では仕事が変わつたので、十二時に出勤すればいいのだ。」

彼は最後の言葉に力を入れた。

「あゝ！ 分つた！」と、オブローモフは言つた。「課長になつたのだね！ 何時から？」

ステイビンスキイは意味あり氣に點頭した。

「復活祭頃から」と、彼は言つた。「だが大變な仕事だ。やり切れないね！ 八時から十二時までは家で執務し、十二時から五時まで役所で事務を執り、晩も夜なべと云ふ始末だ。人間の仲間からすつかり脱してやつた！」

「ふむ、課長か——素晴らしいものだ！」と、オブローモフは言つた。「お目出度う！ 何課長だね？ 一緒に勤めてゐたのだがなア。來年は勅任官に昇進すると思ふねえ。」

「冗談ぢやない！ 僕は今年うちに月桂冠を得るつもりだつた。(功勞)を上申されると思つてゐた。所が、もう新たな地位を得たのだから六ヶ敷いよ、二年も續けては……」

「晝餐に來ないかね。昇進の祝盃を挙げよう！」と、オブローモフは言つた。

「いや、今日は副監督のところ晝餐を食ふんだ。そして木曜日まで報告書を作らなけりやならない——惨めな仕事さ！ 地方からの申告書を信用するわけに行かないのだ。自分で一々書類を調べなけりやならな

い。フオマ・フオミーチは、何でも自分でやると云ふ猜疑家だからね。では、今日晝餐後に一緒に話さうぢやないか。」

「晝餐後に？」と、オプローモフは不審さうに訊いた。

「では、君はどう思ふんだ？ もつと早く遁れて、エカテリンゴフにでも行けるやうならなはいよ……さうだ、僕は君がピクニックに行くかどうかを訊かうと思つて寄つたんだよ。僕はそれを訊かうと思つて寄つたのだ……」

「少し加減が悪いから行けない！」と、オプローモフは顔に皺を寄せながら言つた。「それに仕事が澤山あつてね……、だから僕は行けない！」

「氣の毒だねえ！」と、ステイビンスキイは言つた。「だが、天氣は好し、せめて今日だけでも氣晴しをしたらどうだね。」

「何か珍らしい話でもあるのかね？」と、オプローモフは訊いた。

「種々なことが澤山にあるよ。僕に手紙をよこす者は(草々)と書くのを止めて、(頓首再拜)と書くやうになるし、出勤簿を二部づゝ出せと云ふ命令がなくなると、僕の方に三脚の机と、二人の特務官吏とが付け足されるし、例の委員會は閉鎖されるし……種々なことがあるよ！」

「では、以前の僕等の同僚はどうしたね？」

「別段變りはないが、スウキンキンは失策したよ！」

「本當かね？ 監督官はどうしたね？」と、オプローモフは慄へ聲で訊いた。

オプローモフは古い記憶を想ひ出して怖しくなつたのである。

「審問が済むまで、賞與停止を命じたよ。(懲戒に關する)重大事件なんだ。監督官はね、」と、ステイビンスキイは殆んど囁くやうに附け加へた。「彼の失策を……故意だと思つてゐるのだ。」

「そんなことはないだらう！」と、オプローモフは言つた。

「さうだとも、無駄な疑ひだよ。」と、ステイビンスキイは如何にも勿體らしく、そして庇護するやうに言明した。「スウキンキンは風のやうな頭の持主だからね。どうかすると君、飛んでもない計算をしたり、再調査を取り違へたり、僕も呆れて了ふよ。だが、あんなことの出来る男ぢやない……奴さんの故意ぢやない、仕事は何處かにまぎれ込んでゐるんだ、後で分るよ。」

「さう云ふ風ぢや、随分骨が折れるね！」と、オプローモフは言つた。「よく働けるねえ。」

「怖ろしいことだ、怖ろしいことだ！ でもね、フオマ・フオミーチのやうな人物と一緒に働くのは面白いねえ。賞與を貰ひ損ねることはないし、何もしない者があつても、それを決して忘れないしさ。一期を好成績に終ると表彰を上申するし、一期を終つて位階にも十字章にもありつかなかつた者には、金の心配をするし……」

「君は幾ら貰つてゐるのだね？」

「さうだね、俸給が千二百留に、特に食費として七百五十留、宿舍費が六百留、補助費が九百留、出張費が

五百留、それから賞與金が千留までくらゐさ。」

「へえ！ 素晴らしいものだ！」と、オプローモフは寢床から飛び起きて言った。「君は聲がいきいのかね？ まるでイタリヤの歌ひ手のやうぢやないか？」

「こんなことが何んだ！ あのベレスウエートフなんか加俸まで貰つてゐるよ。それで、仕事は僕より少ないのだ。又、何も考へてゐやしない。だから、僕程の評判でもない。僕は大きいに認められてゐるのだよ」と、彼は眼を瞑りながら控目に附け加へた。「此間なんか、大臣が僕のことを斯う言つたよ、(全省の飾)だつてさ。」

「偉い者だね」と、オプローモフは言つた。「だが、八時から十二時まで、十二時から五時まで、それに家でも働くと云ふことだけは、どうも餘り感心しないね！」

彼は頭を振つた。

「でも、若し僕が勤め人にならなければ、何をすればいいだらう？」と、ステイビンスキイは訊いた。

「澤山あるぢやないか！ 読んでもいいし、書いてもいい……」と、オプローモフは言つた。

「僕が今してゐることだつて、矢張り讀んだり、書いたりばかりだよ。」

「そんなことぢやない、著述をするんだよ……」

「でも、誰でも著述家になれるものぢやないからね。早い話が、君でさへ書いてはゐないぢやない？」と、ステイビンスキイは反對した。

「その代り、僕は領地を處理してゐる。」と、オプローモフは溜息を吐きながら言つた。「新しい計費を考

へてゐるのだ。種々な改革を實行しようと思つてね。それで、随分苦心してゐるよ……が、君は自分の事ではなく、他人の事をやつてゐるぢやないか。」

「どうも仕方がないよ、金をとる爲には働かなけりやならないからね。だが、夏には休暇があるんだ。フォマ・フォミーチは僕の爲に故意と出張命令を出す約束をしてゐるんだ。さうなると、馬五頭代と、一晝夜三留づゝの宿泊料と、それから賞與が貰へると云ふものだ……」

「なか／＼甘くやつてるなあ！」と、オプローモフは羨ましさうに言つて、纏て溜息を吐いて考へ込んだ。

「金が要るんだよ、秋には結婚をするのだから。」と、ステイビンスキイは附け足した。

「なに、君、本當か？ 誰と？」と、オプローモフはむきになつて言つた。

「本當だとも、ムラーシナヤとさ。別荘で僕の近所に住んでゐたが、知つてるだらう？ 君は僕の許でお茶を飲んだ時に、確か見た筈だ。」

「いや、知らない、美人かね？」と、オプローモフは訊いた。

「あゝ、愛らしいよ、どうだね、彼女の家へ晝餐を食ひに行かうぢやないか……」

オプローモフは口吃つた。

「さうか……よし、でも……」

「來週の中にね。」と、ステイビンスキイは言つた。

「さうだ、さうだ、來週にしよう。」と、オプローモフは喜んだ。「僕の衣服がまだ出來上らないから。どう

だ、良い連中かね？」

「あゝ、親父は現に勅任官で、一萬留の俸給を買つて、官邸に住んでゐる。僕等の爲に官邸の半ばを、十二の室を提供して呉れるんだ、家具も官のものだし、暖房費も燈火代も矢張り官費だ。相當な生活が出来ると云ふ譯さ……」

「さうだ、出来るね！ 愈々ステイビンスキイも偉い者になつたね！」と、オブローモフは幾分羨ましそうに附け足した。

「イリヤ・イリイチ君、婚禮の時は、附添人として招待するよ、見て呉れ給へ……」

「それは是非！」と、オブローモフは言つた。「だが、クズネツォフとワシリエフとマホフとはどうしたね？」

「クズネツォフは疾くに結婚をしたし、マホフは僕の跡に坐るし、ワシリエフはポーランドに轉任になつたよ。それからイワン・ペトロウキチはウラディミル勳章を買ふし、オレーシキンは閣下になつて了つた。」

「あの男は小さい善人だつたがね！」と、オブローモフは言つた。

「善人だ、善人だ、確かに善人だ。」

「非常に善人で、性質が優しくつて、冷靜な男だ。」と、オブローモフは言つた。

「それに、非常な律義者でね。」と、ステイビンスキイは附け足した。「君も知つてゐる通り、お阿諛を使つたり、邪魔をしたり、脚を浚つたり、先廻りをしたり……出来るだけのことは、何でもやると云ふ風が、少しもなくつてね。」

「立派な人間だね！ 書類をこつちやにしたり、すつかり目を通さなかつたり、意見でも規則でもない事を書き込んだりするやうなことがあつても、何とも言はずに、それを他人に作り變へさせるんだものね。實に偉い人だよ！」と、オブローモフは言葉を結んだ。

「が、あのセミヨン・セミヨイヌイチね、あれも頑固な男だよ」と、ステイビンスキイは言つた。「ただ眼の中に埃を入れることの名人さ。近頃、奴さんこんな事をしでかしたよ。地方からね、我省管下の諸官廳附屬として大小屋を作り、官有財産の盜難を防ぐやうにしてはどうかと云ふ上申書が來たのだ。すると例の建築家だ。例の適任者、博識家、廉潔家がだね、非常に格好の豫算を立てたんだ。所が突然、その豫算を大きいやうに思つて、遂々大小屋の建築がどれだけの價值があるかを調査することにした。何處かに三十哥だけ減らす處を見附けて——直ぐに報告書を……」

再び呼鈴が鳴つた。

「ぢや、失敬するよ。」と、官吏は言つた。「餘り饒舌り込んで了つた。役所の方に何か用事があつたかも知れない……」

「まあ、一寸待つて呉れ給へ」と、オブローモフは引止めた。「序に、君に相談したい事がある。僕には二つの災難があるんだ……」

「いや、再た近いうちに寄るとしよう。」と、彼は出て行きながら言つた。

(あの親愛なる友も笹り込んだ。耳迄笹り込んで了つた)と、オブローモフはウォールコフを見送りながら考

へた。(世界に於ける他の凡てに對して、彼は盲目で、聾者で、啞者だ。だが、人並に認められ、時代に相當する仕事をし、巧みに官界を游泳するやうになるだらう……我國では之を矢張り經歷だと言つてゐる！が、そんな經歷には人間はあんまり入用がない。そんな經歷に、人間の智慧と意志と感情とは何になる？ 贅澤品に過ぎない！ それでも一生は過される。動搖の少ない生活だ……が、その代り、十二時から五時までは役所で働き、八時から十二時迄は家で働くのだ——不幸な人間だ！)

彼は九時から三時まで、八時から九時まで、自分の長椅子の上に坐つて居れると云ふ平和の喜びを感じ、報告書を持つて行つたり、書類を書いたりする必要のない事を自慢し、自分の感情と想像との自由を誇つた。

オプローモフは冥想に耽つてゐたので、自分の蒲團の傍に、頬髯と、口鬚と、下唇の髭とを一面に生やしたひどく瘦せた色の淺黒い男が立つてゐるのに氣附かなかつた。その服装には、故意とらしい無頓着が現はれてゐた。

「今日は、イリヤ・イリイチ君。」

「今日は。ペンキン君ですか、近寄らないで呉れ給へ、近寄らないで。君は寒いところから來たのだから！」と、オプローモフは言つた。

「あなたは奇人ですね！」と、其の男は言つた。「相變らず手のつけられない暢氣な懶惰者ですね！」

「暢氣なものですか！」と、オプローモフは言つた。「今村長から來た手紙を見せますがね、僕は散々に頭を悩ましてゐるのです。何が暢氣なものですか！ 何處へ行つたのです？」

「本屋へ行つて來ました。雑誌が出たかどうかと思つて。あなたは僕の論文を読みましたか？」

「いゝえ。」

「送りますから読んで下さい。」

「何を書いたんです？」と、オプローモフは大きな欠伸をしながら訊いた。

「商業問題や、女子解放問題や、美しい四月の自然や、何でも手當り次第に書いたんです。それから、新發明の消防組織に就いても論じて見ました。速く読んで御覽なさい。我々の日常生活に關係があるのですからね。だが、文壇に於ける寫實的傾向の爲に一番力を入れて論じて置きました。」

「御多忙ですか？」と、オプローモフは訊いた。

「非常に多忙です。新聞には、毎週二度も論文を書くでせう。それに小説家の批評も書くし、また短篇も書きますからね……」

「どんな筋です？」

「或る町で、町長が町民達を散々に敲きつけたと云ふ筋なんです……」

「成程、それは本當に寫實的傾向ですね。」と、オプローモフは言つた。

「さうでせう！」と、文士は嬉しさうに言つた。「僕は或る思想を述べるつもりなのですがね、それが新思想で、また危険思想だと云ふことも知つてゐます。一人の通りがりの人が、此の喧嘩の實見者なのです。實見者は縣知事に會つた時、その出來事を彼に訴へる。知事は一人の官吏を派遣して、それとはなく此の事件

を調査させ、主に町長の人物と行爲に就いての情報を集めさせる。官吏は、商業に就いて調査すると云ふ態にして町民を召集し、その實、此の事件を調べようとする。町民達はどうしたかと云ふと、彼等はお辭儀をしたり、笑つたりして、頻りに町長を讃める。で、官吏は他の方面に行つて調べると、町民達は怖ろしい詐欺師で、腐つた物を賣つたり、秤を盗んだり、或は租稅さへ誤魔化したりする。皆破廉恥漢で、之が爲めあんな喧嘩が起つたので——あれは當然の罰だと云ふ者がある。」

「つまり、昔の悲劇作者の『ミジミ(命)』のやうに、町長の喧嘩が小説になると云ふ譯ですわね？」と、オプローモフは言つた。

「さうですとも。」と、ベンキンは話を奪つた。「あなたにも十分に才能がありますから、イリヤ・イリイーチ君、あなたも書いたら如何です！ 私にさへ、町長の獨斷と、平民間の風紀の紊亂とを現はすことが出来たのです。屬僚の組織的な悪行と、嚴格で正當な懲戒方法の必要とを現はす事が出来たのです……全く此の思想は……随分新しいでせう？」

「さうです、殊に僕にとつて。」と、オプローモフは言つた。「僕は餘り讀みませんからね……」

「本當に、あなたの許には書物がありませんね！」と、ベンキンは言つた。「だが、之だけは是非讀んで戴きたいものがあるのです。それは詩とでも云ひませうか、素晴らしいもので、今出来かゝつてゐるんですよ。(淪落の女と收賄者の戀)と云ふのですがね。その作者が誰であるかと云ふことは言へません。まだ秘密なんですから。」

「それは、何を書いたものなんです？」

「我國に於ける社會運動の機械主義を徹底的に暴露したものです。詩的色彩の中にです。凡ての被條に觸れ、社會的階梯の凡ての段階を取扱つたものです。作者は、意氣地がなくつて癖の悪い大官や、大官を欺く多くの收賄者などを、法廷にでも召喚するやうに呼び集めてゐます、種々な淪落の女も解剖されてゐます……フランスの女やドイツの女やフィンスの女や其他種々の女がです……それが驚くべき生々した正確さで解剖されてゐるのです。僕はその一部分だけを聞きましたが、實に作者は偉大ですね！ ダンテやシエクスピヤを聞くやうですわね……」

「いや、實に感服しました！」と、オプローモフは驚きの餘り少し身體を起して言つた。

ベンキンはオプローモフがひどく感動してゐるのに氣ついたので、俄に黙つた。

「あなたも讀んで御覽なさい、分るでせうから。」と、ベンキンはもう昂奮なしに附け足した。

「いや、ベンキ君、僕は讀みません。」

「何故です？ あれは騒がれて、皆に持囃されますよ……」

「それは勝手に囃すがいい。或る人達にはたゞ騒ぐより外、することがないのだから。それが使命なんだから。」

「でも、せめて好奇心からでも讀んで御覽なさい。」

「よく分つてゐますよ！」と、オプローモフは言つた。「彼等は何の爲に書くかと云ふと、それはたゞ自分を

喜ばせる爲です……」

「自分の爲か何か知らないが、正確なことは實に正確です！可笑い程よく似てみますよ。丁度生きた肖像畫のやうなものです。商人でも、役人でも、將校でも、巡查でも、誰を取つても構はない、まるで生き寫しです。」

「作者達の心を躍らせるものは、どんな人間を描いても、それを如實に描くことが出来たと云ふ喜びです。然し、それには生命がない。生活の理解も同情もない。我々の所謂人道主義もない。あるものは、たゞ自愛心ばかりです。女を襲うた盜賊を描いても、その盜賊は直ぐ街道で捕縛され、牢獄に連れて行かれる。彼等の小説には、(隠れた涙)が響いてゐない。たゞ愚昧な嘲笑と憎悪だけが現はれてゐるのです……」

「では、どうすればいゝのです！ あなたの御意見は立派です。が、それは沸騰してゐる憎悪です！ 惡癖に對する抑へ難い嫌悪です。墮落した人間を輕蔑することに對する嘲笑です……それに過ぎないのです！」

「いや、それ丈ではありません！」と、オプローモフは俄に興奮して言つた。「盜賊でも、淪落の女でも、傲慢な馬鹿者でも、それ等を描くのは結構だが、其處に人間を忘れて貰ひたくないのです。人間性は何處にありますか？ 君は頭丈で書かうとするのです！」と、オプローモフの聲は殆んど嘎れてゐた。「君達は思想の爲めに感情は要らないと思つてゐるのですか？ いや、思想は愛によつて結果するものです。墮落した人間に手を伸べて、それを引き上げ、墮落した人間が亡びるならば、その者の爲に心から泣いてやるがいゝ。決して嘲笑つてはならない。墮落した人間を愛し、自分自身をその中に見出し、自分のやうにその者を取扱ひ

給へ。さうすれば、僕は君達のものを読み、君達の前に頭を下げる……」と、オプローモフは再び靜かに長椅子の上に横たはつて言つた。「作者は盜賊や淪落の女を描く。」と、彼は言つた。「が、人間を忘れてゐる。描き得ないのかも知れない。あなたは其處にどんな藝術とどんな詩的色彩とを見出しますか？ 放蕩と醜汚とを責めるのはよいが、たゞ詩に對する不平を止めて貰ひ度いのです。」

「だが、自然を描く場合は、薔薇や鶯や或は酷寒の朝などを描く場合は、つまり周圍に沸騰し、動揺してゐる凡てを描く場合は、どうでせう？ 我々には、たゞ社會の赤裸々な生理學だけが必要なので、今歌を作つてはゐられないのです……」

「人間を、僕に人間を見せて下さい」と、オプローモフは言つた。「人間を愛して下さい……。」

「高利貸や偽善者や盜賊や愚鈍な官吏を愛せよとおつしやるのですね？ そんなことが出来ますか？ あなたは文學を研究しないと見えますね！」と、ベンキンは興奮して言つた。「さうです、あんな人間は罰しなければなりません。市民の中から、社會から投り出さなければなりません……」

「市民の中から投り出すんですつて！」と、オプローモフは感激の餘り、俄にベンキンの前に立ち上つて言つた。「それは、この無用の器の中に最高原理が存在してゐるのを忘れることです、それは破壊された人間だが、矢張り君達と同じであると云ふ事を忘れるのです。投り出す？ 君達は人類の範圍から、自然の懷から、神の慈愛から彼等を投り出すことが出来ると思ひますか？」と、彼は燃えるやうな眼をして殆んど叫ぶやうに言つた。

「いや、全く感服しました！」と、今度はベンキンが感動して言った。
 オブローモフはベンキンがすっかり感服したのを見て急に黙った。そして一寸立つてみたが、欠伸をして
 静かに長椅子の上に横たはった。

二人は沈黙した。

「あなたは何をお読みですか？」と、ベンキンは訊いた。

「僕ですか……さうですね、相變らず旅行記ばかり。」また沈黙に入つた。

「では、詩が出版されたら読んで戴けるでせうね？ 持つて来ますから……」と、ベンキンは訊いた。
 オブローモフは頭で厭だと云ふしるしをした。

「ぢや、僕の短篇を送りませうか？」

オブローモフは同意のしるしに黙頭うなづいた。

「さうだ、もう印刷所へ行かなければならない！」と、ベンキンは言った。「が、僕が何の爲に此處へ来たか
 御存じですか？ あなたにエカテリソフ行を勧めようと思つて来たのです。僕の許もとに馬車がありますから
 ね。僕は明日遊山に就いて論文を書かなければならないのです。で、あなたと一緒に觀察して、僕の氣附か
 なかつた點を、あなたに教へて戴くことにするのです。愉快ですよ。行かうぢやありませんか……」

「いやです、氣分が悪いんです。」と、オブローモフは顔に皺を寄せ、蒲團とんぼに纏まとまりながら言った。「濕氣が
 怖いのです。今、まだすっかり乾燥していませんからねえ。それよりか君、今日晝餐ランチに来ませんか。少し話

したいことがあるのだが……僕には二つの災難があるので……」

「いや、今日は我が編輯部員全部あのセン・チョールチのとこへ行つて、其處からピクニックへ行くことにな
 つてゐるのです。そして夜中に書き上げて、夜明までに印刷所へ送らなければなりません。左様なら。」

「左様なら、ベンキン君。」

（夜書いて）と、オブローモフは考へた。（何時寐るのだ？ が、待てよ、一年に五千留リウも残のこる！ これはバ
 ンだ！ さうだ、不斷に書くこと云ふことは、詰らない事に自分の思想と精神とを費し、信念を變へ、智慧と
 想像とを露さらき、自分の天性を壓迫し、波立ち、沸騰し、燃焼し、安靜を失ひ、そして常に何處かへ動いて行
 くことだ……さうだ、車輪のやうに機械のやうに不斷に書くがいゝ。絶えず書くがいゝ。明日も明後日も書
 くがいゝ。お祭になつても、夏が來ても——矢張り彼は書くがいゝ。何時止めるのだ。何時休息するのだ？
 不幸な人間だ！）

彼は卓子の方に頭を振り向けた。卓子には、相變らず何も載つてゐなかつた。インキも乾き、ペンも見え
 なかつた。彼は、生れたばかりの赤兒のやうに、何の心配もなく横たはつてゐることや、齟齬そごしないことや、
 何物をも賣らないことを喜んだ……

（だが、村長の手紙と借間は？）と、彼は俄かに想ひ出して考へ込んだ。

が、再また呼よびが鳴つた。

「今日はどうして斯あう忙しいのだらう？」と、オブローモフは言つて、誰が入つて來るか待つてみた。

オブローモフ

入つて来た人は、年齢も判然せず、人相も判然せず、何處位か容易に見當がつかない年配の男であつた。その顔は美しくもなければ、醜くもなく、その背は高くもなければ、低くもなく、その頭髪は薄茶色でもなければ黒味が、つてもゐなかつた。自然はこの男に、醜くいか或は美しいとか、要するに際立つて眼につくやうな輪郭を與へなかつたのだ。大概の者は、この男をイワン・イワヌイチと呼んでゐた。或る者は、イワン・ワシリイチと呼び、また或る者はイワン・ミハイリイチと呼んでゐた。

彼の姓も、矢張り種々に呼ばれてゐた。或人はイワノフだと言ひ、或人はワシリエフだとか若くはアンドレーエフと呼び、また或人はアレクセーエフだと思つてゐた。初めて彼に會つた他人など、彼の名前を聞いても直ぐに忘れて了ふ。顔も忘れる。彼が何を言つたかそれにも氣が附かない。彼が居るからと云つて、人々は何も得る所はない。彼がゐないからと云つて、何も失ふ所がないやうに。彼の身體に何の特徴もないやうに、彼の智慧にも、何の頓智も獨創も特質もない。

少なくとも、彼は自分の見聞したことを物語る事が出来るだらう。またその物語で他人に興味を興へることも出来るだらうが、然し彼は何處へも行つたことがなかつた。自分の生れたベテルブルグ以外に、何處へも旅行したことがなかつた。だから、彼が見聞したことは、誰でも皆な知つてゐることであつた。

斯う云ふ人間は思遣り深いだらうか？ 戀をしたり、嫉妬をしたり、煩悶をしたりするだらうか？ 戀もするだらうし、また煩悶することもあるに相違ない。何故かと言へば、斯う云ふことは、誰にもあるからである。けれども、斯う云ふ人間は、凡ての人を愛しようと云ふやうな狡猾な考を起すものだ。どんなに續に

觸つても、決して敵意や復讐心を起さない人がある。さうした人間はどんなことをしても、いつも機嫌がいい。けれども、さうした人間の愛は、それに度を刻んで見るのに、決して沸騰點に達しないことだけは、確かなことだ。斯う云ふ人間は、凡ての人を愛してゐるから、善人だとは云ふものゝ、本來誰も愛してゐるのではないから、たと悪人でないと云ふ程度に於て善人なのである。

斯う云ふ人間の前に、他人が乞食に施物を與へると、この人間も乞食に鏗錢を投げてやるが、若し他人が罵つたり、追つ拂つたり、嘲笑つたりすると、その人達と一緒に矢張り罵つたり、嘲笑つたりする。さうした人間を金持と云ふことは出来ない。何故なら、彼は金持ではなく、寧ろ貧乏だからである。けれども、又ひどい貧乏人とも言へない。何故なら、彼より貧乏な者が澤山にあるからである。

彼は年に三百留くらゐの或る収入を有つてゐる。のみならず、何か詰らぬ職務に就いてゐて、僅かの俸給を買つてゐる。大した貧乏もしてゐないし、誰にも借金もしてゐない。が、彼に金を借りようなど云ふ考は、決して誰の頭にも浮ばない。

彼は職務上でも特別の仕事や不慮に有つてゐることがない。何故かと云へば、同僚や上官は、彼が何に不得手で何に得手であるかを認めて、彼にその得手な仕事を言ひ附けることが出来ないからである。若し何でも構はずにやらせると、彼はいつも上官が彼の仕事に對して應答するのに困るやうなことをしでかす。上官は幾度もよく見、幾度もよく讀んだ揚句、(もうよろしい、俺が後で見ると…)それに、その書類はもうそのままでいゝのだ。)と言ふよりしやうがない。

何んでも、彼が今自分自身何を語つてゐるかを示すやうな配慮と空想との跡を、彼の顔に決して捉へることは出来ない。また彼が何か外部の事物に對して燃えるやうな視線を注ぎ、それを自分の智識の獲物にしよらとするやうな點も、彼の顔に決して認めることは出来ない。

知人が彼に街道で會ふ。「何處へ行くんです？」と訊く。彼は役所に行くとか、商店に行くとか、または誰かを訪問するのだと云ふ。知人が「僕と一緒に郵便局に行かうぢやないか」とか、若くは「洋服屋に寄らう」とか、或はまた「散歩をしよう。」など、言ふと、彼はその知人と一緒に歩き、服屋にも寄れば、郵便局へも行く。自分が行きつゝあつた方向と全然反對な方面へでも散歩に出かける。

彼が此の世に現はれたのに氣附いた者は、恐らく彼の母親の外に誰もあるまい。彼が生れて以來、彼を認めた者も甚だ少ない。彼が此の世から消え去つても、それは誰にも認められないに違ひない。また誰も彼のことを訊きもしなければ、惜みもしない。彼の死を喜ぶ者もあるまい。彼には、敵も親友もない。が、知人は澤山ある。で、葬式だけは、通行人の注意を惹くに相違ない。通行人はこの見知らぬ人物を尊敬して、最初の敬意を——丁寧なお辭儀を——拂ふだらう。或る好奇な通行人などは、死者の名前を知らうとして、葬式の前へ走つて行くだらう。けれども、その名前は直ぐに忘れて了ふに相違ない。このアレクセイ、ワシリエフ、アンドレーエフ、或は何の名前でもいゝが、兎に角この人は、民衆と云ふものに就いての一種の不完全な、そして非人格的な暗號であり、微かな反響であり、その不鮮明な反映であつた。門前會議や商店などで、主人を訪問する大勢のお客の性格批評を公然にやるザハールでさへ、その批評の順番がこの人……アレクセ

イエフとでもして置く……に廻つて來ると、いつも困却するのであつた。彼は、長い間考へ、長い間捫めさうな或る角張つた輪郭を、此の人の容貌や身振りや性格から捉へようとするが、遂には手を振つて斯う言ふのである。「だが、あの人には、皮も顔色も目立つた所もありやしねえ！」

「おや！」オブローモフは彼を迎へた。「アレクセイエフ君でしたか？ 今日。何處へ行つたのです？ 近寄らないで下さい、近寄らないで。手を出しませんよ。君は寒いところから來たのですから！」

「何を言ふのです、寒いものですか！ 私は今日あなたのとこへ來るつもりではなかつたのですがね。」と、アレクセイエフは言つた。「オブチーニンに會つて、先生のとこへ連れて行かれたのですよ。そして、イリヤ・イリイチ君、あなたを迎へに來たんです。」

「何處かへ行くのですか？」

「オブチーニンのとこへです。行かうぢやありませんか。マトウエイ・アンドレーウキチ・アリヤノフ君も、カヂミール・アリベルトウキチ・ブハイロ君も、ワシリーイ・セワスチヤヌイチ・コルイミヤーギン君もあそこに来てゐるんです。」

「何の爲めに集まつたんです。そして僕に何の用事があるのです？」

「オブチーニンがあなたを晝餐に招待するのです。」

「ふむ！ 晝餐に……」と、オブローモフは單調に繰り返した。

「それから皆でエカテリンゴフへ行くのです。一同はあなたに馬車を雇つて載せたいと言つてゐます。」

「彼處へ行つて一體何をされるんです？」

「何をするつて、今日は彼處の遊山日です。お存じないのですか、今日は五月一日だと云ふことを？」

「まア、一寸掛けて下さい。考へて見ませう……」と、オブローモフは言つた。

「それより起きたらどうです！ もう衣服を着換へてもいゝ時分ですよ。」

「一寸待つて下さい。まだ早いぢやありませんか。」

「早いものですか！ 一同は、十二時までに来て戴きたいと言つてみました。少し早めに、二時頃晝餐を食べて、遊山に出掛けようと言ふのです。速く行きませう！ あなたに衣服を着せるやうに言ひ附けたらどうです？」

「衣服を着て何處へ行くのです？ 私はまだ顔も洗つてゐないので。」

「ぢや、顔をお洗ひなさい。」

アレクセーエフは室の中を彼方此方と歩き始めた。それから、以前幾度となく見たことのある額の前に立つたり、チラリと窓の方を眺めたり、本棚から何か取り上げて、それを両手で廻しながら四方から眺め、そして再たそれを置いたり、口笛を吹きながら再た彼方へ歩いて行つたりした。それは、オブローモフが起きて顔を洗ふのを邪魔しない爲であつた。斯うして十分間ばかり過ぎた。

「どうしたんです？」と、俄にアレクセーエフはオブローモフに訊いた。

「何が？」

「まだ寝てるぢやありませんか？」

「でも、別段起きる必要はないぢやありませんか？」

「何故です！ 私達を待つてゐるんですよ。あなたは行きたいと言つたぢやありませんか。」

「何處へ行くのです？ 僕は何處へも行きたいなどと言やしませんよ……」

「イリヤ・イリイチさん、たつた今あなたはオフチーニンのところへ晝飯を食ひに行つて、それからエカテリンゴフへ行くと言つたぢやありませんか……」

「こんなに濕々してゐるのに行つたつて、別に珍らしい物もありやしない、それにこの通り雨模様で、戸外は曇つてるぢやありませんか。」と、オブローモフは氣懈さうに言つた。

「空には、雲の影さへありません。雨になるなんて、飛んでもないことです。あなたのとこの窓硝子は、近頃磨いてないから曇つたやうに見えるのです。随分硝子が汚れますね！ これぢや戸外はまるつきり見えませんね。それに一方の窓掛は、殆んど降されてゐるんですよ。」

「そんなことをザハールのところへ行つて言つてご覧なさい、それこそザハールは直ぐ婆さん達を雇はせて、僕を終日家から追ひ出して下さすよ。」

オブローモフは考へ込んだ。が、アレクセーエフは茫然と眼を壁や天井に走らせながら、自分の前にある卓子を指先でバタ／＼と敲いた。

「では、結局どうなんです？ 衣服を着換へるのですか、それともこのまゝでゐるのですか？」と、アレク

セーエフは幾分かの後に訊いた。

「何です？」

「エカテリンゴフへですよ……」

「それは、君がエカテリンゴフへいらつしやるのは勝手ですが」と、オブローモフは悲しげに答へた。「一體、君は此處にゐたくないのですか？ 室の中が寒いのですか、それとも厭な臭でもするのでですか、何故君はそんなに戸外ばかり見てゐるんです？」

「いや、私はいつもあなたのところにあるのが愉快なんです。私は満足です。」と、アレクセーエフは言つた。「若し此處がよかつたら、どうしてそんなに他の處へ行きたがるんです？ 今日一日僕のところで暮して、晝餐でも食べては如何です。そして彼處へは晩にでも行つたらいいでせう！……さうく、忘れてゐましたが、何處へも行けないのです！ タランチエフが晝餐にやつて來ますから、今日は土曜日でね。」

「さう云ふ譯なら……私がよく……あなたのおつしやつた通りに……」と、アレクセーエフは言つた。

「僕は自分の出來事を、まだ君に言はなかつたでせうか？」と、オブローモフは活氣づいて訊いた。

「どんな出來事なんです？ 知りませんね。」と、眼をきよつとさせながらアレクセーエフは言つた。

「僕が何故こんなに長い間起きないかと云ふと、僕は此處に斯う寝てゐて、どうして此の災難から遁れ出ようかと考へてゐるからです。」

「何事です？」と、アレクセーエフは故意と驚いたやうな顔附をしながら訊いた。

「二つの災難があるので、僕には之をどうしていいか分らないのです。」

「どんな災難が？」

「室から追ひ出されるんです。考へてもご覽なさい——引越さなければならぬんです。壊したり、騒動をしたり……考へるさへ怖ろしい！ 八年間も此の室に住んでゐたのですからね。家主は（至急引越して貰いたい）など、實に怪しからぬことを言ふのです。」

「では、速い方がよいですな！ 急ぐ方には、必要になつたんでせう。尤も、引越は非常に厭なことには違ひありません。引越にはいつも種々な心配は付き物ですから。」と、アレクセーエフは言つた。「紛失したり、打ち壊したり——實に迷惑なものですよ！ それに、此の室は實に良い室ですからねえ……非常な損害ですよ。」

「他にこんな室は探せませんか。」と、オブローモフは言つた。「その上急いでは。乾燥した暖かい室でも、家の中も静かで、盗難に會つたことも、たつた一度しかありません。あの天井なども、丈夫ではないらしく、壁土もすつかり剥げた——が、まだ落ちませんからねえ。」

「失禮ですが」と、アレクセーエフは頭を振りながら言つた。

「で、引越さないやうにするには……どうしたらいいでせう？」と、オブローモフは考へ込んだまゝ、獨語つやうに言つた。

「あなたは、此の室を契約書で借りたのですか？」と、アレクセーエフは天井から床まで室ぢろを見廻しな

がら訊いた。

五六

「さうです。けれども、もう契約の期限が切れたので、近頃では月々に拂つてゐますが……何時からだつたか記憶しません。」

「で、あなたはどうか考へてはみませんか？」アレクセーエフは暫く沈黙した後で斯う訊いた。「引越しますか、それとも動きませんか？」

「まだ何とも考へてはみません。」と、オブローモフは言つた。「僕はそんなことを考へたくないのです、ザハールが何とか考へるでせうよ。」

「だが、中には非常に引越し好きの人もありますがね。」と、アレクセーエフは言つた。「室が變ると云ふたつたそれだけに満足を感じるのですね……」

「さう云ふ『人達』は、引越すのもいゝでせうが、僕はどんな變化でも忍び得ないのです！ 室などの騒ぎぢやないんですから！」と、オブローモフは言ひ始めた。「まあ見て下さい、村長がこんなことを言つてよこしたのです。今その手紙を見せますが……何處へ行つたかしら？ ザハール、ザハール！」

「あゝ、面倒な！」と、ザハールは暖爐から飛び降りながら、嘎れ聲を出して獨語つた。「何時になつたら神様が俺を迎へに御座るやら？」

彼は室へ入つて、曇つた眼附で主人を見た。

「何故お前は手紙を探さなかつたのだ？」

「でも、俺、何處搜すべえ。お前さまの要ると言はつしやるなア何の手紙だか、俺、知らねえだもの。字が見えねえだから。」

「何んでもいゝから搜せ。」と、オブローモフは言つた。

「お前さま、昨夜何の手紙だか讀んで御座らつしやつたぢやねえか。」と、ザハールは言つた。「其後俺、見ねえだよ。」

「その手紙は何處にあるんだ？」と、オブローモフは悲しさに逆らつた。「俺がその手紙を呑んで了つた譯ぢやあるまいし、お前が俺のところから持つて行つて、何處か彼方に置き忘れてるに違ひない。だから、何處にあるか、よく搜して見ろ！」

彼は蒲團を振つた。蒲團の折目から手紙が床の上へほとんと落ちた。

「それ、その通りだ。俺の所爲にして！」

「よし、よし、行け、行け！」オブローモフとザハールとは、同時に斯う叫び合つた。

ザハールは出て行つた。オブローモフは手紙を讀み始めた。その手紙は、灰色の紙にクワース(サイダーのやうな飲料水)か何かで書いたもので、粗末な封蠟の封印がくつつ付いてゐた。大きな蒼白い文字が莊嚴に、お互に衝突り合はないやうに、上の隅から下の隅まで封に添うて行列してゐる。そしてその文字の行列は、所々蒼白い大きなインキの汚點で亂されてゐる。

(惠深き旦那様)とオブローモフは讀み始めた。(我等の父、我等の保育者なる尊きイリヤ・イリイチ様足

オブローモフ

五七

下へ……)

斯う讀んで、オプローモフは幾つかの挨拶や見舞の文句を抜いて、中程から讀み續けた。

(我等の保育者なる且那樣の御慈悲により申上候。御領地内には何の變りも無之候へども、主神様の御怒りにや最早五週間も降雨無之、老人等さへ嘗て知らざる程の早魃にて、春蒔の麥など火にて焼かれたるが如くに相成り候。冬作も或る箇所は害蟲に傷められ、或る箇所は時ならぬ寒氣に害はれ候に付、春蒔にしかへ候へ共、これ亦收穫あるや否や甚だ疑はしく候。ただ吾々は主神様の御恵が且那樣に臨むことのみ祈願致し、自分共のことを少しも顧慮仕らず、死をも意とせざる決心に有之候。然るにイワノフの日に、更に三名の百姓失踪致し候。それはラブテフとバロチヨフと、それにかのクツネツオフの息子ワシカに候。私事家内共を遣してその亭主等を追跡致させ候へ共、女井も歸村仕らず、聞くところによれば、チエルキ村に居住致し居るとのことに候。チエルキ村にては外國製の鋤を使用し居る由に付、私の叔父は支配人の命によりウエルフリヨウオ村よりチエルキ村へ赴き、その鋤を視察し参り候。私は失踪百姓に就き教父の意見を聞き、駐在所長に歎願し候處、署長は「願書を出せ、さうすれば、農民共を屋敷の住家に連れ歸る方法が凡て遂げられる。」との外に何事も申さず候に付、私は署長の足下にひれ伏し、流涕懇願仕り候へ共、署長はたゞ「下れ、下れ! 願書さへ出せば遂げられると言つたではないか!」と怒鳴るのみに候ひき。私は願書を提出致さざりしも、當地には雇人無之、皆なウオルガや出稼や船場等に参り居り候。吾々の父にして保育者なるイリヤ・イリイチ様、昨今當地の人間共は、斯かる愚者と相成り申候。それに、今年は吾々の麻布も、織場と染色

場を閉鎖致し、スイチエグに晝夜監視させ居る如き始末に付、定期市に持ち出すこと能はず候。スイチエグはなか／＼しつかりした百姓に候へ共、且那樣の品物を一つも失はざる爲、自身もこの男を晝夜監視致し居り候。他の者共は日夜飲酒し、年貢を納めず、滞納は集まらず、爲に今年は、慈悲深き且那樣、例年より二千留だけ少なく御送金申上候。若し早魃にも拘らず、全部損害無之候へば、其の折追加送金致すべく先は取敢へず右御報告申上候。)

次には心服の言葉と署名が書いてあつた。その署名は(最も賤しき奴僕、村長プロコフイイ・ウイチヤグーシキンは、其の手を此處に置く)と書き、字が書けない爲に十字架が書いてあつた。また(村長の義兄弟デームカ・クリウオイが村長の言葉を書き取りたるものに候)とあつた。

オプローモフは手紙の末尾を見た。

「年月日を書いてない。」と、オプローモフは言つた。「此の手紙は、去年から村長の手許にあつたものと見える。イワノフの日だとか早魃だとか書いてゐるが、何時のことを言つてるのだ!」

オプローモフは考へ込んだ。

「どうです?」と、彼は續けた。「君は(二千留少なく)と言ふことを何と考へます。幾ら残る譯でせう? 私は去年幾ら受け取つたでせう?」と、オプローモフはアレクセーエフを眺めながら訊いた。「僕は其の頃、君に言はなかつたでせうか?」

アレクセーエフは眼を天井に向けて考へ込んだ。

「ストーリーリツが来たら、彼の男に訊いて見なけりやならない。」と、オプローモフは續けた。「七千留か八千留だつたと思ふが……困つたことには、書き留めて置かなかつた！ して見ると、村長は六千留しか送つて呉れないんだ！ 僕は飢えて死んで了ふ！ どうして暮して行けるだらう？」

「イリヤ・イリイーチさん、何故そんなにびく／＼するのです？」とアレクセーエフは言つた。「決して失望してはいけません。物事は案ずる程のことではないものですからね！」

「でも、今讀んだやうな次第で、村長は何とかして送金して私を慰めなけりやならないのに、平氣で僕の氣に喰はないことをするのです！ それが毎年なんです！ 殊に、今度なんか餘りひどい！（二千留ばかり少ない）なんて！」

「實際、莫大な損害ですわね！」と、アレクセーエフは言つた。「二千留と云ふと、端金せんだいではありませんからね！ アレクセイ・ローギンなども今年は一萬七千留受け取るところを、一萬二千留しか受け取らなかつたさうです！」

「でも、それは一萬二千留で、六千留ぢやない。」と、オプローモフは遮つた。「村長は僕をすつかり破産させたのです。たとへあの手紙が本當で、不作と早魃だつたとしても、なにも前以て僕に心配をかけなくてもいゝぢやないか。」

「無論……あの手紙は本當でせう……」と、アレクセーエフは言ひ始めた。「何も疑はしい點はありませんが、百姓にそんなデリケートな注意を要求するのは、無理ではないでせうか？ 百姓なんて云ふ者は、何も

分らないのですからね。」

「では、君が若し僕の立場にあつたらどうしますか？」と、オプローモフは疑問の眼でアレクセーエフを見ながら、彼が何か安心の出来る方法を考へ出しはしないかと云ふ甘い希望を以て訊いた。

「イリヤ・イリイーチ君、それは一寸考へて見なけりや。急に決めることは出来ませんねえ。」と、アレクセーエフは言つた。

「縣知事に陳情したらどうでせう！」と、オプローモフは考へ込んだまゝ言つた。

「あなたの方の縣知事は誰です？」と、アレクセーエフは訊いた。

イリヤ・イリイーチは答へずに考へ込んだ。アレクセーエフも腰を卸して、矢張り何かを考へてゐた。オプローモフは手紙を兩手で押し揉みながら、その手で頭を支へ、兩腕を膝の上につき、無益な思案の來

襲に苦しめられながら、暫く腰掛けてゐた。

「ストーリーリツでも速く来てくれるといゝが！」と、オプローモフは言つた。「近いうちに來ると云ふ手紙をよこして置いて、何處を彷徨うろたてゐるのだ！ 彼ならうまく片付けて呉れるに違ひないが。」

彼は再び悲しげな顔附をした。二人は長い間黙つてゐた。が、遂々オプローモフの方が先に我に歸つた。「さうだ、何んとかしたけりやならない！」彼は決心の色を見せながら斯う言つて、も少しで蒲團から飛び起きようとした。「出来るだけ速くしなけりやならない。逡巡ぐんぐんしてはゐられない……第一に……」

この時、玄關の呼鈴が絶望的な音を發て、鳴つた。で、オプローモフとアレクセーエフとは、ブル／＼と

身標をしたが、ザハールは直ぐに寢殿から飛び降りた。

三

「在宅かね？」と、誰か玄關で大きな聲で亂暴に訊いた者があつた。
「今頃、何處へ行きやすべえ？」と、なほ一層亂暴にザハールが答へた。

四十格好の男が入つて来た。何方かと言へば、大柄の方で、背も高く、肩や胴などもつぶりと大きく、どつしりした顔附で、大きな頭と、頑丈な短かい頸と、ギョロツとした大きな眼と、それから厚い唇とを有つてゐた。この男を一寸見ると、粗雑で不潔とでも云ふやうな觀念が生れて来る。此の男が華美な衣服を纏うてゐないことも直ぐに分る。彼が綺麗に髯を剃つてゐるのを見るやうなことは滅多にない。が、彼にとつてそんなことはどうでもいゝらしかつた。彼は衣服のことなどを気にせず、自分の衣服に對し、一種の犬儒學派的な價值を認めてゐた。

此の男はミハイ・アンドレウキチ・タランチエフと云つて、オプロモフの同郷人であつた。

タランチエフは半ば輕蔑するやうに、また周圍の凡てに對し露骨に憎惡の念を現はしながら氣六ヶ敷い顔附をして周圍を見た。彼は世の中の凡ての物と凡ての人々とを罵りたいと言つたやうな、非道な恥辱を受けでもしたやうな、若くは自分の眞價を認められない者のやうな、そして又運命の迫害によつて強固な性格を造り、厭々ながらも何の悲しみもなく運命に服従してゐる者のやうな態度であつた。

彼の動作も大膽で、てきばきしてゐた。彼は大聲に、元氣よく、いつも怒つてゐるのかと思はれるやうに饒舌つた。少し離れた所で彼の話を聞くと、三臺くらゐの空馬車が、橋の上を通つてゐるのかと思はれる程であつた。彼はまた誰の前でも遠慮をしなかつた。言葉の使ひ方などにも、てんで頓着しなかつた。彼は親友とは勿論のこと、誰とでも亂暴な話方をするのが例であつた。それは、人と話をしてゐる時や、または人のところで晝餐か若くは晚餐を御馳走になつてゐる時にも、非常な敬意を拂つてゐるのだと云ふことを、相手に感じさせる爲めらしかつた。

タランチエフは敏捷な、そして狡猾な智慧を有つてゐた。實社會のどんな實際問題でも、若くはどんな紛糾した法律問題でも、彼以上に判断し得る者は一人もなかつた。彼はその何れの場合でも、直ぐに實行の理論を作り、非常に細密にそれを立證したが、最後には、殆どいつも彼に相談を持ちかけた者に、暴言を吐くのが例であつた。

彼は二十五年ばかり前、或る事務局の書記を奉職し、爾來この職務を執りながら、頭が胡麻鹽になるまで暮して来たのである。で、自分自身にも、また他の何人にも、彼がそれ以上に立身出世しようとは思へなかつた。

それは、タランチエフが單に能辯家に過ぎなかつたからである。彼は何事でも、殊に他人に關したことから、言葉の上で易々と判然解決するが、さて指を動かしたり、身體を動かしたりする段になると——言ひ換へれば、彼が作つた理論を實行し、それを實際に進行させ、順序よく敏速に片附けて了はうとする段になる

と——彼は全く別人であつた。其時彼は何をすることも出来なかつた。——忽ち大儀になつたり、病氣になつたり、手の付けようのない他の事件が起つたりするのである。若しそれに手を付けようものなら、どんなことをしでかすか分りやしない。宛然、赤子のやうなものだ。あれを遣らせても、眼が利かない。これを遣らせても、些細なことさへ知らない。たとへ遣つても遅れるか、或は半ばで投げ飛して了ふのが結末である。また終りまで遣つても、それは出鱈目で、訂正することも出来ないやうにしてさふ。揚句の果は喧嘩である。彼の父は、舊時代の地方裁判所書記であつた。で、彼は他人の出来事を喰ひ物にする方法手腕と、自分が巧に通過して来た役所の勤め口とを自分の息子に譲ればよかつたのに、運命の配劑はこれを許さなかつた。曾て露西亞流の地味な學問をした父親は、自分の息子が時代に後れることを好まず、息子には他人の出来事を喰物にする賢明な學問以外に、何か學ばせたかつた。で、父親は息子を三年間坊さんのとこへやつて、羅甸語を學ばせた。

天性器用な子供のタランチェフは、三年間で羅甸語の文法と文章學とを終つた。で、彼はコルネーリイ・ネボートを研究し始めるつもりであつたが、父親は息子の知つただけに満足し、これだけの智識が息子を昔の露西亞人より數等優れた者にすると思ひ、これ以上に學問させることは、寧ろ裁判所の職務を害するものと決めた。

十六歳になつたミヘイは、自分の學んだ羅甸語をどう使つていゝか分らないので、親の膝下にゐる時分から、徐々その羅甸語を忘れ始めた。が、將來區裁判所か、若くは地方裁判所に出勤する榮譽を擔ふ爲に、父親

が宴會へ行く時には乾度ついで行つた。そしてこの宴會と云ふ學校で、種々な露骨な話を聞きながら、この若い人間の智慧は、微妙な發達を遂げた。

彼は青年の感受性で、父やその友人達が民事上の問題や、刑事上の問題や、舊時代の斯うした書記の手で處置される種々な興味ある事件に關して話してゐるのを聞いた。

が、こんなことは、何の役にも立たなかつた。ミヘイの父親は彼を實際家、官界游泳家に仕立てようと努力したに拘らず、彼はさう云ふ者にならなかつた。勿論、若し運命が老人の野心を破壊しなければ、ミヘイは或は成功の榮冠を贏ち得たかも知れない。實際、ミヘイは父親の話をすつかり呑み込んで、ただそれを實際に應用するばかりになつたのであるが、父親の死の爲め、裁判所に入りそこね、或る慈善家に連れられてベテルブルグへ行つた。所が、その慈善家は彼に或る官廳の書記の後を見付けてやつて、そのまま彼のことを忘れて了つた。

斯う云ふ譯で、タランチェフは一生生涯理窟家となつた。ベテルブルグで勤めてゐる時、彼は自分の羅甸語を何に使用することも出来なかつた。また正當な事なり、或は不正當な事なりをその緻密な理窟で自分の考へ通り實行することが出来なかつた。が、彼の中には或る眠つた力があつた。彼は之れを意識してゐた。その力と云ふのは、その反對な事情の爲に永久に彼の中に閉ぢ籠められ、狭い魔力ある壁の中に、書する力を失つた悪靈が閉ぢ籠められてゐると云ふ物語のやうに、もう永久に外へ出る望がなかつた。タランチェフが他人との應對に粗暴で、無愛想で、いつも腹立ち易く、罵詈雑言を事とするのは、或はこの無益な力が自分

の中にあることを意識してゐる爲かも知れない。

彼は自分の現在の職業、即ち書類の書き移しや仕事の後始末を非常な憎悪と輕蔑との眼で見つてゐた。そしてたゞ一つ最後の希望だけが、彼の前途に微笑んでゐた。それは酒類租借事業に移ることであつた。此の道に彼は父親から譲られて、而かも到達することの出来なかつた地位に代る唯一の有利な代償を見出したのであつた。が、これを待つてゐる間に、父親によつて彼に準備され組み立てられた活動と實生活の理論、收賄と奸計の理論は、地方に於て有利で適當な場面を見通したので、ペテルブルグに於ける彼の貧弱な生活の凡ゆる些事に適用された。彼には公の關係が少なかつたので、此の理論は彼の凡ての友人關係中に喰ひ込んで行つた。

彼は理窟上からばかりでなく、心底からの收賄者であつた。そして仕事や嘆願者がなければ、同僚や友人からさへ狡猾に收賄した。何の爲めと云ふことはなく、何處でもまた誰でも構はず、これはと思へば、或は狡猾手段や強請を用ひて自分に御馳走をさせたり、皆から不相應な尊敬を要求したり、言ひ懸りをつけたりするのであつた。彼は衣服の不潔などには一向頓着しなかつたが、一日の中に相當な分量の葡萄酒と火酒ウイスキーの付く大晚餐會に出會すことを非常に怖れてゐた。

斯う云ふ譯で、彼は自分の友人仲間では、有力な番犬の役を勤めてゐた。この番犬は誰にでも吠えついて、彼等を立ちすくませた。が、同時に肉片が如何なる處から如何なる處へ飛ぶ場合でも、屹度宙で之を受け止めるのであつた。

これがオプローモフの所の最も熱心な二人の訪問者であつた。

この二人の露西亞のプロレタリアは、何の爲めにオプローモフの所へ来るのだらう？ 彼等は何の爲であるかをよく承知してゐた。飲んだり、食つたり、上等の葉巻を煙らしたりする爲めであつた。彼等はオプローモフのところ、いつも變らぬ温かい靜かな安息所と、楽しくはないにしても、平靜な接待とを見出したのであつた。

けれども、オプローモフは何故彼等を近づけたのだらう——彼はこのことに就いて明瞭に考へて見たことはない。が、多分、我が遠いオプローモフカ村の給福などの家でも、パンなく、職業なく、仕事をするに手なく、たゞ要求する胃の腑と、それから大抵は位階勳等を有つた斯う云ふ男女の群が集まつてゐたからだらうと思はれる。

尤も、生活の中に斯うした補充物を必要とする道樂者もある。彼等は世間に餘り者がないと退屈なのだ。若し餘り者があなければ紛失した煙草匣を誰が持つて来て呉れるだらう？ 誰が床に落ちたハンカチを拾つて呉れるだらう？ 誰に頭痛がするからどうかして呉れと訴へることが出来よう？ 誰に悪夢を物語つて、その解釋を要求することが出来よう？ 誰が睡たい時に書物を読んで、睡りを援けて呉れるだらう？ 所がどうかすると、さうしたプロレタリアの中には、近くの町まで買物に行つて、一家の用事を援け——自分で駈け廻らずに濟むやうにして呉れる者がある。

タランチエフはひどく騒がせて、オプローモフを動かし、彼を倦怠から引き出した。彼は怒鳴つたり、議

論をしたり、何か見世物のやうなものを作つて、懶惰な主人に饒舌つたり、仕事をしたりする必要を與へなかつた。夢と平靜とが領してゐる室の中に、タランチエフは生命と動搖とを齎らし、時には外部からの報知をも持つて來た。オプローモフは指一本も動かさずに、自分の前を動いたり、饒舌つたりする元氣のいゝ何者かを聞き、そして見る事が出來た。のみならず、彼はタランチエフが眞實に何か有益な忠告をする才能を有つてゐるのだと眞つ正直に信じてゐた。

オプローモフがアレクセーエフの訪問を忍んでゐたのは、また別な、可成り重大な理由があつたからである。若し彼が自分勝手な生活をしたければ、つまり、黙つて寝てゐたり、假睡をしたり、室の中を歩いたりしたければ、アレクセーエフの必要はないのだ。アレクセーエフも矢張り無口で、居睡つたり、書物を見たり、或は涙の出る程氣憐さうな欠伸をしながら、額や品物を眺めたりする方だからである。彼は三晝夜でも斯うして居れる。若しオプローモフが一人であるのが退屈で、自分の意見を述べたり、饒舌つたり、讀んだり、議論をしたり、心の興奮を現はしたりしたいと云ふ要求を感じた時には——アレクセーエフはいつも従順で親切な聽者であり、同感者であつて、オプローモフの沈黙や物語や興奮や凡ての思想に對し、必ず同意するのであつた。

他の客達は、最初の三人の客のやうに、時々一寸立ち寄るだけであつた。彼等との生々した關係は、益々引き離された。オプローモフはどうかすると、何かのニュースや五分間ばかりの會談に、興味を有つことがあつたが、それに満足すると、再び沈黙する。お客達はお互に話を交換し、自分達が興味を有つ事に話題を

見出さねばならなかつた。彼等は人間の群に浴してゐた。皆な自分獨特の人生觀を持つてゐた。オプローモフの人生觀は、それと違つてゐた。お客達は彼を自分達の人生觀中に巻き込んだ。斯う云ふことは、オプローモフの氣に入らなかつた。そして彼に反感と不快の念とを懷かせた。

オプローモフには、たゞ一人肝膽相照す友人があつた。その友人も矢張り彼に平靜を與へなかつた。彼は新事實も、世間も、學問も、また全生活をも愛してゐた。而もその愛にはより深く、より眞面目なところがあつた——オプローモフは誰にでも愛嬌を振り撒いたが、別して彼一人を愛し、彼一人を信じてゐた。それは多分、彼と一緒に育ち、學問をし、生活した爲めらしい。その友人はアンドレイ・カルロウキ・シトリツと云つた。

彼とオプローモフとは遠く離れて生活してゐたが、オプローモフは頻りに彼を待つてゐた。

四

「やア、同郷人、今日は。」と、タランチエフは毛むくじやらかな手をオプローモフの方に突き出しながら、突拍子もない聲で言つた。「どうして君は丸太ん棒見たいに今頃寝てゐるんだ？」

「近寄らないで呉れ、近寄らないで、君は寒いところから來たんだから！」と、オプローモフは蒲團に纏まりながら言つた。

「寒いところからなんて、君は何を言ふんだ！」と、タランチエフは言ひ始めた。「さア、さア、折角出したん

だ、手を握り給へ！ もう直ぐに十二時になると云ふのに、先生まだ寝て御座る！」

タランチエフはオプローモフを蒲團から引つ起てようと思つたが、オプローモフはそれを警戒して、急いで兩足を降ろした。兩足は丁度兩方のスリッパに入つた。

「僕も今起きようと思つてゐたところだ。」と、オプローモフは欠伸をしながら言つた。

「そりや君が起きることは分つてるよ。何しろ正午まで寝てゐたんだからね。おい、ザハール！ 老老奴、貴様何處にゐるんだ？ 旦那様に早く衣服を着せろ。」

「ザハールより先自分が氣を付けてそれから吠えるがえゝだ！」と、ザハールは室へ入つて来て、憎々しうにタランチエフを眺めながら言つた。「あの通りまるで配達夫のやうに足跡をつけてさ！」と、彼は附け足した。

「なに、ひよつとこ野郎、何を愚圖々々抜かすんだ！」と、タランチエフは言ひながら、自分の傍を通り過ぎようとしたザハールを、背後から蹴るやうに片足を上げた。ザハールは立ち留つて、彼の方を振り向いて、憤然とした顔附をした。

「觸つて見るがえゝ！」と、ザハールは憎々しうに嗶れ聲を出した。「なんてえこつた？ 俺は出て行くべえ……」と、彼は扉口の方へ引き返しながら言つた。

「もう止し給へ、ミハイ・アンドレイチ君、君は随分忙しない人だね！ あんな奴に構はなくてもいゝぢやないか？」と、オプローモフは言つた。「ザハール、此方へ来い、用事があるんだ！」

ザハールは戻つて来た。そしてタランチエフを横眼で見ながら、素速く彼の傍を駆け抜けた。

オプローモフはひどく疲れた人のやうに、頹然とザハールに倚りかゝりながら、蒲團から離れた。そして矢張り頹然と大きな安樂椅子に身體を落とし、植まつけられたやうに凝つとした。

ザハールは小さい卓子の上からボマード油と櫛と刷毛とを持つて来て、オプローモフの頭に油をつけ、分け目を作つて、それから其處を刷毛で撫でつけた。

「今、顔を洗ひますか？」と、ザハールは訊いた。

「も少し経つてからにする。」と、オプローモフは答へた。「お前は彼方へ行つてもよろしい。」

「おゝ、あなたもゐたんですか？」と、タランチエフはザハールがオプローモフの頭髪を梳つてゐる時、俄かにアレクセーエフの方へ振り向いて言つた。「今まで氣が附かなかつた。どうして此處に？ 此のあなたの親類はまるで豚ですね！ 私はあなたに言ひたいことがあるのです……」

「誰です親類とは？ 私には親類なんかありません。」と、アレクセーエフはタランチエフの方に眼をむき出して、狼狽ながら怖々と答へた。

「でも、あなたはまだ彼處に勤めてゐるあの人でせう、何んと言つたかしら？……アファナシエフさんだ。さうすれば親戚ぢやありませんか？——親戚だ。」

「私はアファナシエフぢやありません、アレクセーエフですよ。」と、アレクセーエフは言つた。「私には親戚はないのです。」

「親戚ぢやない。でも、あなたのやうに不格好な男ですよ。矢張りワシリーイ・ニコライイチと言ひましてね。」

「眞實に親類ぢやありません。私はイワン・アレクセイイチですから。」

「それはどうでもいゝです。兎に角あなたに似てみます。たゞあの先生は豚です。あの人に御覽の通りを言つて下さい。」

「私はその人を知りませんよ。見たこともありませんよ。」と、アレクセイエフは煙草匣を開けながら言つた。

「煙草を一つ！」と、タランチエフは言つた。「でも君のは普通ので、フランス製のぢやないんですね？ さうだ。」と、彼は香を嗅いで言つた。「何故フランス製にしないのだね？」と、彼は責めるやうに附け足した。「兎に角僕は君の親戚のやうなあんな豚を見たことはないね。」と、タランチエフは續けた。「何時だつたか、もう二年ばかり前のことだつたが、僕は先生から五十留借りたんだ。五十留と言へば、大金とは言へない。ところが、それを忘れるどころか、よく覚えてゐて、一ヶ月も過ぎると何處で會つても、(どうだね、債務者。)と、斯うなんだ。飽々したよ！ そればかりか、昨日なんか僕達の役所へやつて来て(あなたは多分俵給を貰つたでせう。今、戴きたいものですわね。)なんて言ふんだ。僕は俵給を奴に遣つて、皆の前で恥をかゝせてやつたよ。(貧乏人には金が要るんだらう！)つて。僕には要らんかのやうにさ！ すると奴やつと扉口を捜し出して逃げて行つたが、僕はあの男に五十留づゝも割愛し得るやうな金持ちぢやないのだね！ 君、同郷人、

葉巻を一本呉れないか。」

「葉巻は其處の煙草匣の中に入つてゐるよ。」と、オブローモフは本棚を指さしながら答へた。

彼は自分の周囲で行はれてゐることに氣を留めずまた話されてゐることを聞きもせず、例の類然とした美しい姿態をして、心配らしく安樂椅子に腰掛けてゐた。彼は自分の小さい、白い手に見惚れながらそれを撫でゝゐた。

「何だ！ これは矢張りあれぢやないか？」と、タランチエフは葉巻を取り出し、オブローモフを眺めながら責めるやうに訊いた。

「矢張りあれさ。」と、オブローモフは機械的に答へた。

「でも僕は他のを、外國製を買ふやうに君にあれだけ言つて置いたぢやないか？ 君は人から聞いたことを實によく覚えてゐるね！ この次の土曜日までに屹度買つて置き給へ。でなけりやもう來ないよ。どうだ、實にひどいものぢやないか！」と、彼は葉巻を煙らし、雲のやうな煙の一塊を空中に吐き出し、他の一つを吸ひ込んでから續けた。「喫めやしない。」

「君、今日は早く來たね。ミハイ・アンドレイイチ君。」と、オブローモフは欠伸をしながら言つた。

「では、倦きたのかね、エツ？」

「いゝや、僕はたゞさう思つたからさ。君はいつも丁度晝餐時（つひくうじ）に來るのに、今はまだ一時前だもの。」

「僕はどんなお晝餐（ひるめし）か知らうと思つて、故意と少し早めに來たんだよ。君はいつも不味い物ばかり喰はせる

から、今日はどんな支度をさせたか見ようと思つてさ。」

「見たまへ、料理部屋に行けば分る。」と、オプロローモフは言つた。

タランチエフは出て行つた。

「どうもひどいね！」と、彼は室に戻つて言つた。「牛肉と山羊肉ぢやないか！ おい、兄弟、オプロローモフ、君は生計の方も碌にやれないくせに、地主なんだねえ。君は何と云ふ旦那様だ？ 町人のやうな生活をしてゐて、友人に御馳走をすることも知らないんだ！ ぢや、マデラ酒は買つてあるかね？」

「知らないよ。ザハールに訊いて見て呉れ。」と、オプロローモフは殆んど彼の言ふことを聞かずに言つた。「彼處に確か酒がある筈だ。」

「それは以前ので、獨逸人から買つたのだらう？ それぢやなく、英國人の商店から買つて来たまへ。」

「それで澤山だよ。」と、オプロローモフは言つた。「でないと再た使に遣らなければならぬからね！」

「ぢや待て、僕に金を呉れ。序に行つて買つて来る。も少し行つて来なければならぬ所があるんだ。」

オプロローモフは抽斗の中を探つて、當時の赤色の十留紙幣を取り出した。

「マデラ酒 七留だ。」と、オプロローモフは言つた。「が、これは十留だよ。」

「ぢや、それだけ皆な出し給へ、釣銭を貰つて呉る。びく／＼するな！」

彼はオプロローモフの手から紙幣を引つたくつて、急いで衣囊の中に隠した。

「ぢや、行つて来るよ。」と、タランチエフは帽子を被りながら言つた。「五時までには来るからね。一寸寄

つて来なければならぬ所があるんだ。或る飲料品店に就職口があるから、問ひ合せて来るやうに言ひつかつてね……さうだ、ねえ君、イリヤ・イリイチ君、今日四輪車を雇つてエカテリンゴフに行かないか？
そして僕を連れてさ。」

オプロローモフは厭だと云ふしるしに頭を振つた。

「大儀なのか、それとも金が惜しいのか？ 君はほんとに袋だよ！」と、彼は言つた。「ぢや、一寸失敬する……」

「一寸待ち給へ、ミハイ・アンドレイチ君。」と、オプロローモフは遮つた。「君に相談しなけりやならないことがあるんだ。」

「何だ？ 速く言ひ給へ。暇がないんだから。」

「それはね、突然二つの災難に襲はれてゐるんだ。室から追ひ立てを喰つてるんだ……」

「拂はないと見えるな。自業自得さ！」と、タランチエフは言つて出て行かうとした。

「君、待つて呉れ！ 僕はいつも前金を入れてゐるんだよ。此處を他の室に作り更へようとするのさ……まア一寸待ち給へ！ 何處へ行くんだ？ どうすればいゝか教へて呉れ。一週間の中に引越せと言つて急ぎ立てるんだ……」

「僕は君の相談に来たんぢやあるまいし……だが、つまらないことを君は考へてるんだね……」

「僕は何も考へてやしない。」と、オプロローモフは言つた。「そんなに騒々しく怒鳴らずに、どうしたらいゝ

か考へて呉れないか。君は實際家ぢやないか……」

タランチエフはもう彼の言ふことを聞いてゐなかつた。そして何事かを頻りに考へてゐた。

「では、此のままに居れるやうにしたら、僕に謝禮するだらうね。」と、彼は帽子を脱いで腰掛けながら言つた。「晝餐にシャンパン酒を出させ給へ、さうすれば君の事件は解決だ。」

「何だつて？」と、オプローモフは訊いた。

「シャンパン酒を出すかね？」

「それは、君の骨折次第さ……」

「いけないよ。君自身が相談に價しない男だもの。僕はつまらないことを言やしない。彼の人に訊いて見給へ」と、彼はアレクセーエフを指差しながら附け足した。「または彼の人の親戚にでも。」

「よし、よし、もう澤山だ。言つて呉れ！」と、オプローモフは懇請した。

「斯うするんだ、明日引越し給へ……」

「オイ君！ 何を言ふんだ！ そんなことは僕も知つてゐるよ……」

「まあ黙つて聞き給へ！」と、タランチエフは怒鳴つた。「明日ウイボルグスカヤ・ストロナーの僕の教母の家へ引越すんだ……」

「それは面白いね！ ウイボルグスカヤ・ストロナーへだね！ でも、彼處は冬になると狼が駆けずり廻るさうぢやないか。」

「島の方から遣つて來ることもあるさうだが、それが何だ、問題ではないぢやないか？」

「其處は退屈で、淋しくつて、誰もゐないだらう。」

「馬鹿を言ふな！ 其處には僕の教母が住んでゐる。彼女には自分の家がある。大きな菜園がある。上品な女で、後家だが、二人の子供がある。また彼女と一緒に獨身の兄も住んでゐる。それその隅に腰掛けてゐるやうなそんな頭ぢやない。」と、彼はアレクセーエフを指差しながら言つた。「僕や君なんか、あの人の前ぢや問題にならないよ！」

「そんなことはどうでもいゝ。」と、オプローモフはもどかしさうに言つた。「僕は其處へ行かない。」

「不思議だねえ、どうして君は引越をしないのだ。どうせ相談を持ちかけるくらゐなら、人の言ふことも聞くものだよ。」

「僕は引越さない。」と、オプローモフは斷言した。

「ぢや、勝手にするがいゝさ！」と、タランチエフは帽子を眼深に被つて答へた。そして扉口の方へ行つた。「君も随分變人だね！」と、タランチエフは後戻りながら言つた。「君には此處にゐるのがそんなに楽しいのかね？」

「さうさ、何處へ行くにも近いからさ。」と、オプローモフは言つた。「近所に商店もある、劇場もある、知人もゐる……街の真ん中で、いつも……」

「なに？」と、タランチエフは遮つた。「君は近頃家から出たことがあるかね？ 近頃劇場に行つたことがあ

るかね？ 君はどんな知人のところへ行くんだ？ 此の中央が君に何の役に立つんだ、どうかその理由を聞かせて呉れ？」

「理由かね？ その理由は種々あるさ！」

「どうだ、君自身にも解るまい！ だが、考へて見給へ、君は僕の教母のところでは上品な婦人として安らかに静かに暮せるんだ。誰も君を煩はす者はない。騒がしい音もなければ、犬の吠聲さへ聞えない。清潔で清楚してゐるしさ。見給へ、宛然下宿にゐるやうぢやないか。それでもまだ且那樣で地主様かね！ 彼處は清潔で静かだ。退屈になれば、お饒舌をする相手もある。僕の外、君のところへは誰も行かなくなる。子供が二人あるが——好きなだけ子供達と遊ぶがい！ どうか君？ 馬鹿にうまい話ぢやないか。君は此處に幾ら拂つてゐるのだ？」

「千五百留。」

「彼處なら家を一軒借りても千留でいゝのだ！ それに、實に明るくつて綺麗な室だよ！ 教母は疾くから誰か静かな几帳面な人に貸したいと言つてゐた——で、僕は君を推薦するのだ……」

オブローモフは厭だといふしるしに茫然として頭を振つた。

「馬鹿なことを言はずに引越し給へ！」と、タランチェフは言つた。「考へても分るぢやないか。此處の半額になるんだよ。一つの室で五百留も助かるんだ。君の食卓は二倍もよくなるし、綺麗な下女やザハールに盗まれる心配もなくなる……」

支關の方に唸るやうな聲が聞えた。

「そしてつと整頓してね。」と、タランチェフは續けた。「今なんか、卓子に向つて腰掛けるさへ汚ない程だ！ 胡椒ばかり澤山で——酢は買つてゐないし、ナイフも磨いてない。君の言ふ所によれば、衣服はなくなるさうだし、何處も此處も埃だらけだし——實に、不潔極まるぢやないか。が、彼處では婦人が一家を切り廻して呉れるんだ。君にも、あの馬鹿野郎のザハールにも……」

支關の唸聲は、更に強く響いた。

「あの老老犬は」と、タランチェフは續けた。「何も考へなくともよくなるんだ。ちゃんと完備した處に住めるんだ。何も思案することはない。引越し給へ、それで片附くと云ふもんだ……」

「だが、何方にしてもあまり急にウイボルグスカヤ・ストロナーへ……」

「まあいゝよ！」と、タランチェフは顔の汗を拭きながら言つた。「今は夏だ。彼處は宛然別荘のやうなものだ。君は夏中此のゴロホーワヤ街道で腐つてゐるつもりなのかね？……彼處にはベスポロドキン公園もある。直ぐ傍にはオフタもある。二歩ばかりでネワ河もある。自分の菜園もある——埃もなければ臭気もない！ 何も考へることアありやしない。僕は今直ぐお晝寝までに急いで教母のところへ行つて来る——だから僕に車代を呉れ。そして明日引越すやうに……」

「何と云ふ男だらう！」と、オブローモフは言つた。「急にウイボルグスカヤ・ストロナーへ行けなんて、何を考へ出すんだ……そんな考へぢや駄目だ。此處に留まつて居れるやうな巧い方法を考へて呉れなけりや困

る。僕は八年も此處で暮してゐるのだから、此處を換へたくないのだ……」

「いや、是非引越し給へ。僕は直ぐに教母のところへ行つて来る。就職口の方は此次に問ひ合せることにしよう……」

彼は出て行かうとした。

「待つて呉れ、待つて呉れ！ 何處へ行くんだ？」と、オブローモフは彼を止めた。「僕にはもつと重大な事件があるんだ。見て呉れ、こんな手紙が村長から来たんだ。どうすればいゝか解決して貰ひたいんだ。」

「そら、その通り君は不具者なんだ！」と、タランチエフは反對した。「何一つ自分で片附けられない。何でも彼でも僕だ。君に何が出来……？ 人間ぢやない、ほんの癡府だ！」

「手紙は何處にあるんだ？ ザハール、ザハール！ 彼奴再た何處かへ片附けたな！」と、オブローモフは言つた。

「これでせう、村長の手紙は。」と、アレクセーエフは皺くちやになつた手紙を手を取つて言つた。

「あゝ、これだ。」と、オブローモフは繰り返し、聲を發て、讀み始めた。

「君はどう思ふかね？ どうしたらいゝだらう！」と、オブローモフは手紙を讀み終つて訊いた。「早魃と滯納とが……」

「破産者だ、全くの破産者だ！」と、タランチエフは言つた。

「どう云ふ譯で破産者だ？」

「どうして破産者でないのだ？」

「破産者だとすれば、どうすればいゝかね？」

「何かお禮があるかね？」

「シャンパン酒を出すと言つてるぢやないか、それ以上何が欲しいのだ？」

「シャンパン酒は室の搜し代さ。僕は君に對して親切を盡したのに、君はそれを感じず、なほ僕に従はない。君は恩知らずだ！ 自分で行つて室を搜して來給へ！ それにしても、あれは素敵にいゝ室だなア！ 殊に落着があつてどんなに君にいゝか知れない。まるでしん身の姉のところにゐるやうなものだ。子供が二人と獨身の兄がゐるし、僕は毎日寄るし……」

「ぢや、よし、よし。」と、オブローモフは、遮つた。「では今度は村長をどう處置すればいゝか教へて呉れ。」

「厭だよ、晝餐にポルテル酒を添へ給へ、さうすれば言はう。」

「何だ、こんどはポルテル酒か！ それは餘り……」

「さうか、ぢや失敬する。」と、タランチエフは帽子を被りながら言つた。

「あゝ困るなア！ 村長は収入が（二千留少なく）と書いてゐるのに、先生はまだポルテル酒を附けろと言ふ！ ぢや、よし、ポルテル酒を買はう。」

「ぢや、もつと金を呉れ給へ！」と、タランチエフは言つた。

「君のそこには赤酒の剩錢が残るよ。」

オブローモフ

「ぢや、ウイボルグスカヤ・ストロナーへ行く車賃をどうするんだ？」と、タランチエフは答へた。
オプローモフはまた一留銀貨を一つ取り出して、悲しさうにそれをタランチエフに與へた。

「村長は君を害する詐偽師だよ——君に言つて置くがね。」と、タランチエフは一留銀貨を衣囊の中に隠しながら言ひ始めた。「所が、君は奴を信じてゐる。間抜けだねえ。見給へ、大變な歌を唄つてぢやないか！ 早魁で御座いの、不作で御座いの、滞納で御座いの、やれ百姓共が逃走したのと言つてさ。嘘だよ、みんな嘘だよ！ 僕の聞くとところによると、僕の方のシユミロフの領地では、去年の豊作で皆な借金を拂つたさうだ。然るに君の村だけが突然早魁だの不作だのと言つてゐる。シユミロフ村と云ふのは、君の村から五十露里しか離れてゐないのだ。どうしてシユミロフ村の穀物は枯れなかつたのだ？ その上、滞納なんか考へ出してゐる！ さうだとすれば、何を奴は監督してゐたんだ？ 何故放任して置いたんだ？ 滞納と云ふことは、何處から出たことなんだ？ 僕等の方面には仕事やまたは販路がないと云ふ譯ぢやあるまい。彼奴は盗賊だ！ 僕が彼奴を教へてやらう！ 百姓共が逃走したのは、奴が百姓共から何かを強奪して、彼等を追つ拂つたのだ。警察署長には訴へようとも考へてゐない。」

「そんなことはないよ。」と、オプローモフは言つた。「奴は手紙の中に署長の答を書いてゐるくらゐだからね——あんなに自然にさ……」

「おや、君は何も知らないんだね！ どんな詐偽師でも、皆自然に書くものだよ——僕の言ふことを信じ給へ！ 例へばさ。」と、彼はアレクセーエフを指差しながら續けた。「此處に羊の中の羊のやうに潔白な

人が腰掛けてゐるが、此の人は自然に書くだらうか？——決して書けやしない。が、この人の親戚は、まつたく豚で横着者だ。あの男なら自然に書くだらう。君だつて自然に書けやしないよ！ 君の村長も、巧みに自然に書けるから、矢張り横着者に違ひない。見給へ（住家に連れ歸る）なんてうまいことを言ひ足してぢやないか。」

「ぢや、奴をどうすればいゝんだ？」と、オプローモフは訊いた。

「直ぐに代へるんさ。」

「だが、誰を後任にするんだ？ 僕には百姓共の監督は出来ないし、かと云つて他の者はなほ悪いことをするだらうしね。僕は十二年も村に行かないのだから。」

「自分で村へ行くんだね、でなけりや駄目だよ。村で夏を過し、秋になつて眞つ直ぐに新しい住家へ歸つて來るが、僕が奔走をして、新しい住家を準備して置くから。」

「新しい住家に来いとか、村へ行けなど、君は餘り絶望的な方法を提供するね！」と、オプローモフは不満らしく言つた。「極端を避け、中庸をとるやうにして呉れないか……」

「兄弟、イリヤ・イリイチ君、君はすつかり破産してさふよ。さうだ、僕が君の位置に居つたら、僕は疾くの昔に領地を抵當に金を借りて、他の領地を買ふか、或は此處で良い場所に家を買ふね。君の村は斯う處分するのが一番いゝ。それから、彼處の家も抵當に入れて他の家を買ふ……君の領地を僕に呉れて見給へ、僕は忽ち世間に名を成して見せる。」

「自慢は止めにして、引越をしないでいゝやうに、それから村へ行かないやうに、問題が片附くやうに考へて呉れ……」と、オプローモフは言つた。

「では、君はもう此處を決して動かないつもりなんだね？」と、タランチエフは言つた。「だが、見たまへ君の姿態を。君は何の役にも立たない男だ。祖國の爲に何等盡す所もなくさ。村にさへ行けない男なんだからね！」

「今僕が行くのは早いんだよ。」と、オプローモフは答へた。「先づ僕が自分の領地に實施しようと思つてゐる改革計畫を作り上げなけりや……さうだ、ミヘイ・アンドレイチ君、斯うして呉れないか？」と、俄かにオプローモフは言つた。「君行つて呉れないか。君には事情も分つてゐるし、場所も分つてゐるのだから。費用は惜みはしない。」

「僕が君の支配人になつて？」と、タランチエフは傲然として反對した。「僕は百姓の取扱ひ方を忘れてゐるからね……」

「ぢや、どうすればいゝんだ？」と、オプローモフは沈んだ口調で言つた。「全く分らないね。」

「ぢや、警察署長に手紙を書いて、村長が百姓共の動搖のことを言つたかどうかを訊いて見給へ。」と、タランチエフは勧めた。「そして署長に村へ行つて貰ふやうに頼むんだ。それから縣知事にも手紙を書いて警察署長に村長の行爲取調を命ずるやうに願ふのさ。(閣下よ、何卒小生を脅かしつゝある避け難き怖るべき災難に對し、我々の慈父として慈憐の眼を注ぎ給へ。この災難は村長の暴狀より生じたるものにて、之が爲に小

生は後見なく一片のパンなきものとなれる妻及び小さき十二人の子供等と共に極端なる悲境に陥らんとしつゝある次第に候……)と言つてね。」

オプローモフは笑つた。

「若し子供達を見せると言つたら、何處から連れて來るんだ？」と、彼は言つた。

「構ふもんか、書き給へ。十二人の子供とさ。そんな言葉は耳の傍を去つて了つて、調査なんかしやしない。だから(自然)になるよ……知事が手紙を秘書官に渡す頃に、君は秘書官にも手紙を出すのさ。勿論封入して置くんだね——すると命令が發せられる。それから、なほ近所の人達にも頼むんだ。近所の人達と云ふとどんな人だね？」

「ドブルーニンが近いね」と、オプローモフは言つた。「僕は此處でも彼と度々會つた。今は彼處へ行つて居るが。」

「其の人にも手紙を出して、よく頼み給へ(基督教徒として、友人として、隣人として、骨肉の御厚情を賜はりたく)と書き、手紙に添へて何かペテルブルグの名物を贈るんだ……葉巻か何かね。それでいゝんだ。解らない男だなア。破産者だ！ 村長も僕にはまゐるだらう。僕も村長に手紙を出さう。郵便は何時村へ發つんだね？」

「明後日。」と、オプローモフは言つた。

「ぢや、腰掛けて今直ぐに手紙を書き給へ。」

オプローモフ

「明後日だから、何も今直ぐに書かなくてもいゝぢやないか？」と、オプローモフは言つた。「明日でもいゝよ。まア、聞いて呉れ、ミヘイ・アンドレイ君」と、彼は附け足した。「君の（好意）を終つて貰ひたいんだ。さうすれば、僕はなほ晝餐に魚か小鳥かを添へるがね。」

「何を？」と、タランチェフは訊いた。

「腰掛けて書いて呉れ。手紙を三本書くくらゐ大した時間もかゝりやしない。君はあんな風に（自然）に話をすればいゝんだ……」と、オプローモフは強ひて微笑を隠さうとしながら附け足した。「さうすれば、あのイワン・アレクセイイチ君が書き取つて呉れるよ……」

「おい！ 何を考へ出すんだ！」と、タランチェフは答へた。「僕に書かせようなんて！ 僕は役所でさへ三日間も字を書かないのだ。坐ると直ぐに左の眼から涙が出始める。腫れてるやうだ。それに、屈むと頭は充血する……君は懶惰者だ、懶惰者だ！ 兄弟、イリヤ・イリイチ君、君は一哥もなくなるやうに破産するよ……」

「あゝ、せめてアンドレイ君（譯者註。シト）でも速く来て呉れるといゝが！」と、オプローモフは言つた。「彼の男ならずつかり片付けて呉れるが……」

「愈々慈善家を見附けたね！」と、タランチェフはオプローモフの言葉を遮つた。「嫌な獨逸人だ。狡猾い惡漢だ！」

タランチェフは外國人に對して或る本能的嫌惡を感じてゐた。彼の眼には、フランス人も獨逸人もイギリ

ス人も皆惡黨、詐僞師、狡猾者若くは盜賊などの異語同義として映じてゐた。彼は他國民の間に區別を立ててゐなかつたので、彼の眼から見ると、外國人は皆な同一民族のやうに思はれたのである。

「ねえ君、ミヘイ・アンドレイ君。」と、オプローモフは嚴然として言ひ始めた。「もう少し言葉を慎んで貰ひたいね、殊に僕の親しい人に對して……」

「親しい人に對して？」と、タランチェフは嫉ましさうに問ひ返した。「でも、奴は君の骨肉ぢやないだらう？ 獨逸人だ——よく分つてゐる。」

「骨肉よりも誰よりも親しいのだ。僕はあの男と一緒に育ちもし、勉強もしたのだから、彼に對して失敬なことは言はせない……」

タランチェフの顔は憎惡の爲に紫色になつた。

「よろしい！ 君が僕と獨逸人とを取り換へたのなら、」とタランチェフは言つた。「もう僕は君のそこへ一歩も踏み込まない。」

彼は帽子を被つて、扉口の方へ行つた。オプローモフは直ぐに機嫌を取り直した。

「君が僕を僕の友人として尊敬し、もう少し氣を付けて彼の男のことを言つて呉れよば——それで僕は満足なんだ！ 大した註文ではないんだ。」と、彼は言つた。

「獨逸人を尊敬しろつて？」と、タランチェフは非常な輕蔑の色を見せたから言つた。「何の爲に？」

「それは今言つた通り、彼が僕と一緒に育ち、一緒に勉強したと云ふたつたそれだけの爲にさ。」

「下らないことだ！あの男と一緒に勉強した者は、決して少なくはない！」

「でも、若し彼が此處にゐて呉れたら、ポルテル酒もシャンパン酒も要求せずに、疾くに僕を種々な心配から救つて呉れるに違ひない……」と、オブローモフは言つた。

「成程、君は僕を責めるのだね！それぢや、君が勝手にするがよい。ポルテル酒もシャンパン酒も要らない！さア錢も返さう……何處へ入れたかしら？忘れて了つた。畜生、何處へ入れたかしら！」

彼は油染みた、書き散らした紙片を取り出した。

「いや、これぢやない」と、彼は言つた。「何處へやつたらう？」

彼は四方のポケットをがさ／＼と捜した。

「心配しなくてもいゝよ、出さなくてもいゝよ。」と、オブローモフは言つた。「僕は君を責めたんぢやない。たゞ僕が親しくし、僕の爲に種々なことを爲て呉れた人のことを言ふ時には、禮儀を守つて貰ひたいと言つたに過ぎないんだ……」

「種々なことを？」と、タランチェフは憎々しうに反對した。「ぢア、待つてゐ給へ、あの男はまだ種々なことをやつて呉れるよ——あの男の言ふことを聞くがよいさ！」

「何故君はそんなことを僕に言ふのだ？」と、オブローモフは訊いた。

「獨逸人が君を剃ぎ取つてゐるからさ。君が同郷人の露西亞人を何處かの浮浪人に見代へたことを知る時が來ると思ふからさ……」

「ねえ君、ミハイ・アンドレイチ君……」と、オブローモフは言ひ始めた。

「何も聞く必要はない。僕は随分種々なことを聞いて、君の爲に非常に悲しんでゐる。實に怪しからん奴だ……彼奴の親父はサクソニヤでパンさへも見たことのない奴で——此方へ來て鼻を持ち上げようとしたんだ。」

「君は何故、故人を讒譖するんだ？彼の父親に何の罪があるんだ？」

「二人とも悪いよ。親父も息子もさ。」と、タランチェフは片手を振つて陰險な顔附をして言つた。「僕の親父は、あゝ云ふ獨逸人を警戒しろと注意したが、全くさうだ。親父は當時の凡ゆる人を知つてゐたからね！」

「ぢや、例へば、君のお父さんはどう云ふ點で獨逸人を嫌つたんだ？」と、オブローモフは訊いた。

「九月と云ふのに、フロツクを一枚着て、破れ靴を穿いて、吾々の村へ來た者がさ、俄かに息子に資産を残したと云ふこと——これは一體何を語つてゐると君は思ふ？」

「彼は息子に資産として、たつた四萬留しか残しはしない。それも大抵は細君の持參金で出來たので、他は子弟の教育と、領地の管理とで作つたものだ。いゝ俵給を買つてゐたからねえ。して見れば、彼の父親には少しも罪はないぢやないか。それにどうして息子が悪いのだ？」

「立派な子供だ！親父の四萬の遺産から急に三十萬の資産を作り、官途に就けば七等官に飛び越える。學者だよ……今は旅行なんかしてさ！惡漢の行かない處はありやしない！本當の露西亞人はこんなことをするだらうか？露西亞人は何か一つを選んで、それも急がず、靜かに徐々とやつて行く。貸貸をすれば金

持になれることを知つてゐるが、そんなことはね、フツ、フツ！ 汚いことだ！ 僕はそんな人間を訴へてやり度いよ。あの野郎、今うろついてゐる、何處をうろついてるかしら！」と、タランチェフは續けた。「何故奴は他國をうろついてゐるのだ？」

「種々なことを見聞して、智識を磨きたいんだよ。」

「智識を磨く？ まだ學問が足りないのかね？ それ以上どうするんだ？ 嘘だよ。彼奴の言ふことを信じちやいけない。君の眼を誤魔化してるんだ、君を子供扱ひにしてるんだ。大人が學問をするだらうか？ 言ふことが振つてるよ。七等官が學問をするなんてさ！ 君だつて、學校では學問をしたらうが、今學問をしてゐるか？ この人もへと、彼はアレクセーエフを指差した。學問をしてるか？ この人の親戚も、學問をしてゐるだらうか？ 善人の中に、學問をしてゐる者があるだらうか？ なに、彼奴はあそこで、獨逸の學校の中に坐つてゐて、日課を教へてゐるつて？ 嘘だよ！ 僕の聞くところによると、彼奴は或る機械を視察して、その註文をする爲に行つたのださうだ。露西亞人の金を掃き出すんだよ！ 牢屋にでもたゝきこむが、株式がどうの斯うのと言つて……あゝ、あの株式が僕の氣に喰はないんだ！」

オプローモフはハ、ハ、と笑つた。

「どうして齒を露き出すんだ？ 僕の言ふことが間違つてゐるか？」と、タランチェフは言つた。

「そんな話は止さう！」と、オプローモフは遮つた。「君は君の行きたい處へ行くが、僕はイワン・アレクセーウキチと一緒に此の手紙を残らず書いて了はう。そして少しも速く自分の計畫を紙上に書いて見る。」

手傳つて貰ふのに丁度いゝ機會だ……」

タランチェフは支關の方へ出て行つた。が、急に再た戻つて來た。

「すつかり忘れてゐた！ 朝から君のそこへ來なければならぬ用事があつたんだ」と、彼は言ひ始めた。が、もう其の言葉つきは亂暴でなかつた。「明日僕は婚禮に呼ばれてゐるんだ。ロコトフが結婚をするんだ。だから同郷人、君の燕尾服を貸して呉れないか。僕のは、君の知つてゐる通り、もう大分擦れてゐるからねえ……」

「着られるものか！」と、オプローモフは此の新しい要求を聞くと、顔を顰めながら言つた。「僕の燕尾服は君に合はない……」

「合ふよ。どうして合はないんだ？」と、タランチェフは遮つた。「君のフロツクを着て見たことがあるが、僕に丁度よかつた！ ザハール、ザハール！ 老翁 畜生奴！ 此處へ來い！」と、タランチェフは叫んだ。

ザハールは熊のやうに唸つた。が、入つて來なかつた。

「イリヤ・イリイチ君、彼奴を呼んで呉れ。彼の奴、怪しからん野郎だ！」と、タランチェフは訴へるやうに言つた。

「ザハール！」と、オプローモフは叫んだ。

「あゝ、何の用事だんべえ！」と云ふ聲が、寢煙爐から飛び降りる足音と一緒に支關の間に鳴り響いた。

「何の用事で御座りやすだ？」と、ザハールはタランチェフの方へ向つて訊いた。

「俺の黒い燕尾服を此處へ持つて来て呉れ！」と、オブローモフは言ひ付けた。「ミヘイ・アンドレイイチ君が、合ふかどうか着て見るんだ。明日婚禮に行かなければならぬのださうだ……」

「燕尾服は貸すこと出来ねえだ。」と、ザハールは決然と拒絶した。

「主人が言ひ付けるのに、何を貴様がぬかすんだ？」と、タランチエフは怒鳴つた。「イリヤ・イリイチ君、君は何故此奴を懲治權へ遣つて了はないんだ？」

「老人を懲治權へ遣るくらゐではまだ足らないよ！」と、オブローモフは言つた。「ザハール、強情を張らず、に、燕尾服を持つて来い！」

「貸さねえだよ！」と、ザハールは冷やかに言つた。「それより此方のチョツキとシャツを返して貰ひやすべえ。五ヶ月も、彼方へお客に行つてゐるんだからねえ。聖名祭の時に持つて行つたんで、何とか言ひやしたよ。チョツキは天鵝絨で、シャツは手薄なオランダ物で、値段にすれば二十五留はしやす。燕尾服は貸さねえだ！」

「ぢや、失敬する！ 分らない人達だ！」タランチエフは出て行きがけにザハールを拳回で嚇しながら腹立たしさうに結論した。「イリヤ・イリイチ君、では君の室を借りて置くよ——いゝかね？」と、彼は附け足した。

「あゝ、いゝよ、いゝよ！」と、オブローモフは速く彼から離れたばかりに、もどかしさうに言つた。

「ぢや、君は直ぐに必要なことを書き給へ。」と、タランチエフは續けた。「それから縣知事には、私に（小

さい）子供が十二人もありますと書くのを忘れるなよ。そして五時には食卓の上にソツプを支度して置き給へよ！ だが、君はどうして肉入パンを作らせなかつたのだ？」

けれども、オブローモフは黙つてゐた。彼はもう先刻からタランチエフの言葉には耳も貸さずに、ちつと眼を瞑つて、何か他のことを考へてゐたのである。

タランチエフが出て行くと同時に、室の中には破り難い静寂が、十分間はかり満ちてゐた。オブローモフは村長の手紙と迫つて来る引越とに心を碎かれてゐた。一つは、タランチエフの騒々しさに疲れたのであつた。彼は遂々溜息を吐いた。

「何故書かないのですか？」と、アレクセーエフは靜かに訊いた。「鴛ベンを削つて上げませうか。」

「削つて貰ひませう。そして何處かへ勝手に行つて下さい！」と、オブローモフは言つた。「私は一人で仕事をします。あなたは晝餐後にそれを淨書して下さい。」

「承知しました。」と、アレクセーエフは答へた。「ぢや、屹度またお邪魔に來ます……が、私は行つて、エカテリンゴフ行にあなたを待たないやうに言つて來ます。左様なら、イリヤ・イリイチ君。」

けれども、オブローモフはアレクセーエフの言葉を聞いてゐなかつた。彼は兩足を引き寄せて、殆んど横たはるやうに安樂椅子に腰掛け、悲しきやうな様子をして、假睡か或は思案かに耽つた。

五

オプローモフは生れから言ふと貴族で、位階から言ふと十等官であつた。そして十一年餘り一足も外に出ずに、ペテルブルグにばかり住んでゐるのである。

最初、両親の生きてゐる時分、彼は二つの室で手狭く暮し、唯自分達が村から連れて來た召使のザハールだけに満足してゐたが、父親と母親とが死んだ後は、遺産として残された三百五十人の百姓の所有者となつた。その遺産は遠い殆んどアジアに近い片田舎にあつた。

彼の収入は、最初は紙幣で五千留くらゐであつたが、次第に七千留から一萬留くらゐに増した。さうなると、彼の暮し向も段々大袈裟になつて來て、彼はもつと大きい室を借り、自分の家族に更に一人の料理人を加へ、なほ二頭の馬さへ準備した。

當時彼はまだ若かつた。そしてたとへ生きてゐたとは言へないまでも、少なくとも今と比べると、まだ餘程活氣を有つてゐた。まだ種々な希求に満たされてゐた。絶えず何かに希望を繋ぎ、運命からも、また自分自身からも、多くのものを期待してゐた。そして絶えず、自分の地盤と役割とに——勿論彼がペテルブルグに來た目的なる官途にありつく支度をしてゐた。次に彼は社會に於ける役目をも考へた。最後に、青年から壯年への轉向期にあつた彼の想像には、遠い將來に於ける家庭生活の幸福が閃いたり、微笑んだりした。

けれども、日は日に次いで過ぎ去り、年は年を追うて代つた。柔毛は粗い鬚鬚となり、光のある眼は、二つの鈍よりとした點に代り、體軀はでぶくと太り、頭髮は心なく抜け落ちて、遂々三十の歳が見舞つて來たが、彼は如何なる地盤にも一歩も踏み出さず、相變らず十年前に居つた自分の地盤の隅の傍に立つてゐた。

けれども、彼は矢張り生活を始める支度と準備とをしてゐた。矢張り頭の中に自分の將來の模様を描いてゐた。けれども、年が彼の頭上を閃めき去る毎に、此の模様の中の或るものを代へたり、投げ捨てたりしなければならなかつた。

生活は、彼の眼から見ると、二つに分たれてゐた。一つは、勞苦と倦怠とから成つてゐた——勞苦と倦怠とは、彼にとつて異語同義であつた——他の一つは、安靜と平和な快樂とから成つてゐた。そして、重要な地盤は——公務は、最初最も不快な姿で彼を困らせた。

田舎の懐と故郷の柔和な暖かい氣風と習慣との中に育てられた彼は、二十一年間に親の手から親友の手、知人の手と云ふ具合に轉々した爲め、遂々家庭の趣味に囚はれて了つた。彼は將來の職務を或る家庭の仕事の中に、例へば、彼の父親がしてゐたやうに、収入と支出とを氣樂に帳簿に書き附けるやうな仕事の中に想像してゐたのである。

彼には、或る役所の役人達は、お互に親密な家族のやうに結束して、お互の安靜と満足とを倦まず攪まず慮つてゐるものと思はれてゐた。で、役所に出勤することは、決して毎日守らなければならぬ義務的の習慣ではなく、雨天や炎暑や或は單に不快な氣分などが、いつでも缺勤する爲めの十分に正常な口實になり得るものであるかのやうに思つてゐた。

けれども、達者な役人が缺勤するには、少なくとも地震でもなければならぬが、その地震が、困つたことには、ペテルブルグにないこと、洪水でも勿論缺勤の口實にならぬことはないが、それも滅多にないことを

知つた時、彼は非常に悲しんだ。

九六

彼の眼に「必要書類」、「重要書類」など、上書した封筒が映じた時、彼に種々な訂正や書抜や事務調査や皆なが笑つて「記録」と名づけてゐた兩指でなけりや計れない程厚い帳簿の書き込みなどを命ぜられた時、又は仕事を急がされたり、皆も休む間もなく急いでゐる時、つまり一つの仕事はまだ役人達の手から離れないうちに、また他の仕事が非常な力を持つてゐるかのやうに、怖ろしい権幕で役人達を捉へ、役人達がそれを終つて、やつとその仕事を忘れたと思ふ頃、なほも其の次の仕事を襲うて来て——いつまで経つても限なく仕事が見はれて来る時、オプロモフはなほ一層悄氣込むのであつた。

彼は夜中に起されて、「記録」を書かせられたことが二度もあつた。使者が来た爲にお客に行つた先から歸つたことなどは度々あつた——矢張りこの記録の爲めに。斯う云ふことが、彼に驚怖と非常な倦怠とを與へるものであつた。

「一體、何時生活するんだ？ 何時生活するんだ？」と、彼は言つた。

彼は、家にゐる時分に、局長のことを聞いてゐた。局長は部下の者達の父であると言つてゐた。だから、彼はこの局長に就いて、最も楽しい、最も家庭的な考へを持つてゐた。彼は、局長を第二の父で、自分の部下ならば仕事の如何に拘らず、どうかして平等に賞與を與へ、部下の貧困ばかりか、満足に就いても慮からうと云ふ精神に満たされてゐる者であるかのやうに想像してゐた。

オプロモフは、局長は自分の部下の境遇に同して、どうだ夜分に眠れるかとか、どうしてお前の眼は

曇つてゐるんだとか、頭痛がしやしないかとか、心配らしく訊く者だと思つてゐた。

けれども、彼は初めて出勤した日に、此の想像の幻滅を感じた。局長が遣つて来ると、役人共は皆あつたと駈け廻る。おどくする。お互に責め合ひをする。或者などは、あまり良くない所を局長に見せまいとして、慎んでゐる者もある。

後でオプロモフが言つた通り、斯う云ふことが行はれるのは、局長達が愚かしい程驚いた顔附をして自分を出迎へに飛び出て来る部下の顔に、自分に對する尊敬の意ばかりか、事務に對する熱心と、時々はその技倆までを見ようとする爲である。

オプロモフに取つてそれほど自分の局長に驚く必要はなかつた。彼の局長は、非常に交際の上手な人物であつた。彼は決して誰をも苦しめるやうなことをしなかつた。部下の者達は、非常に満足して、それ以上に良い局長を望まなかつた。誰も局長から不快な言葉や怒罵や譴責を聞いた者はない。彼は何事をも決して要求せず、いつも頼むのであつた。事務を執ることも頼む。お客に来るやうに頼む。入獄させるにも頼む。彼は誰にも決して「お前」と言はず、一人の役人に對する時も又多數一緒に呼ぶ時にも「あなた」と言つた。けれども、部下の者は皆、局長が遣つて来ると、何故かおどくした。彼等は局長の愛嬌ある間に對して、自分の聲ではなく、他の人と話す時には使はない全く別な聲で答へるのだつた。オプロモフも何故か分らないが、局長が室に入つて来ると、俄におどくし出した。局長が彼に話しかけでもすると、直ぐに自分の聲がなくなつて、或る他の細い厭らしい聲が出た。

オプロモフ

九七

オプローモフは善人で親切な局長の下に勤めてゐてさへ、その勤務の恐怖と倦怠とに苦しんだ。若し彼が厳格な八ヶ間敷い局長に衝突つたら、どうなつたか知れやしない。

オプローモフは辛つと二年間だけ勤めた。彼は一年勤めて位階を得ようと思つてゐたらしかつたが、特別な事情の爲に、思つたより速く職務を棄てるやうになつた。

或時、彼はアストラハンに送る或る必要書類をアルハンゲリスタへ誤送した。この事が露見して、責任者の調査が始つた。

他の役人達は皆、局長がオプローモフを呼び附けて、冷静に落着いて（此の書類をアルハンゲリスタへ送つたのはあなたですか）と訊くのを好奇心を以て待つてゐた。そしてオプローモフが局長にどんな聲で答へるか、それに興味を感じてゐた。

或る者などは、オプローモフは何とも答へないだらう、答へ得ないだらうと思つてゐた。

オプローモフも他の役人達も、局長が叱責くらゐに留めることを知つてゐたが、他の局長達を見ると、オプローモフはひどく驚いた。彼自身の良心は、局長の宣告よりもつと厳しかつたのである。

オプローモフは相當な詰責を待たずに、家へ歸つて、醫者の健康診断書を送つた。

此の診断書には斯う書いてあつた。（私儀左記の事實を證明捺印仕り候十等官イリヤ・オプローモフは心臟肥大左心耳擴大症（*Hypertrophia cordis cum dilatatione ejus ventriculi sinistri*）及び肝臟（*II. tibus*）慢性陣痛症に罹り居り候、この症状昂進は患者の健康と生命とを脅かすものにて、日々の出勤の爲に斯かる症状を

惹起したるものと診定仕り候、就てはこの症状の反復昂進を豫防する爲め、オプローモフ氏の出勤を暫時中止する必要有之、猶ほ頭腦労働と凡ゆる活動を禁する次第に候）

けれども、此の診断書はたゞ一時の策で、健康になれば再び毎日出勤しなければならなかつた。オプローモフはこれに堪へ切れず、遂々辭職して了つた。斯くして彼の官吏生活は終を告げ、其後最早繰り返されなかつた。

社會に於ける彼の役目の方は、官吏生活よりも成功した。

ペテルブルグに來た當座、彼はまだ年齢が若かつたので、彼の落着のある顔は度々元氣付き、眼は長く生活の火に輝き、その眼からは光明と希望と刀とが流れ出てゐた。彼は皆と同じやうに感激し、希望し、詰らないことに喜び、また詰らないことに苦しんだ。

けれども、これはずつと以前のことであつた。まだ他人を誰でも誠實な親友と思ひ、殆んどどんな女にも戀をし、誰にでも手と心とを投げ出さうとし、他の者が成功すると、自分の先々の生活をひどく果敢なむと云ふやうな優しい時代のことであつた。

この幸福な時代には、オプローモフの領分にも、随分柔らかない天鵞絨のやうな、しかも情熱的な視線が、美人の群から注ぎ込まれ、それから種々なことを約束する微笑や、特別な意味を有たない二三度の接吻や、涙の出る程痛い親密な握手などが、次から次に轉り込んだこともあつた。

けれども、彼は決して美人の虜にならなかつた。決して美人の奴隷にならなかつた。また非常に熱心な美

人崇拜家にもならなかつた。何故かと言へば、女と接近するには非常な手管が必要であつたからである。で、オプローモフは寧ろ遠くから、尊敬を失はにくらゐの距離から、女を崇拜することに止めてゐた。

どうかすると、運命はオプローモフを社會の女と衝突させて、幾日間か彼を興奮させ、戀に捉はれてゐるのだと思はせるやうなこともあつた。が、斯う云ふことで、彼の戀の叛逆が、ロマンスを奏するやうなことはなかつた。戀の叛逆は最初の間中止されて、その無邪氣と單純と潔白とから見ると、年頃のある女學生の戀物語と少しも異なるところがなかつた。

彼が一番怖れたのは蒼白い顔をした悲しさうな處女であつた。さう云ふ女は、大抵黒い眼を有つてゐる。その眼には(惱ましい晝と不義の夜)とが輝やいてゐる。さう云ふ女は、誰にも分らない悲哀と喜悅とを有つてゐる。さう云ふ女は、いつも何事かを訴へ、何事かを言ひたがる。言はなければならぬ時には、身慄をし、俄に涙を流し、それから急に自分の兩手を相手の頸に巻き付け、長い間相手の眼を見詰め、それから空を見ながら自分達の生活は呪はれてゐると言ふ。どうかすると、卒倒することがある。オプローモフは斯うした處女を怖れて避けてゐた。彼の心はまだ潔白で、そして無垢であつた。彼の心は、自分の愛と自分の支柱と自分の感激的な情熱とを待つてゐたらしい。が、やがて年を経るに従ひ待つことを止めて、絶望に陥つたらしい。

オプローモフはもつと冷淡に友人の群と別れを告げた。村の村長から初めて滞納と不作との通知に接した後、直ぐに最初の自分の友人なる料理人を料理女に變へた。次に馬を賣り、最後に他の(友人)達を解雇し

た。

殆んど何物も、彼を家の中から引出すことは出来なかつた。彼は毎日益々固く益々凝つと自分の室の中に閉ぢ籠つてゐた。

最初、彼は一日中衣服を着てゐるのが苦しかつたが、やがて客に行つて晝餐を御馳走になるのも面倒になつた。たゞ一寸知合つた者や獨身者の家へは行つた。其處では、ネクタイを除けたり、チョッキの釦を外したり、(また横になつたり)、一時間くらゐなら眠つたりすることも出来たからである。

程なく、彼は夕方が厭になつた。それは、燕尾服を着たり、毎日髯を剃つたりしなければならぬからである。

彼は何かで、朝の水蒸氣は身體に善いが、晩の水蒸氣は悪いと云ふことを讀んだので、それ以來濕氣を怖れるやうになつた。

オプローモフには斯うした奇癖があつたにも拘らず、彼の親友シトリツは、よく彼を人中へ引つ張り出したが、度々ベテルブルグからモスクワやニジニヤやクリミヤへ行き、終には外國へ行くので、彼のゐない時には、オプローモフは再たすつかり例の孤獨と獨居との中に沈没してしひ、其處から彼を引き出し得るものは、たゞ毎日の生活現象の中珍らしい異常なものだけであつた。が、さうした現象は一つも無かつたし、また將來に豫想することも出来なかつた。

それに、年齢をとるに従つて、一種の子供らしい臆病心と、毎日の生活状態の中に見ない種々な事件から

危険や災難が起るものだと言ふ豫期とが——種々様々な外部的現象に馴染まない結果が——彼の心中に歸つて来た。

例へば彼の寢室の天井の割目は、彼を驚かさなかつた。彼はそれに慣れてゐた。彼はまた室の中に長い間閉ぢ籠められてゐる空氣や何時までも室の中に閉ぢ籠つてゐることが、夜の濕氣よりも更に彼の健康を害するものであると云ふことも考へなかつた。彼は毎日胃の腑を満して置くことが、一種の漸進的殺人であると云ふことも考へなかつた。彼は斯う云ふことに慣れてゐたので、少しも驚かなかつた。

所が、彼は運動や、生活や、雑沓や、俗事に慣れてゐなかつた。

雑沓ツクシムの中に入ると、彼は息苦しさを感じるのであつた。小舟に乗ると、無事に向う岸に着けるかどうかと心配した。馬車に乗ると、馬が暴れ出して、馬車を打ち壊しはしないかと氣遣ふのであつた。

その外、神經的の恐怖が彼を襲ふこともあつた。つまり彼は自分の周圍まわりのの靜寂に驚くのである。或は自分でもどう云ふ理由か知らなかつたが——彼の身體ぢうを小蟻が匂ひ廻つてゐるやうに感ずるのであつた。どうかすると、彼は暗い隅を怖々と横目で見るものがあつた。それは、想像の戯れが超自然的な現象を見せるやうな氣がするからであつた。

彼の社會的の役目は斯う云ふ風に演ぜられた。彼は自分を欺き或は自分が欺いた青年時代の凡ゆる希望と、年老いて思ひ出すと人によつては胸の跳るのを感じるやうなら悲しく輝かしい凡ゆる追憶とに對し、氣懈けいせいさうに片手を振るのであつた。

六

彼は家に居つて何をしてみたらう？ 讀んでゐたのだらうか？ 書いてゐたのだらうか？ それとも學問をしてゐたのだらうか？

さうだ、彼は書物でも新聞でも、手に入りさへすれば、それを讀むのである。

何か有名な作物のことも聞くと——彼にはその作物を知らうと云ふ熟望が起る。彼はその書物を搜す。人にも頼む。若し其の書物を直ぐに持つて来て呉れる者があると、彼はそれを讀み、その問題の觀念を形造らうとするが、もう一步でその問題を理解しようと言ふ所で、彼はもう横になつて、茫然と天井を眺めてゐる。そして終まで讀まれず又理解されなかつた書物は、彼の傍に横はつてゐる。

彼は熱中よりも冷却の方により速く捉はれるので、一度見棄てた書物にはもう決して歸らなかつた。

然し、彼は他人のやうに、凡ての人のやうに、十五歳まで寄宿舎で學問をした。それから、オプローモフ家の老人達は、長い議論の揚句、イリユーシヤ(譯者註。オプローモフの名イリヤの愛撫稱。)をモスクワへ出すことに決めた。モスクワで彼は厭々ながら學問を卒つた。

彼はその臆病でだらけた性質に妨げられて、他人の中では、甘垂ッ兒の爲に例外を作つてゐない學校では、自分の懶惰と我儘とを露骨に現はさなかつた。彼は詮方なしに教場で行儀よく腰掛けて、教師の言ふことを聞いてゐた。それ以外何をすることも許されなかつたからである。それから苦しんで、汗を流したり、溜息

を吐いたりしながら、自分に課された日課を勉強した。

兎に角、彼は斯う云ふことは皆、我々の罪惡の爲に天から與へられた罰だ、思つてゐた。

教師は日課を出す時、爪で或る行の下に標しるしを附けるのだが、オブローモフはその標しるしより先を決して見なかつた。彼はまた質問もしなければ、説明を求めるやうなこともなかつた。彼は手帳に書かれてゐるだけに満足して、面倒な好奇心を現はさなかつた。聞いたり、學んだりしたことを了解しなかつた時でさへ。

彼は統計學とか歴史とか政治經濟學とか云ふやうな名前の書物をどうかして手に入ると、非常に満足するのであつた。

シトリツがオブローモフの學んだ書物以外に讀む必要のある書物を彼の所へ持つて來た時など、オブローモフは長い間黙つてシトリツを見てゐた。

「ブルタース、お前は僕に反對だ！」彼は書物を讀みながら溜息を吐いて斯う言ふのである。

餘り不穩當な書物を讀むことを、彼は不自然であり、苦痛であると思つた。

何の爲に多くの紙と時間とインキとを費して、こんな帳面を作るのだらう？ 何の爲に教科書を作るのだらう？ また六七年間の幽閉と、凡ゆる嚴格と、懲戒と、端坐と、日課による疲労と、まだ残らず日課を終らないうちに走つたり、巫山ふざけ戯たり、笑つたりすることを禁止するとは、一體何の爲なのだらう？

（何時生活するのだらう？）と、オブローモフは再び自問するのであつた。（結局何時この知識の資本を運轉するのだらう？ この知識の大部分は、生活上何の役にも立たないものではないか。例へば、政治經濟學も

代數學も幾何學も——こんなものを俺はオブローモフカ村で何に使ふのだ？）

歴史そのものは、悲哀を齎らすに過ぎない。學問をし、書物を讀んで見ると、災厄の年が來たこと、人間が不幸なものであることが分る。其處で、力を準備し、働き、騒ぎ、非常な勞苦を忍び、たゞ／＼晴やかな日の到來を待つ。愈々その日が來る。此處で歴史そのものも休息すればいゝのに、さうはならない。再た黒雲が現はれ、再た建物が倒れ、再た働き騒がなければならぬ……晴やかな日は停止せずに逃げて行く——生活は絶えず流れ流れて、破壊が破壊に續く。

眞劍な讀書が彼を疲れしたのである。思想家等も、推理的な眞理に對する饑渴を、讀書に癒すことに成功しなかつた。

その代り、詩人は彼の肺腑を貫くものであつた。彼は、凡ての人と同様、青年になる。幸福な、何人にも裏切らない、凡ての人に微笑む生活と、力の充實と、生活に對する希望と、幸福の希求と、勇氣と、活動と、心臓や脈搏の強い鼓動時代と、戰慄と、感激の言葉と、甘い涙との時期が、彼の爲にも來る。彼の智慧と心とは、光明に充たされる。彼は睡魔を拂ひ除ける。彼の心は活動を求める。

シトリツは自分の親友の天性が斯うであつたので、此の天性の爲めに出來るだけオブローモフの此の時期を長めることを援けた。

彼はオブローモフの詩的な心持を捉へて、一年半ばかりも彼を思想と學問とで鞭打つた。

若い空想の華々しい飛躍に乗じて、シトリツは詩を讀むことに享樂以外の他の目的を見出し、自分とオ

プロローモフとの生活の針路を遙かに嚴密に指差し、彼を將來に惹きつけた。二人は感激したり、泣いたり、お互に理智的な明るい路を進まうと云ふ華々しい約束を交換したりした。

シトリツの若々しい熱は、オプロローモフに感染した。彼は渴望と、勞苦と、遠いけれども魅力のある目的に燃された。

けれども、生活の花は散つて果實を残さなかつた。オプロローモフは次第に荒んで來た。時々シトリツの指圖に従つて種々な書物を讀むが、それも急がず、焦らず、何の衝動もなく、たゞ氣懈さうに一行一行と眼を走らせて行くだけであつた。

たとへ面白い個處があつて、其處に注意を留めても、若しこの時が食事の時刻であつたり、或は眠る時刻であつたりすると、彼は表紙を上にして書物を置いて、食事に行くか、或は蠟燭を消して寢床に入るかするのである。

また彼に書物の第一巻を貸す者があると、彼はそれを讀んで了つても、第二巻を貸して呉れとは言はないが、持つて來さへすれば——彼は徐ろにそれを讀む。

やがて、彼は速くも第一巻の方をも忘れて了ひ、自由な時間の大部分を、机に肘を置き、肘に頭を載せて送る。時には、肘の代りにシトリツが彼に讀ませようとして持つて來た書物を使ふこともある。

斯うしてオプロローモフはその修學を終つた。彼が最後の講義を聞いた日は、彼の學問にとつてヘルクレスの圓柱であつた。以前教師が爪で書物に標を引いたやうに、校長も彼の卒業證書に署名して標を引いた。こ

の小説の主人公は、此の標外に自分の知識慾を擴げる必要はないと思つてゐたのである。

彼の頭は、死んだ仕事や人物や時代や數字や宗教や何の連絡もない政治經濟學や數學やその他の眞理、問題、學説と云つたやうなもの、雜然とした記録保管所の觀を呈してゐた。

それは丁度智識の種々な部門によつて類別されてゐる半端な全集物の圖書館のやうなものであつた。

學問はオプロローモフに異様な影響を與へた。彼の學問と生活との間には、一つの深淵が横はつてゐた。彼はそれを渡らうとしなかつた。彼は生活は生活で學問は學問であると思つてゐた。

彼は凡ての現行法律學と、疾くに廢された法律學とを學んだ。實際裁判法の學科を卒業した。が、家に盜賊が入つた場合、警察に届書を書かなければならぬやうになると、彼は紙とペンとを執つて、考へに考へた揚句、遂々書記を呼びに遣るのであつた。

村の會計は村長がしてゐた。(學問が斯う云ふ所に何を餘地があるだらう?)と、彼は不思議さうに考へた。

そして彼は、智識の重荷を捨て、自分の獨居に歸つた。その智識は、彼の頭の中で自由に彷徨つたり或は暢氣に居睡つたりしてゐる彼の思想に、一定の傾向を與へることが出来るに違ひない。

では、彼は何をしてゐたのだらう? 矢張り自分の生活の模様を描き續けてゐたのだ。彼は或る相當の理由から、書物を讀まず學識なくしてはとても汲み盡せない程の智慧と詩趣とを自分の生活の中に、見出してゐた。

彼は官界と社會とを見切つてから、生存の使命を別種な意味に解決し始めた。そして自分の使命に思を馳せて、遂々彼の活動と實生活との地平線が、彼自身の中に潜んでゐることを發見した。

彼は家庭の幸福と領地に就いての心配とが、彼の領分に入つて來たことを知つた。その時まで、彼は自分の仕事を十分に知らなかつた。で、ストーリーツが時々彼の代りに仕事をしてくれることもあつた。彼は自分の収入も支出もよく知らなかつた。また決して豫算を立てるやうなこともなかつた。

オプローモフ老人は、その父親から領地を受け取つた通りにそれを息子に渡したのである。彼は一生涯村で暮してゐたが、惻口にもならなければ、當節の人達のやうに種々な目論見に頭を悩ますやうなこともなかつた。何とかして農産物の新源泉を見附けたいとか、或は舊源泉を擴張し、充實したいなどと騷擾するやうなことはなかつた。祖父の時代の蒔き方と農産物の賣捌方法とは、彼の時代にも其のまゝ残つてゐた。

殊に、老人は收穫がよかつたり、或は値段が上つたりして、去年よりも収入が多い時には、非常に満足するのであつた。彼は之を神様の祝福と名づけてゐた。そして金を儲ける爲に嘘を言つたり、無理をしたりすることを好まなかつた。

「親父や祖父達は俺達より馬鹿ではなかつたんぢや」彼は有害だと思ふ忠告には斯う答へるのであつた。「だから一生幸福に暮したんぢや。俺達も長生をしよう。神様が下さりや俺達は腹一ぱいになるんぢや」

彼は、少しも狡猾悪辣な手段を用ひずに、必要なだけの収入を得たので、毎日家族や多くのお客を集めて、思ふまゝに晝餐や晩餐を食ふことが出來た。彼はこれを神に感謝し、これ以上の収入を得ようとするのを罪

悪だと思つてゐた。

若し執事が彼のところへ二千留だけ持つて來て、その三分の一を自分の衣囊に押し込み、涙を流して害蟲や早魃や不作などを訴へると、オプローモフ老人も十字を切り、涙を流して斯う申し渡すのであつた。

「神様の御心だよ。神様と争へるもんぢやない。これだけあるのに對しても神様に感謝せにやならん。」

老人達が死んだ時から、村の經濟状態は良くならぬばかりか、村長の手紙でも分る通り、益々悪くなつた。だからオプローモフ自から村へ行つて、収入が次第に減つて來る原因を實地に調査しなければならぬことは、分りきつた話であつた。

彼はさうしようと思つたが、それを先へ先へと延して行つた。それは、一つには旅行と云ふことが、彼に取つて殆んど新しい、経験のない大仕事であつたからである。

彼は一生にたつた一度しか旅行をしたことがなかつた。それは羽子蒲團や、長持や、鞆や、煙製の肉や、丸パンや、種々な家畜と鳥との焼肉や、煮肉などを携へ、幾人かの召使を引連れた長の大旅行であつた。

彼は自分の村からモスクワまでの前後たつた一度の旅行を、斯う云ふ具合にし、そしてこの旅行を他の場合の旅行の標準にしたのである。所が、今は誰もそんな旅行をする者はない。たゞ一生懸命に駈けなければならぬと彼は聞いてゐる。

それから、オプローモフが自分の旅行を延ばしたも一つの理由は、自分の仕事の手順が、思ふやうに準備されなかつたことである。

彼は最早父親とも違へば、祖父とも違つてゐた。彼は學問をし、世間に生活した。之は、彼の先祖が有つてゐなかつた様々な思想に彼を導くものであつた。彼は収入を得ると云ふことを罪惡と思はなかつたばかりか、凡ての市民の義務が潔白な勞苦によつて社會の幸福を保つにあると云ふことをも理解してゐた。

だから、彼が孤獨の中に描いた生活の模様の大部分を占めてゐるものは、時代の要求に一致した領地經營と農民統治との清新な計畫であつた。

計畫の根本觀念とその配列とその主要部分とは——之等は疾くの昔に彼の頭の中に準備されてゐたが、ただ詳細な設計と豫算と數字には、まだ考へ及んでゐなかつた。

彼は幾年間か歩いてゐる時も、寝てゐる時も、人中にゐる時も、熱心に計畫し、考究し、思案したのである。或は種々な條項を加へて見たり、變へて見たり、或は夕方考へ出して夜中にもう忘れて了つたことを想ひ出して見たりした。どうかすると、稻妻のやうに、突然と思ひもよらぬ新しい妙案が閃めいて、頭の中で沸騰するのを書き綴ることもあつた。

彼は出来上つた他人の思想の細かい實行者ではなかつた。彼自身自分の理想の創造者であり、その實行者であつた。

彼は毎朝床を離れ、お茶を飲むと、直ぐに長椅子の上に横はり、頭を片手で支へ、力を惜まずに考へ耽るのである。そして遂々頭が過度な働きに疲れ、良心がお前は今日公益の爲めに十分に盡したのだと言ふまでその考へを止めなかつた。

その時、はじめて彼は勞苦から憩ひ、心配らしい姿勢を他のあまり事務的でなく、あまり嚴格でなく、空想と快樂とにより多く便利な姿勢に變へる決心をするのであつた。

事業の心配から解放されると、オプローモフは自分の中に没入し、自分の作つた世界に住むことを好んでゐた。

彼は高遠な思想を楽しむことも出来た。彼は全人類的な悲哀を有つてゐた。彼は或時は人類の不幸の爲めに心の奥底で苦い涙を流した。また何とも言ひ知れぬ苦痛と、煩悶と、それから何處か遠くへ、曾てシート・リツが彼を導いて行かうとしたことのある世界だらうと思はれるその國へ行きたいと云ふ衝動とを感ずることもあつた。

甘い涙が彼の兩頬をつたつて流れるのであつた……

彼はまた人間の惡癖と虚偽と諛誣と世界に漲たぎふ罪惡とに對する嫌惡の情に滿されたり、人間に自分の醜惡を見せたいと云ふ希望に燃えたりすることがあつた。また俄かに彼の中に思想が火の手を揚げたり、海の波のやうに、彼の頭の中を流れ漂つたりした揚句、計畫に變つて彼の全身の血を沸かせるやうなこともあつた。さうした時には、彼の筋肉は動き、血管は緊張し、計畫は希求に變るのである。精神力に動かされた彼は、その瞬間忽ち二三度様子を變へ、眼を輝やかし、蒲團の上に半ば身體を起し、片手を差し伸べて、感激したやうに周圍を見廻す……そして、そして、その希求は實現される。成功する……その時、あゝ！斯うした高尚な努力から、どんな奇蹟とどんな幸福な結果とを豫期することが出来るだらう！

ところが、どうだ。朝は閃めき去り、晝はもう夕暮に傾く。オプロモフの疲勞した力も晝と一緒に平靜に傾く。暴風と感動とは心の中で沈靜し、頭は智慧から離れ、血は益々徐かに血管の中に吸ひ込まれる。オプロモフは靜かに惱まし氣に仰向になり、悲しげな眼を窓と空とに向け、憂はし氣に太陽を見送る。太陽は誰かの四階建の家の彼方へ莊嚴に降りて行く。

斯うして彼は幾度日没を見送つたらう！

朝になると、再た生命を感じ、再た感激と空想とを感じる！ 時によると、彼は自分を或る強い將軍のやうに思つて見るのが好きであつた。この將軍の前には、ナポレオンは勿論のこと、エルラン・ラザレウキチでさへ何の力もない。そして彼は戰爭と其の動機とを考へる。例へば、彼の國民がアフリカから歐羅巴へ侵入する。或は彼が新しい十字軍を起し、國々を征服し、國民の運命を解決し、市街を破壊し、寛恕し、刑罰し、善行と勇敢との勳功を表彰する。

彼はまた思想家と偉大な藝術家の立場を選んで見る。凡ての人々は彼を崇拜する。彼は月桂冠を得る。群集は彼の後を追ひながら斯う叫ぶ、

「あれだ、あれだ、あれが我國で有名なイリヤ・イリイチ・オプロモフだ！」

懊惱の瞬間には、彼は心配の爲めに苦しむ。一方から一方へ寢返りを打つ。顔を打つ伏して横はる。どうかすると、全く茫然自失することがある。さう云ふ時には、彼は蒲團の上に跪づいて、熱心をこめて祈禱を始める。どうかして脅威する嵐を鎮めるように天に願ふのである。

やがて彼は自分の運命に就いての配置を天に委せて了ふと、世の中の凡ゆるものに対して平靜になり、冷淡になる。嵐は遂にその暴威を收める。

斯うして彼は自分の精神力を動かし、斯うして毎日度々感亂してゐたのである。そして晝が夕暮に傾き、太陽が大きな球になつて、莊嚴に四階建の家の彼方に隠れようとする頃、彼は深い溜息を吐きながら、魅惑的な空想から、若くは苦痛な心配から醒めるのであつた。

その時、彼は再た沈んだ眼附と悲しげな微笑とで太陽を見送り、感激から平靜に歸るのである。

誰もオプロモフの此内部の生活を知らなかつた。又それに氣附かなかつた。で、皆はオプロモフは寢てばかりゐて、それが爲めに健康を害なつてゐるので、彼からはそれ以外何も期待することは出来ない、彼の頭の考へも萎まずにゐられまい、と思つてゐた。彼を知つてゐる者は、皆彼の事を斯う解釋してゐた。

尤も、シトリツはオプロモフの才能と燃えるやうな頭や道義心に富んだ心の内部的噴火作用を詳細に知つてゐたので、之を證明することが出来たに相違ないが、然し彼は殆んどベテルブルグにゐなかつた。

たゞザハールだけは、その一生涯を自分の主人に捧げてゐたので、主人の内部の状態をなほ詳しく知つてゐたが、然し彼とても自分は主人と一緒に仕事をしてゐるし、また當然な常規的な生活をしてゐるので、それ以外には生活のしやうはないと信じてゐた。

ザハールは、五十歳前後であつた。彼は露西亞のカレーブの直系の子孫ではなかつた。カレーブと云ふのは、自分を忘れて主君に忠勤を勵む所の恐怖と不満とを知らぬ武士出の従僕で、様々な優れた善行に富み、少しも悪癖を有たないので有名であつた。

この武士ザハールは、恐怖と不満とを有つてゐた。彼は二つの時代に屬する者で、彼にはこの二時代の捺印がある。一つの時代から彼が遺産として受け繼いだものは、オブローモフ家に對する無限の忠勤で、他の最近の時代から受け繼いだ遺産は氣風の類廢であつた。

彼は主人に心から服従してゐたが、然し主人に何か嫌を言はない日は珍しかつた。舊時代の召使は、主人の放縱と不節制とを抑止する者であつたが、ザハールは主人の金で友達と一緒に酒を飲む事が好きであつた。昔の召使は、去勢従者のやうに貞操を守つてゐたが、このザハールは始終怪し氣な女のところへ駈け出すのであつた。昔の召使はどんな手箱よりも確實に主人の金銭を守るのに、ザハールと來ては、金を出す機會さへあれば、主人から十哥銀貨の一枚くらゐは誤魔化さうとして隙を狙ひ、卓子の上に十哥か五哥の銅貨でも載つてゐると、屹度それを自分の懐に入れるのであつた。だから、若しオブローモフがザハールから剩錢を要求するのを忘れると、その剩錢はもう決して彼に歸つて來なかつた。

彼は大金を盗みはしなかつた。それは、自分の要求を十哥銅貨と十哥銀貨とで測つてゐた爲めか、或は露見を怖れた爲めかで、決して廉潔心があり餘つてゐる爲めではなかつた。

昔のカレーブは、立派に馴けられた獵犬のやうに、若し感奮すれば、自分に託された糧食の上でも喜んで死

んだものだが、このカレーブは、託されない物さへ飲んだり、食つたりしようとキョト／＼してゐる。昔のカレーブは、主人が澤山食ふやうにとそればかりを心配し、主人が食はない時には悲しんだものだが、このカレーブは、皿の上に何を載せても、主人がそれを一つ残さず食つて了ふことを悲しむのである。

そればかりか、ザハールは譏誚者であつた。彼は料理部屋でも、商店でも、門の傍の會合の時でも、とてもやりきれないとか、あんな悪い主人はまだ聞いたことがないとか、我儘で吝嗇家で怒りっぽいとか、何をしても主人の氣に入らないとか、一言で云ふと、彼の人の傍に生きてゐるより、一層のこと死んで了つた方がよつぽといふなど、毎日訴へるのであつた。

ザハールがこんなことを言ふのは、主人を憎むからでもなければ、また主人を陥れようと云ふ考へからでもない。たゞ彼が祖父や親父から受け繼いだ習慣によつて、適當な機會さへあれば主人を貶すのであつた。彼はどうかすると、退屈な爲めに、話題の缺亡の爲めに、若くは自分の聴衆によけいに興味を興へる爲めに急に主人に就いてありもしない虚構を言ひふらすこともあつた。

「俺んこの旦那は、いつもあの寡婦さんとこへ行きやすだよ。」と、彼は靜かに確實らしく嘆れ聲を出す。「昨日もあの女郎に手紙を書いた。」

また彼は自分の主人が世間に珍らしい骨牌好きの泥醉漢で、毎晩夜明まで續けさまに骨牌を打ちながら、強い酒を呷つてゐる、など、吹聴することもあつた。

が、そんなことは全然なかつた。オブローモフは寡婦のところへ行かなかつた。毎晩温順しく眠つて、骨

牌などを手に取つたことさへなかつた。

ザハールは不精な男であつた。彼は髯を剃ることも手や顔を洗ふことも稀であつた。大抵は洗つたやうな風をするだけらしい。洗つても、石鹸で洗ふやうなことはない。彼が湯に入つた時だけは、彼の黒い手は僅か二時間ばかり赤くなつてゐるが、再たやがて黒くなる。

彼は非常に不器用な男であつた。門や扉を開ける時にも、その一方を開けると、他の一方が閉まる。閉つた方を開けようとして既け出すと、開いてゐる方が閉る。

彼は床に落ちた手巾でも、また他の品物でも決して一度で拾ひ上げることが出来ない。いつも三度くらゐは屈んで、それを拾ふやうな恰好をする。そして四度目あたりに辛つと拾ふ。どうかすると、拾つたのを再た落すこともある。

彼は澤山な食器やその他の物を持つて室を通り、けることがある。さうした時には、一步踏み出すと、上の物が床に落ち始める。最初は一つ落ちる。彼は急に其の落ちるのを止めようとして遅れ走せに妙な身振りをする。そしてなほ二つ落す。彼は、口をあんと開けたまゝ、吃驚して落ちた物を眺め、手に残つてゐる物を見ない。其處で益か斜になる。その上に載つてゐる品物はバタ／＼と落ち続ける。斯うして、彼は時によると、室を出ようとする頃には、たつた一つの盃か若くは皿を持つてゐることがある。また時によると、手に残つた最後の一つを罵り呪つて投げつけることもある。

彼は室の中を通る時、卓子や椅子に足や横腹を衝突け、大抵眞つ直ぐに扉の開いた方へ行かず、閉つてゐる

方に肩を衝突ける。さうすると、彼は此の兩方の扉や家主や或は此の扉を作つた大工などを罵る。

オプローモフの書齋の品物は、殊に注意して取扱はなければならぬ弱々しい品物は、皆折れるか壊れるかしてゐる。これも皆ザハールのお蔭なのである。彼は自分の器物取扱法を一様に凡ての器物に應用し、どんな品物を取扱ふ場合にも、少しも區別を置かないのである。

例へば、蠟燭の燃心を除けたり、洋盃に水を注いだりすることを言ひ付けられた時でも、彼は扉を開ける程の力をこれに用ゆるのであつた。

ザハールが熱心に主人の機嫌を取つたり、器物を取り片附けたり、掃除をしたり、置き換へたり、元氣よく一度で整頓させようなど考へたらどうだらう！ 彼の與へる不幸や損失は、莫大なもので、たとへ敵兵が家の中に闖入しても、それ程の損害を與へようとは思はれない。破壊される種々な品物は敲き落される。器物は衝突かり合ふ。椅子はひっくり返される。結局、それは彼を室の中から追ひ出すか、或は彼自身が悪罵と呪咀とを残して出て行くかしなければ濟みはしない。

が、幸に、彼がそんな熱心に燃えることは、極く稀であつた。

これは無論彼が華美に氣まぐれに飾り立てた種々なものが一ばいに並べられてゐる狭く薄暗い書齋や婦人室の中でなく、田舎の廣々とした平和な自由の空氣の中で教育を受け、禮儀作法を習つたからである。

田舎で彼は何物にも自分の行動を制限されずに、頑丈な器物を扱ひ慣れてゐたのである。彼が手にしたものは、皆な丈夫な器具、例へば鋤や鐵槌や鐵製の扉用鑿や床に作り附けた椅子などであつた。

他の器物、例へば、燭臺や洋燈や下敷野紙や文鎮などは、三年でも四年でもその場所であれば何ともないがそれを彼が一寸でも持つと、直ぐに壊れて了ふのである。

「ヤツ、」と、彼はどうかすると吃驚してオブローモフに言ふことがあつた。「見なせえよ、且那樣、何てえ奇妙な品物で御座んすべえ。これを持つと直ぐがら／＼と壊れやしたよ。」

でなければ、まるつきり何も言はず急いで以前の場所に置き、後で其れが自然に壊れたやうに主人に信じさせるのであつた。また時によると、この小説の初にあつたやうに、器物は何でも壊れる時が来るもので、それがたとへ鐵製の器物でも、永久に無事であるものではないなど、辯解することもあつた。

最初の二つの場合には、まだ彼と争ふ餘地があつたが、彼が極端に最後の論法で武装すると、もう幾ら反對しても無益で、彼は上告もせず勝訴者となるのであつた。

ザハールは一定の活動範圍を一度決めたが最後、もう決して永久にその範圍を踏み越える様なことはなかつた。

彼は朝になると、湯沸器サモワールに火を入れ、靴を磨き、主人の要求する衣服の埃を拂つたが、言ひ付けられない衣服ならば、それがたとへ十年間懸かつてゐても、決してその埃を拂ふやうなことはなかつた。

それから彼は室の隅々を残してその眞中だけを掃き——それも毎日ではない——何も載つてゐない卓子の埃だけを拭いた。器物を取り除けずに済むからである。

さうすると、彼はもう寢煖爐の上で居睡をするか、料理部屋でアニシヤとお饒舌をするか、門の傍で庭番

に無駄口をたたくかしていゝものと思ひ、他のことには少しも氣を配らなかつた。

若し彼にそれ以上何か仕事を言ひ付けようものなら、彼は厭々ながらその言ひ付を實行するのであつた。それも議論をした揚句で、彼は何處迄も言ひ付の無益であること、言ひ付を實行することの不可能なことを信じてゐるのである。

どんな方法を用ひても、彼が描いた業務範圍の中に、不斷の新簡條を入れることは出来なかつた。

若し彼は或物を磨いたり、拭いたり、或はそれを持つて行つたり、持つて來たりするやうに言ひ付けると、彼は例の通り、呟きながらその言ひ付を實行するが、その後それを平常いつも彼自身でするやうに望んでも、その望を遂げることは、不可能であつた。

翌日になり、翌々日になり、それから更に日を経ると、それを更に言ひ付け、それを納得させる爲めに再び彼と喧嘩をしなければならなかつた。

それにも拘はらず、つまり、飲んだり、讒言をしたりするのが好きで、オブローモフから五哥や十哥の銅貨を盗み、種々な器物を壊したり、割つたり、潰けたりするにも拘はらず、ザハールは矢張り自分の主人に對して深く心服してゐる召使であつた。

彼は主人の爲に水火を辭さないくらゐであつた。彼はそれを驚嘆若くは賞讃に價するやうな手柄だと思はなかつた。彼はそれを自然な、それ以外にしゃうのない事と見てゐた。否、寧ろ何とも見てゐる譯ではなく、たゞ何の判断もなくさうするのだと言つた方がよい。

この事に就いて、彼には少しも理窟はなかつた。彼はオプロモフに對する自分の感情や態度を分解して見ようなどと、一度も考へたことがなかつた。彼の感情や態度は、彼自身が作つたものではなく、彼の父親や祖父や兄弟や彼が生れてから教育されるまでその周圍に居つた召使達から承け繼いだもので、それが遂に彼の血と肉になつたのである。

ザハールは主人の身代りに死ぬことさへ辭さないだらう。彼はこれを自分の避け難い天與の義務だと思つてゐた。そして何とも思はずに、たゞ單に林の中で獸に會つた犬が、何故主人の代りに自分が其の獸に飛びかゝらなければならぬかと云ふことを判斷せずに、飛びかゝるやうに死に飛びかゝるに違ひない。

けれども、その代り、主人の病床の傍で眼を瞑らずに夜通し看護しなければならぬ時でも、そしてその看護次第で主人の健康と生命とがどうでもなると云ふやうな場合でも、ザハールは屹度眠るに違ひない。

彼は主人に對する柔順を表面に現はさないばかりか、寧ろ主人に對する彼の態度は亂暴で慣れ過ぎてゐた。一寸したことにむきになつて怒つた。そして前にも言つた通り、門の傍で彼のことを譏諷するのであつた。けれども、それが爲めに彼の血に傳つた心服心は、たゞ一時蔽ひ隠されるだけで、決して減りはしなかつた。彼はこの心服心を、オプロモフに對してのみならず、オプロモフの名前を冠してゐる凡てに對して、自分に親近で、愛らしく、尊いものゝ凡てに對して懐いてゐたのであつた。

この感情は、オプロモフの人格に對するザハール自身の見解に矛盾してゐたかも知れない。ザハールは主人の性格を研究して、全く別な信念を有つてゐたらしい。だから、若しオプロモフに對する彼の心服の

程度を彼に説明する者があると、彼はそれに反對するだらうと思はれる。

ザハールがオプロモフを愛してゐたのは、猫が自分の天井裏を愛するのや、馬が厩を愛するのや、また犬が自分の生長した犬小舎を愛するのと同じことであつた。然し、斯うした心服を主人に捧げてゐるうちに、彼は獨特な個人的印象を形造つた。

例へば、ザハールは料理人よりオプロモフ家の馭者を愛した。またその二人より家畜番のワルワラを愛した。が、オプロモフに對する彼の愛は、以上の誰よりも少なかつた。けれども、ザハールに取つてオプロモフ家の料理人は、世界ぢうの他の凡ての料理人より偉かつたやうに、オプロモフも他の凡ての地主達より偉かつた。

ザハールは給仕人のタラースカをひどく嫌つてゐたが、このタラースカを世界ぢうで一番立派な人と代へることは出来なかつた。何故なら、タラースカはオプロモフ家の者だからである。

ザハールのオプロモフに對する態度は、慣々しく、そして亂暴であつた。それは、丁度黄教の僧侶が自分の偶像を亂暴に慣々しく取扱ふのと同じであつた。黄教の僧侶は偶像を掃いたり、取り落したり、どうかすると、悲しさうにそれを敲くことがあるが、その心にはいつもこの偶像の天性が、自分の天性に優つてゐることを意識してゐるのである。

ザハールの心の奥底からこの感情を呼び出し、彼に崇敬の念を以て主人を見させ、時によると感動して涙を流させるやうな動機は、極く詰らないことである。ザハールに他の主人を自分の主人以上にゆかないまで

も同等に尊敬させたいものだ！ 他の主人もそれをするやうに考へて貰ひたいものだ！

ザハールは、オプローモフのところへ来る他所の旦那やお客などを、少し眼下に見下し、一種の好意的な態度で他所の旦那やお客に仕へたり、これにお茶を御馳走したりするのであつた。それは、自分の主人のところへ来て受ける名譽を、彼等と感じさせようとするものゝやうであつた。従つて、彼等に對するは挨拶は亂暴であつた。

「主人はまだ寢てゐるだよ。」と、彼は傲然と來客の足の先から頭まで見廻しなから言ふ。

どうかすると、ザハールは商店や門前の集合などで、主人の讒言や惡體を言はずに、急に無闇に主人を讀め千切ることがあつた。さう云ふ時には、彼は際限もなく感激するのであつた。彼は急に主人の價値や智慧や愛嬌や寛大や善行などを算へ始めるのであつた。頌徳詞の爲めに自分の主人の性質で足りなければ、他所の主人の性質を借りて来て、自分の主人に著名や富裕や非常な權力を附け加へるのであつた。

若し家を取締つてゐる庭番や又は家主などさへ嚇かす必要がある時には、ザハールはいつも自分の主人を以て脅した。(よし、主人に言つてやる。)と言つて彼は嚇した。(覚えてゐろッ！)彼は世の中で一番強いものは、權威であることを疑はなかつたのだ。

けれども、オプローモフとザハールとの表面上の關係は、いつもお互に憎み合つてゐるかのやうであつた。二人は一緒に暮してゐるうちに、お互に飽きたのである。人と人とが毎日僅かの間接觸することは、双方にとつて中々面倒なものである。双方がたゞ良い點だけを認め合つて、お互の缺點を發いたり、發かれたりし

ないやうにするには、生活上の經驗と理論と暖かい心とを十分に有つてゐなければならぬ。

オプローモフはザハールの一つの大きな價値を知つてゐた。それは、自分に對する心服であつた。オプローモフはザハールが自分に心服せずならぬこと、また心服しなければならぬことを知つて、彼の心に慣れてゐた。永久に長所に慣れると、オプローモフは、最早その長所を喜ばないやうになつたのみならず、何事にも冷淡であるに拘はらず、ザハールの無數の小さい缺點を忍ぶことが出来なかつた。

ザハールはその心の奥底に、昔の召使に特有な主人に對する心服を感じてゐたが、然し、彼が昔の召使と違ふ所は、時代の缺點を有つてゐることであつた。またオプローモフも内心ザハールの心服を認めてゐながら、昔の主人が自分の召使に對して有つてゐたやうな親しい、殆んど骨肉に對するやうな心持を失つてゐた。彼は、どうかすると、ザハールを怖ろしく罵ることさへあつた。

ザハールも矢張りオプローモフに愛想を盡かしてゐた。彼は若い時分に主家で召使の仕事を止めて、オプローモフのお守役にされたのであつた。その時以來彼は自分を豪華の道具、貴族の附屬物と思つてゐた。そして、この附屬物は舊家の名聲と光輝とを保つもので、是非なければならぬ必需品ではないと思つてゐた。だから彼は小さい主人に朝は衣服を着せ、晩は衣服を脱かせるだけで、それ以外の時には、暢氣に何もしなかつたのである。

生來懶惰な彼は、召使としての教育を受けた爲めに、更に一層懶惰になつた。彼は召使共の中で尊大振つてゐた。で、湯沸器に火を入れたり、床を掃いたりする勞苦を自分に與へなかつた。彼は客間で居睡をする

か或は女中部屋や料理部屋へお饅舌に行くかするだけであつた。でなければ、幾時間でも両手を胸に組み合せて、門の傍に立ち、沈んだ顔をして眠さうに四方を見廻してゐるのであつた。

斯うした生活をして来た揚句に、彼は俄かに一家の仕事を自分の双肩に擔はなければならぬやうになつた。彼は主人の用事をたしたり、掃いたり、拭いたりして始終駆けずり廻つてゐなければならなかつた。斯う云ふことから彼の心には陰鬱が横はり、その氣質には粗暴と残酷とが現はれたのである。これが爲めに、彼は主人の聲が彼を寢煖爐から離れさせる度毎に唸り聲を出した。

けれども、ザハールは表面こんなに粗暴であつたのに、その心は非常に優しく、そして善良であつた。彼は子供と一緒に時を送ることさへ好きであつた。彼が屋敷の中や門の傍で、子供の群に混つてゐるのを見かけることは、度々あつた。彼は子供達を仲裁したり、喧嘩をさせたり、遊戯をさせたり、或は單に彼等と一緒に腰を掛けて、その一人を一方の膝に載せ、他の一人をも一つの膝に載せてゐることもあつた。そして一人の照顔兒は、後方から彼の頸を両手で蔽いたり、或は彼の頬髯を引つ張つたりなどしてゐることもあつた。

けれども、オブローモフは絶えずザハールを自分の傍に呼びつけて置いて、之に用事を命じた。で、ザハールは自分の思ふやうに生活することを妨げられた。従つて、心と話好きな氣質と仕事嫌ひと絶えず欠伸したいと云ふ永久の要求とが、ザハールを或は教母のところへ、或は料理部屋へ、或は商店へ、或は門の傍へ引きつけたのであつた。

彼等は疾くからお互に知り合つてゐた。疾くから二人で生活してゐた。ザハールは小さいオブローモフを両手に懐いて守をした。オブローモフは若々しく、素敏く、大食で、そして狡猾な若者時代のザハールを記憶してゐた。

舊い關係は、二人の間に断たれなかつた。オブローモフは、ザハールの授けなしに、起ることも寝ることも頭髪を梳ぐることも靴を穿くことも晝餐を食ふことも出来なかつた。ザハールもオブローモフ以外に着せたり、食はせたり、亂暴をしたり、悪口を言つたり、偽つたり、同時に内心で尊敬したりする他の存在を、他の主人を想像することは出来なかつた。

八

タランチエフとアレクセーエフとが出て行つた後の扉を閉めたザハールは、主人が今直ぐに自分を呼ぶだらうと思つて、寢煖爐へ上らなかつた。何故なら、主人が書きものをしようと思つてゐることを聞いたからである。けれども、オブローモフの書齋の中は、墓のやうに森然としてゐた。

ザハールは隙間から覗いて見た。と、何と云ふわけだらう？ オブローモフは脇杖をついて、長椅子の上に横たはつてゐる。彼の前には書物が横たはつてゐる。ザハールは扉を開けた。

「どうしてお前さま、また寢さつしやるだ」と、彼は訊いた。

「邪魔をするな、この通り書物を読んでるんだ！」と、オブローモフは吐き出すやうに言つた。

「もう顔を洗つて、書きものをしていゝ時分だに。」と、ザハールは執拗く言つた。
 「さうだ、全くさうだ。」と、オブローモフは我に歸つた。「今直ぐに行く、彼方へ行け。俺は一寸考へるこ
 とがあるんだ。」

「再た何時の間にあの人は寝たんだ！」と、ザハールは燠爐の上に乗び上りながら唸つた。「速えもんだ！」
 けれども、オブローモフは長い間開けつ放しになつてゐた爲めに黄色くなつた書物の一頁を讀んで了つた。
 彼は其處を一ヶ月も前から讀みかけてゐたのであつた。彼は書物を以前の所に置いて、欠伸をした。そし
 て（二つの災難に就いて）際限もなく考へ耽つた。

「何と云ふ不愉快なことだらう！」と、彼は兩脚を伸したり、縮めたりしながら囁いた。

彼は快感と空想とに耽りたかつた。彼は眼を空に向けて、自分の最愛の天體を探したが、その天體は丁度
 中天に懸かつてゐて、漆喰を塗つた家の壁に閃々とその光を注いでゐた。その天體は、毎晩此の家の彼方に
 没する頃、オブローモフの眼に入るのであつた。（いや、先に仕事をしよう。）と、彼は眞面目に考へた。（そ
 れから……）

田舎の朝が疾くに過ぎ去つた頃、ベテルブルグの朝は始まるのである。戶外からは、人間の聲や人間でな
 い動物の聲が、雑然と騒々しくオブローモフの耳に入つた。それは、大使達の歌と澤山な犬の吠聲とであつ
 た。彼等は海獸を見せに来て、様々な聲色で出来るだけの天産物を紹介してゐるのであつた。
 オブローモフは仰向に横たはつて、兩手を頭の下に敷いてゐた。彼は領地の計畫を考へてゐたのである。

彼の頭の中を、年貢と耕地とに就いての眞面目な根本的な考へが、幾つか素速く駆け通つた。彼は百姓の懶
 惰と逃走とを豫防する爲めに、非常に嚴重な新方法を考へ出した。それから村に自分の生活を築くと云ふこ
 とに移つて行つた。

彼は田舎造りの家を建てることを考へた。彼は暫く楽しさうに室の配置を考へた。食堂と球突場の長さや
 幅を定め、自分の書齋の窓を何方に向けようかと考へた。なほ家具や絨毯のことさへ考へることを忘れな
 かつた。

次には、傍屋の位置や招待しようと思ふお客の數を考へた。厩や納屋や女中部屋やその他の種々な仕事部
 屋の場も定めた。

遂々彼は庭園に考へを移した。彼は古い菩提樹と櫻の木を以前のまゝにして置き、林檎と梨を絶やし、そ
 の跡にアカシヤを植ゑることに決めた。彼は公園のことも考へたが、費用を精細に豫算すると、餘り金がか
 かることが分つたので、それを後日に譲り、先づ花壇と温室とに移つた。

こゝまで考へて來ると、彼には魅力に富んだ將來が生々と閃めいた。彼は俄かに數年後の村の生活に考へ
 及んだ。その時はもう彼の領地は、彼の計畫通りに整理され、彼は其處に落着いた生活を營んでゐるのであ
 る。

彼は夏の夕、露臺でお茶を飲んでゐることを想像した。彼の頭上には、太陽の光線も透らない程に繁つた
 木の葉が、暮のやうに覆ひ被さつてゐる。彼は長い煙管を銜へ、氣憚さうに煙を吸ひ込みながら、樹立の蔭

から見える景色と涼氣と靜寂とに恍惚としてゐる。遠くには、烟が黄ばんでゐる。太陽は馴染みの小さい樺林の彼方に沈みながら、鏡のやうに滑らかな池を紅く染めてゐる。烟には、水蒸氣が騰ち上つてゐる。次第に涼しくなつて、黄昏が来る。百姓達は、群をなして家路を辿つてゐる。

暢氣な召使共は門の傍に腰掛けてゐる。其處には、快活な聲やハツハツと云ふ笑聲やバラライカの音などが聞える。娘達は鬼ごっこをして遊んでゐる。彼自身の周圍では、彼の子供達が駆け廻つたり、彼の膝へ上つたり、彼の頸にしがみついたりする。湯沸器の彼方には……周圍の者の女王が、彼の神が腰掛けてゐる……女である！妻である！そのうちに淡白と飾りつけられた美しい食堂には、燈火が客待ち顔に煌々と輝き出す。大きな圓卓子には、卓布が掛けられる。執事に立身したザハールは、眞つ白い頬髯を房々させながら卓布を掛けたり、快い音をさせながら硝子器を並べたり、洋盃や肉刺を絶えず床の上に落しながら銀の食器を配列したりする。皆な豊富な晩餐の卓に就く。其處には、彼の子供時代の友達で、彼にとつて變りない親友シトリツも他の知人達も腰掛けてゐる。やがて皆眠りに行く……

オプローモフの顔には、俄かに紅い幸福の色が漲つた。空想は餘り鮮かで、生々として、そして詩的であつたので、彼は一寸顔を枕に壓し附けた。彼は俄かに愛と靜かな幸福との希望を微かに感じた。そして俄かに自分の故郷の野や丘や自分の家や妻子が慕はしくなつた……

彼は横向に五分間ばかり寝てゐたが、再た靜かに仰向になつた。彼の顔は、穩やかな感激に輝いた。彼は幸福であつた。

彼は楽しさうに徐かに兩足を伸した。それが爲めに、彼のズボンは少したくれ上つたが、彼はこの僅かな不態に氣づかなかつた。で、忠實な空想は、彼を軽く、自由に、遠い未來へ運んで行つた。

遂々大好きな空想が彼を呑んで了つた。彼は親友達と一緒に小さい植民地を作ること考へた。親友達は、彼の村の周圍十五露里或は二十露里の間の小村の農家に移住する。毎日交る交るお客に往來して、晝餐を食つたり、晩餐を食つたり、舞踏をしたりする。彼は毎日晴やかな日と晴やかな顔とを見る。その笑を湛へた丸い顔には、心配の皺もない。あるものは、鮮やかな血色と二重の顎と羨むことを知らない食慾とである。

永久の夏、永久の快樂、甘き食事、それから甘き懶惰が来る……

「おゝ！ おゝ！」幸福に充たされた彼は、斯う言つて我に歸つた。

その時、戶外から、「馬鈴薯！ 砂、砂は要りませんか？ 炭！ 炭！……慈悲深い皆さん、神様のお宮を建てるのですから、獻金をお願ひ致します！」と云ふ五つの聲が聞えた。新築中の隣の家からは、斧の音と勞働者の叫び聲とが聞えた。

「あゝ！」と、オプローモフは悲しさに聲を出して溜息を吐いた。（何と云ふ生活だらう！ この都會の喧騒は、何と云ふ厭はしいことだらう！ 何時望ましい天國の生活が来るのだらう？ 何時野原や故郷の森に行けるのだらう？）と、彼は考へた。（樹の下の草の上に横たはる。樹の枝を透して太陽を眺める。枝に幾羽の小鳥が止つてゐるかを數へる。其處の草の上に、丸々とした柔かい眩と燃えるやうな顎を露にした給仕女か、晝餐か或は晩餐を持つて来る。魔女は、眼を曇らせて禁裏りする……斯うした時は何時来るだらう？）

「だが、計畫は！ 村長は、借間は？」と、俄に彼の記憶の中に響いた。

「さうだ、さうだ！」と、オプローモフは狼狽して言った。「今直ぐ、今直ぐだ！」

オプローモフは急いで身體を起して、長椅子の上に乗った。やがて、彼は兩足を床に垂れた。その足は、一度でスリッパに入つた。斯うして彼は暫く坐つてゐたが、やがてすっかり起ち上つて、考へに耽つたまゝ、二分間ばかりも立つてゐた。

「ザハール、ザハール」と、彼は卓子とインキ壺を眺めながら大聲に叫んだ。

「またか、何の用事だんべえ？」飛び降りる音と一緒に斯う云ふ聲が聞えた。

「脚は棒になつちまつたよ！」と、ザハールは嘎れ聲で呟やいた。

「ザハール」と、オプローモフは眼を卓子から離さずに、沈んだ聲で繰り返した。「兄弟、これは一體……」

と、彼はインキ壺を指差しながら言ひかけたが、まだその一句を終らないうちに、再た思案に沈んで了つた。

その時、彼の兩手は上の方へ伸され、膝は曲げられた。彼は伸をし欠あぐひをしようとしたのであつた……

「彼處にチースが残つてゐるだらう」と、彼は全身を伸ばし、間を置きながら言つた。「さうだ……マデラ酒を持つて來い。晝餐まではまだ大分間があるから、俺は少し朝餐を食ふんだ……」

「何處にチースが残つて居りやすだ？」と、ザハールは言つた。「少しも残つちやいねえ……」

「どうして残つてゐないのだ？」と、オプローモフは遮つた。「俺はよく憶えてゐる。少し片があつた……」

「ねえだよ、ねえだよ！ 一片もねえだ！」と、ザハールは頑固に言つた。

「あるよ！」と、オプローモフは言つた。

「ありましねえだ」と、ザハールは答へた。

「ぢや、買つて來い。」

「お金をどうぞ。」

「それつばかりなら、彼處から持つて行け。」

「でも、彼處にはたつた一留四十哥しかねえだ。一留六十哥かゝるに。」

「彼處にはまだ銅貨もある。」

「俺見ねえだよ！」と、ザハールは片足から片足に力を入れ換へながら言つた。「銀貨はあつたが、それはこ

れで、銅貨はありやしねえだ！」

「あるよ。昨日配達夫が俺の手に直接呉れたんだ。」

「配達夫がお前さまに渡した時には、俺此處に居つたが、」と、ザハールは言つた。「小錢を渡すのは見たが

銅貨を渡すなア見ねえだよ……」

(タランチェフが持つて行つたんぢやないかしら？)と、オプローモフは怖る怖る考へた。(いや、さうぢやない。あの男があれつばかり持つて行く筈はない。)

「ぢや、彼處には何があるんだ？」と、彼は訊いた。

「何にもねえだ。だが、昨日の賜語があるかも知れねえ、アニシヤに訊いて見やすべえ。」と、ザハールは言

つた。「此處へ持つて来るか？」

「何でも有る物を持つて来い。無い筈はないんだ！」

「でも、ねえだもの！」と、ザハールは言つて室を出た。

オプローモフは考へ込んだまゝ徐かに書齋の中を歩き廻つた。

「實に心勞が多い。」と、彼は静かに言つた。「計畫を作るだけでも——非常な仕事だ！……だが、チースはまだ残つてゐる筈だが。」と、彼は考へ込んだまゝ附け足した。「ザハールの奴自分で喰つて了つて、無いなどと言つたんだらう！ それにしても、あの銀貨は何處へ行つたらう？」と、彼は卓子の上を片手で探りながら言つた。

十五分ばかり経つと、ザハールは両手に持つた盆で扉を開けた。彼は室へ入りながら足で扉を閉めようとした。が、彼の足は扉に當らずに空を突いた。盆が落ちた。盆と一緒に櫛の栓と丸パンが落ちた。

「無事に一足でも歩いたことはない！」と、オプローモフは言つた。「さア、落ちた物を拾へ。此奴まだ衛立つたまゝ眺めてる！」

ザハールは両手に盆を持つたまゝ、屈んで丸パンを拾はうとしたが、屈んで見ると、急に両手に物を持つてゐるので、何も拾ふことが出来ないのに氣附いた。

「さあ、拾つて見るがいゝ！」と、オプローモフは嘲けるやうに言つた。「どうしたんだ、お前は？ 何故そんなことをしたんだ？」

「お前さま、詰らねえこと言はつしやるからだ！ 忌々しい！」と、ザハールは落ちた物を見ながら憎々しさうに言つた。「丁度晝餐前に朝餐を食ふ人が何處にあるだ？」

彼は盆を置いて、落ちた物を床から拾ひ上げた。彼は丸パンを取り、それをぶツと吹いて食卓の上に載せた。

オプローモフは朝餐を食ひ始めた。ザハールは彼から少し離れた所に立つたまゝ、傍からオプローモフを眺めて何か言ひ出しさうにしてゐた。

が、オプローモフはザハールには少しも注意せずに朝餐を食つてゐた。

ザハールは二度咳拂ひした。

オプローモフはそれでも知らぬ顔をしてゐた。

「支遣八が今も再た使をよこしたよ。」と、ザハールは遂々怖々と言つた。「請負人が来て、この室を見たいと言ふさうです。矢つ張り改築に就いて……」

オプローモフは一言も答へずに食つてゐた。

「イリヤ・イリイチさま」と、ザハールは暫く黙つてゐた後で、更に静かに言つた。

オプローモフは聞えないやうな風をしてゐた。

「來週甲に引越して呉れと言ひやすだよ。」と、ザハールは嘎れ聲を出した。

オプローモフは一盃の酒を飲み干し、そして黙つてゐた。

「イリヤ・イリイチさま、俺達どうするだアね？」と、ザハールは殆んど囁くやうに訊いた。

「そんなことを俺に言ふことを禁じて置いたぢやないか。」と、オプローモフは嚴然として言つた。そして立ち上つてザハールの方へ近寄つた。

ザハールは後へさがつた。

「ザハール、貴様は實に毒々しい人間だ！」と、オプローモフは憤然として附け足した。

ザハールはぶんと腹を立てた。

「えッ！」と、ザハールは言つた。「毒々しい人間！ どうして俺が毒々しい人間だ？ 俺誰も殺しやしねえだ。」

「毒々しいぢやないか！」と、オプローモフは繰り返した。「お前は俺の生活を毒害してゐるからだ。」

「俺は毒を有つてゐねえだ！」と、ザハールは言つた。

「ぢや、何故お前は借間のことを五日蠅く言ふのだ？」

「でも、俺どうしやすべえ？」

「俺だつてどうするんだ？」

「お前さま、家主に手紙を書いたら可いでねえか？」

「よし、書かう。一寸待て。急には駄目だ！」

「今、書いぢやどうだね。」

「今？ 今？ まだ俺には大事な仕事があるんだ。お前は薪を切るやうなことだと思つてゐるのか？ 次から次にやれる仕事だと思つてゐるのか？」と、彼は乾いたペンでインキ壺の中を掻き廻しながら言つた。

「インキがない！ どうして書ける？」

「ぢや、俺、直ぐクワスで作つて來やすべえ。」とザハールは言つて、インキ壺を取り、身輕に玄關の間へ行つた。オプローモフは紙を捜し始めた。

「紙は一枚もありやしない！」と、彼は抽斗の中を捜したり、卓子の上を探つたりしながら獨語つた。「この通りありやしない！ ザハールの奴、實に困つた野郎だ。遣り切れたものぢやない。」

「お前は矢つ張り毒々しい人間だ！」と、オプローモフは入つて來たザハールに言つた。「何事にも氣を付けて呉れやしない！ 家に紙をなくしてどうする？」

「でも、イリヤ・イリイチさま、それはあんまりひでえ割だよ！ 俺基督信者だ。それにお前さま、毒々しい人間だと言つて怒鳴らつしやるだ？ 毒々しい人間たアひでえ！ 俺達は舊の旦那様の時分に生れて育つたが、あの旦那様は犬の兒なら怒鳴つたり、耳を引つ張つたりさつしやつたが、そんな言葉は言はつしやつたこと無えだ。本當ががすよ！ 立派なお方がしただ！ さア、紙は此處にあるだよ。」

彼は本棚から灰色の紙を半枚取り出して、それをオプローモフに渡した。

「こんなものを書けるか？」と、オプローモフは紙を投げ棄て、言つた。「俺は夜中に洋盃の中へ何か……毒蟲か何かが入らないやうに之で洋盃の蓋をしたんだ。」

ザハールは振り返つて壁の方を見た。

「よし、これでいゝ。こゝへよこせ。下書をしよう。アレクセーエフが書き換へて呉れるだらう。」

オプローモフは卓子に向つて、急いで書いた(拜啓陳者……)

「ひどいインキだ！」と、オプローモフは言つた。「こんどはよく氣を附けるんだぞ、ザハール。自分の爲すべきことをしなけりやいけない！」

彼は暫く考へてから書き始めた。

(當二階に借用致し居る小生の室を、貴殿は改築せんと考へ居られ候由、されど此の室は、小生の生活状態に適ひ、且つまた長年住み慣れ候爲め、小生の家僕ザハール・トロフィモフを経て小生に御傳への趣、小生の借用せる此の室を明け渡せとの趣……)

オプローモフはペンを擱いて、書いただけを讀んで見た。

「どうも口調が悪い。」と、彼は言つた。「こゝには「趣」と云ふ字が二つも並んでゐる。こちらには「居る」と云ふ字が二度も繰り返されてゐる。」

彼は小聲で讀みながら文字を置き換へて見た。「居る」を二階にくつ附けたが——矢張り不味い。また種々と訂正して、こんどは二度の「趣」を避けようと考へ始めた。

彼はその字を消して見たり、或は書き込んで見たりした。また三度も「趣」と云ふ字を置き換へたが、無意味な「趣」になつたり、隣の「趣」と並んだりした。

「どうしてもこの「趣」から離れることは出来ない！」と、彼はもどかしさうに言つた。「あゝ！ 詰まらない、手紙なんか厭になつた！ こんなことに頭を痛めるのは下らない！ 俺は用向きの手紙を書けなくなつた。あゝ、もう二時過ぎになるところだ。」

「ザハール、そら。」

オプローモフは手紙を四つに裂いて床の上に投げ棄てた。

「見たか？」と、オプローモフは訊いた。

「見やしただ。」と、ザハールは紙片を拾ひ集めながら答へた。

「ぢや、もう室のことで五月蠅く言つちやいけないぞ。だが、お前の持つてゐるのは、それは何だ？」

「勘定書がすよ。」

「あゝ、お前はどうしたんだ！ 何處までも俺を苦しめるんだな！ 幾らだ。速く言へ！」

「えゝと、肉屋が八十六留四十二哥。」

オプローモフは手を拍つた。

「お前は氣が狂つたのだな？ 肉屋だけにそんなに澤山あるのか？」

「三月も拂はなかつたので、こねえな額になつたのがすよ！ こゝにさう書いてあるだ。盗むんぢやありませんねえ！」

「だから、お前は毒々しい人間だよ！」と、オプローモフは言つた。「限もなく牛肉を買ふなんてね！ どう

する心算なんだ？ 實に結構なことをしたものだ。」

「俺が食つたでねえだよ。」と、ザハールは答へた。

「なに、お前が食つたんではない？」

「どうしてお前さま、食物のことで俺にこれ言はつしやるだ？ さあ、これを見るがいゝだ！」

ザハールはオプローモフに勘定書を衝き出した。

「こんどは何處だ？」と、オプローモフは悲しさに油染みた通帳を突き返しながら言つた。

「パン屋と背物屋とに、まだ百二十一留十八哥あるだ。」

「そりや破滅だ！ そりや餘り馬鹿々々しい！」と、オプローモフは驚いて言つた。「お前は牛だな、こんな野菜を食ふなんて……」

「いゝや！ 俺は毒のある人間がすよ！」と、ザハールは主人から顔を背けて悲しさに言つた。「ミハイ・アンドレイイチさへ寄せつけなけりやこねえにかゝりやしねえだよ！」と、彼は附け足した。

「ぢや、みんなで幾らあるのだ、算へて御覽！」と、オプローモフは言つて、自分でも算へ始めた。

ザハールは指を折つて算へた。

「何だ、奇妙だね、一度毎に違ふ！」と、オプローモフは言つた。「お前の方は幾らになつた？ 二百留ぢやないか？」

「待つておくんなせえよ。算へる間を貰はねえぢやア！」と、ザハールは懇めながら唸るやうな聲で言つた。

「八十と百と——百八十と二百と……」

「そんなことぢや何時まで経つても限がない。」と、オプローモフは言つた。「彼方へ行け、そして勘定書を明日持つて来い。今は紙とインキの心配をして呉れ……大した金額だ！ 少しづつ拂ふやうに言ひ附けて置いたのに、皆一度に持つて来る……百姓奴が！」

「二百五留七十二哥でがす。」と、ザハールは勘定を終つて言つた。「お金をおくんなせえ。」

「今でなくてもいゝ！ も少し待て。明日にしろ……」

「お前さまの勝手がすよ、イリヤ・イリイチさま、皆が請求するだから……」

「よし、よし、待たして置け！ 明日と言つたら明日渡す。彼方へ行け。俺は忙しいのだ。俺には非常に大切な仕事があるんだ。」

オプローモフが椅子に腰掛けて、自分の方に両脚を引き寄せて、何か考へようとするや否や、呼鈴がなつた。

背の低い人が入つて来た。腹の適度に出た色白の男で、その頬は紅く、頭は禿げてゐた。黒々とした濃い房のやうな頭髮が、後頭部の方からその禿を取り巻いてゐた。禿は圓く綺麗で、磨いた象牙で作つたやうに光澤々々としてゐた。このお客の顔には、見る凡てのものに注意深い表情があつた。その眼附も控へ目であり、微笑も温和しかつた。つまり表向き遠慮勝で禮儀正しい人らしかつた。

彼は地味な燕尾服を着てゐた。この燕尾服は一寸觸つただけでも、丁度門のやうに廣く、そして便利に開か

れるのであつた。彼の着てゐる下衣も、眞つ白く光つてゐた。丁度禿とその光を競ふものゝやうであつた。右手の人差指には、何か黒い石の入つた大きな重々し指輪が嵌つてゐた。

「先生ですか！ 不思議な御縁ですな！」と、オプローモフは一方の手を客の前に差し出し、も一方の手で椅子を引き寄せながら叫んだ。

「私はあなたが餘りお達者なので退屈なんです。で、お招きもないのに勝手に遣つて来たのです。」と、醫者は戯れるやうに答へた。「いや」と、やがて彼は眞面目に附け足した。「私はこの階上に、あなたのお近くへ往診にやつて来たものですから、一寸お尋ねしたやうな譯で。」

「有難う御座います。如何です階上の方は？」

「さうですね、三四週間か或は秋までかゝるかも知れません。が、程なく……胸に水が溜つて、お終は分り切つてゐるのです。だが、あなたは如何ですか？」

オプローモフは悲しさに頭を振つた。

「先生、不可ませんよ。私もあなたに御相談したいと思つてゐたんです。どうしていゝか、私には分らないのです。胃は殆んど消化力を失つて了ふし、心窩が重苦しくつて、胸が焼けて、息苦しいのです……」と、オプローモフは憐れな顔附をして言つた。

「手を貸して御覽なさい。」と、醫者は言つて脈を取り、眼を閉ぢた。「咳が出ますか？」と、彼は訊いた。「毎晩です、殊に晚餐の時に。」

「ふム！ 心臓が動悸しますか？ 頭痛は？」

醫者はなほさう云ふ質問をして、やがて禿頭を傾げて深く考へ込んだ。二分間ばかり経つと、彼は急に頭を上げて、力の籠つた聲で言つた。

「若しあなたはこんな氣候の中に、もう二三年も生活してゐらつしやると、寢てばかりして脂濃い物や堅い物を食べてゐらつしやると——中風症で死にますよ。」

オプローモフは、ぶる／＼と身慄をした。

「では、どうしたらいゝでせう？ どうか教へて下さい！」と、オプローモフは訊いた。

「他の人達がするやうに、外國へ行くのですね。」

「外國へ！」と、オプローモフは驚いて繰り返した。

「さうです。どうですか？」

「先生、外國行だけは、赦して戴きたいですな！ どうしてそんなことが出来るものですか？」

「どうして出来ないのです？」

オプローモフは黙つて自分を見廻し、次に自分の書齋を見廻し、それから機械的に繰り返した。

「外國へですか！」

「何かお差支へでもあるのですか？」

「何かどころですか、種々なことがありますよ……」

「種々なこととは何ですか？ 金がないのですか、さうぢやありませんか？」

「さうです、さうです、實際金もないのです。」と、彼は元氣よく言つた。彼は此の自然の妨害の陰にすつかり隠れおほせることが出来るものと思つて、この妨害を喜んだのである。「それに御覽下さい。村長が飛んでもないことを書いてよこしたんですよ……手紙は何處へ行つたらう？ 何處へ手紙をやつたらう？ ザール！」

「分りました、分りました。」と、醫者は言つた。「それは、私の仕事ぢやないのですから。私の義務は、あなたの生活状態と場所と空氣と仕事と——さういふものをすつかり換へなければならぬことをあなたに言ふだけのことです。」

「分りました。考へて見ませう。」と、オプローモフは言つた。「何處へ行つて何をしたらいいでせう？」と、訊いた。

「キスシゲンか或はエームスへ行くのですね。」と、醫者は言ひ始めた。「其處で六月と七月とを過し、其處の水を飲み、それからスキツルか或はタイロールへ行くのです。葡萄で療治する爲にですよ。其處で九月と十月とを送るのです……」

「タイロールなんかへ！」と、オプローモフは辛つと聞えるくらゐに言つた。

「それから何處か乾燥した土地へ行くのですねえ、エヂプトでもいいです……」
（あんなところへ！）とオプローモフは考へた。

「心配と悲みとを追ひ拂はなけりやいけません……」

「あなたのおつしやることは結構ですが、」と、オプローモフは言つた。「あなたは、村長からこんな手紙を受け取つたことはないでせう……」

「考へることも矢張り止めなけりや、」と、醫者は續けた。
「考へることも？」

「さうです、頭を使つちやいけません。」
「では、領地開拓の計畫は？ 私は赤楊の木頭ぢやありませんからねえ……」

「いや、それは御勝手です。私はたゞあなたを警戒すれば、それでいいのですからね。情慾も矢張り警戒しなけりやなりませんよ。情慾は治療に極く悪いのです。何でも馬に乗つたり、舞踏をしたり、空氣の綺麗な處で適度に運動をしたり、愉快な話をしたり、殊に心臓を軽く動悸させる爲めに、そして軽い感覺を受ける爲めに、婦人達と話をするがいいです。」

オプローモフは頭を垂れて醫者の言ふことを聞いてゐた。
「それから？」と、彼は訊いた。

「それから讀書をしたり、書きものをしたりすることは、極くいけません！ 窓が南に向いてゐて、花の澤山にある別荘を借りるのです。周圍には音楽と女とがあるやうな……」
「では、食物はどんなものですか？」

オプローモフ

「肉類は、殊に動物の肉は不可ませんね。粉ッぽい物や冷たい物も矢張り不可ません。軽い肉スープや野菜は食べてよいです。然し今虎列刺が非常に流行つてみますから、これを十分に警戒して戴くのですねえ……歩く時間も、一晝夜に八時間はよろしい。鐵砲を持つて……」

「あゝ！」と、オブローモフは唸つた。
「最後に。」と、醫者は結んだ。「多になつたらバリーにお出なさい。あの旋風のやうな生活の中で氣晴しをするのです。考へてちやいけませんよ。劇場から舞踏會や假裝會などへ行くのですねえ。それから郊外に友人を訪問して、笑つたり、騒いだりするのです……」

「まだ何か心掛けなかりやならぬことはありませんか？」と、オブローモフは辛つと悲みを隠しながら訊いた。

「醫者は考へ込んだ……」

「それに海の空氣も吸ふ必要がありますから、イギリスから汽船に乗つてアメリカへ行くのです……」
醫者は立ち上つて挨拶をした。

「若しあなたがこれを全部確實に實行なされば……」と、彼は言つた。

「承知しました、承知しました。屹度實行します。」と、オブローモフは彼を送り出しながら皮肉に答へた。醫者は去つた。オブローモフは非常に心細くなつた。で、彼は眼を閉ぢ、兩手を頭の上に載せたまま、椅子の中に縮こまつて、何處も見ず、何も感ぜずに臍掛けてゐた。

彼の背後から怖々とした呼聲が聞えた。

「イリヤ・イリイチさま！」

「何だ？」と、彼は叫ぶやうに答へた。

「支配人には何と申しやせう？」

「何を？」

「引越のことがすよ！」

「貴様は再たそんなことを言ふのか？」と、オブローモフは驚いて訊いた。

「でも、且那樣、イリヤ・イリイチさま、俺、どうしやすべえ？ 俺のことも考へておくんせえ、俺の生命のみじめなこと、俺は墓に片足突込んで居りやすだよ……」

「さうぢやない、お前は引越のことを言つて、俺を墓の中に追ひ込むんだ。」と、オブローモフは言つた。

「醫者が何と言つたと思ふ！」

ザハールは何と言つていゝか分らないので、たゞ溜息を吐いた。彼の頸卷の端は胸の上で慄へた。

「何か俺に願ひがあるのだらう？」と、オブローモフは再た訊いた。「俺はお前に飽々してゐるんだ。だが言つて御覽！」

「申譯ありません！ お機嫌良う！ 誰がお前さまの悪いことを望みやすべえ？」と、ザハールは主人の恐ろしい權幕にひどく心を亂して言つた。オブローモフの言葉は益々凄くなつて來た。

「おい！」と、オプローモフは言った。「俺は引越のことを言ふと言ひ付けて置いたのに、お前は一日過ぎないうちに、五度ばかりも言つたぢやないか。それが俺の氣分を壊すんだ——いゝか。こんなことでどうして俺の健康がよくなるものか。」

「俺は考へやしたよ、旦那様……何故引越さねえだ。」と、ザハールは心の驚きの爲めに慄へ聲を出しながら言った。

「何故引越さないかと言ふのだな！ お前は馬鹿に容易いことだと思つてゐるのだね！」と、オプローモフは安樂椅子に腰掛けたままザハールの方に振り向いて言った。「一體、お前は引越と云ふことが、どんなことだか、よく考へ見たのか、え？ よく考へやしまい？」

「そねえ考へやしねえだよ！」と、ザハールは謙遜に答へた。彼は苦い大根よりもつと厭な怒鳴り合ひを惹き起さぬやうに、何事も主人に同意しようとするのであつた。

「考へない。ぢや聞け。考へても見るがいゝ、引越すことが出来るかどうか。引越はどんなことだと思ふ？ 引越は主人が一日ぢう戸外へ出てゐること、朝から衣服を着て出かけることぢやないか……」

「ちと出かけちやどうで御座りやす？」と、ザハールは言った。「どうして一日戸外に出てゐられねえだ？ 家に凝つとしてちや身體に悪い。ほんにお前さま、悪いことを覺えたよ。以前は小さい胡瓜のやうだつたが、近頃は坐つてばかり御座るで、ほんとに何に似てると云つていゝだか分らねえ。少しは街道でも歩いて人を見たり、また何か他の……」

「馬鹿々々しいことはもう澤山だ、さうぢやないか！」と、オプローモフは言った。「街道を歩くなんで！」
「さうでがすとも。」と、ザハールはひどく熱心に續けた。「何でも珍らしい軽物を持つて來たてえことだが、それでも見て御座るといゝだよ。芝居か假裝會へ行つてもいゝだ。お前さまゐなくても引越は出來やすだよ。」

「下らないことを言ふな！ お前はよく主人の安靜を心配して呉れる！ お前の言ふ通り、一日歩き廻つて見ろ、お前は不要になる。が、俺は何處で晝餐を食ひ、晝餐後何處で寢るんだ？……俺がゐないでも引越は出來る！ 馬鹿を言へ、そんなことをして引越して見ろ——壊れ物ばかり出來て了ふ。引越がどんなことか、」と、オプローモフは益々躍起になつて言った。「俺はよく知つてゐる。引越は打ち壊しと騒動だ。何でも床上にごたくと積む。鞆でも長椅子でも額でも長柄のパイプでも書物でも後で手に入れることの出來ないやうな硝子器でもだ。そしてそれをどうするか分りやしない！ 失つたり、壊したりしないやうに、皆を監督してゐても……半分はその場で、他の半分は途中の荷車の上か或は新らし借間で紛失したり、壊れたりして了ふ。煙草を喫ひたいと思つて、パイプを取つても、煙草はもう運ばれてゐる……腰掛けたいと思つても、腰掛けるものがない。何に觸つて見ても——皆汚れてゐる。何も彼も埃だらけだ。手や顔を洗ふにも、洗ふ器がない。お前の手のやうな汚ない手で、戸外へ出かけなけりやならない……」

「俺の手は綺麗でがすよ」と、ザハールは手ではなく、二つの足の裏のやうなものを見せながら言った。
「そんなものを見たかあない！」と、オプローモフは側を向きながら言った。「それに、水が飲みたくなつて、

水注繰を持つても洋盃がない……」

「水注繰から飲むことも出来るだ。」と、ザハールは正直に附け足した。

「さうだ、お前のすることは、皆さうだ。掃かないことも、埃を拭かないことも、絨毯を敵かないことも出来るのだ。新しい室へ行つても、」と、オブローモフは自分で生々と想像した引越の光景に見惚れながら續けた。「三日間くらは片附かず、壁にかゝる額が床の上にあつたり、オーバシユースが寝臺の上にあつたり、長靴がお茶やポマド油などと一緒に包んであつたりする。見ると、安樂椅子の脚が折れてゐたり、額硝子が割れてゐたりする。また長椅子は汚黴だらけになつてゐる。何を訊いてもないと言ふ。誰も何處にあるか知らない。舊の室で紛失するか、それとも置き忘れて来たのだ。で、其處へ駈けつける……」

「時によると、十遍くらの駈けて行つたり、駈けて来たりせにやなんねえだ。」と、ザハールは遮つた。

「そら　ろ！」と、オブローモフは續けた。「それに新しい室で朝起きた時など、何と云ふ退屈なことだ！水もなければ炭もない。冬なんか斯うして寒い所に坐つてゐて見る、室は冷えるし、薪はないし、駈け出して行つて借りて来なけりやならない……」

「またひどい人もあるもので。」と、ザハールは再々言つた。「薪東どころか、水柄杓さへ貸して呉れないんで。」

「全くさうだ！」と、オブローモフは言つた。「引越しても、夕方迄に片附くだらうと思はれるが、いや實際は二週間くらの片附きやしない。何も彼も整頓したやうに思はれても……よく見ると、屹度何か仕事が残つて。」

てゐる。窓掛を懸けるとか、額を懸けるとか——心配は絶えない。生きてゐるのが厭になる……それに、費用が大變だ、費用が、……」

「八年前の引越には、二百留ばかりかゝつたと憶えてゐやすだ。」と、ザハールは言つた。

「それ、その通り大變なことだ！」と、オブローモフは言つた。「それに新しい室に住みかけの厭なことつたらありやしない。當座は慣れないのでねえ、新しい場所になると、俺は五晩くらの眠れないのだ。悲しさがこみあげて来る。起きると、向へにこの磨屋の看板の代りに他の何か見える。また晝餐前に、あの髪を切つた婆さんが、窓から覗かないと、俺は退屈になる……どうだ分つたか、引越が旦那をどんな目に合せるか、えッ？」と、オブローモフは詰るやうに訊いた。

「分りやした。」と、ザハールは温順しく囁いた。

「ぢや、何故お前は引越の持ち出すのだ？人間の力が、さう云ふことを忍べると思つてるのか？」

「でも他の人達は、俺洋より上手に引越をするから、俺達もさうすればいいと思つたんでがすよ……」と、

ザハールは言つた。

「何ッ？何ッ？」と、オブローモフは安樂椅子から立ち上りながら、俄かに驚いて訊いた。「何だつて？」

ザハールはどんなことで主人に激烈な叫喚と身振りとの動機を與へるか分らないので、俄かに心配し出した、そして黙つた。

「他の人達は上手だつて！」と、オブローモフは怖しさうに繰り返した。「何を言ふのだ！俺がお前にとつ

て、『他の人』と同じだと云ふことは今やうやく分つた！」

オプローモフは皮肉にザハールにお辭宜をして、ひどく侮辱されたやうな顔附をした。

「そんなこと御座んしねえだ、イリヤ・イリイチさま、俺はお前さまを他の誰かと同じに見ること御座んしねえだ。」

「出て行けッ！」と、オプローモフは扉口の方を指差しながら、命令的に言つた。「俺はお前を見てみられない。あゝ！『他の人達』か？ 分つた！」

ザハールは深い溜息を吐きながら自分の室へ行つた。

「考へて見りや、ひでえこつた！」と、彼は寢煖爐の上に坐りながら呻いた。

「あゝ！」と、オプローモフも唸つた。「今朝は仕事に捧げようと思つてゐたのに、一日氣分を壊されて了つた。それも誰だ？ 自分に心服してゐる使ひなれた下男ぢやないか。それが何と言つた！ 實に怪しからんことを言ふ奴だ。」

オプローモフは長い間心を落着けることが出来なかつた。彼は寢轉んだり、起上つたり、室の中を歩いたり、再たごろりと横になつたりした。彼はザハールが自分を「他人」と同じ程度へ引き下げたのは、ザハールに對して他の人よりも特に自分を尊敬させる權利が破壊されたのだと思つた。

オプローモフは深く他人と自分との比較を考へ、他人と云ふのはどんな者で、自分はどんなもので、どう云ふ程度までこの比較は出来ることで、それが又正當で、ザハールが自分に加へた侮辱はどんなに苦しいも

のであるかを考へた。最後に、ザハールが自分を侮辱したのは、意識してのことだらうか、つまり、イリヤ・イリイチが「他の人」と同じであることを信じてゐるので、少しも考へずに思はず口から迂り出たのではあるまいかと考へた。これは、皆オプローモフの己惚が考へたことであつた。彼は自分とザハールの言つた「他人」との間の差異をザハールに示して、彼の言葉の失敬なことを感じさせようと決心した。

「ザハール！」と、オプローモフは聲を引いて嚴かに叫んだ。

ザハールはこの呼聲を聞いたが、いつもの通りに足を鳴らしながら寢煖爐から飛び降りなかつた。呻き聲も出さなかつた。彼は徐に煖爐から迂り降りて、手や脇腹を種々な物に衝突しながら、靜かに澁々と歩いて行つた。それは、丁度主人の聲によつて、自分の天刑病が露見した爲に呼び出されて懲罰されるのだと云ふことを感じてゐる犬のやうであつた。

ザハールは扉を半分開けたが、入らうとはしなかつた。

「入つて来い！」と、オプローモフは言つた。

扉は自由に開かれるのだけれども、ザハールは通り抜けることが出来ないかのやうにそれを開けて、扉口に寄り添つたまゝ入つて来なかつた。

オプローモフは寢床の端に腰掛けてゐた。

「此處へ来い！」と、彼は執拗く言つた。

ザハールは辛つとのことで扉から離れたが、直ぐに扉を閉めてそれにびつたりと背中をくつ附けた。

「此處へ！」と、オブローモフは自分の傍を指差しながら言った。

ザハールは半歩ばかり踏み出して、指さされたところから二サーゼン(譯者註。一サーゼンは七尺強。)ばかりのところへ立ち止った。

「もつと！」と、オブローモフは言った。

ザハールは歩いたやうな風をしたが、たゞ身體を動かし、片足をトンと鳴らしただけで、矢張り以前の場所^所に止まつてゐた。

オブローモフはどうしてもザハールをもつと近くへ呼び寄せることの出来ないことを見て取つたので、彼を立つてゐる所に止め、暫く黙つたまゝ詰るやうに彼を見てゐた。

ザハールは斯うして黙つて見詰められてゐるのに氣まづくなり、主人を見ないやうな風をして、前よりかもつと横向になり、その上オブローモフにその片眼さへも向けなかつた。

彼は執拗く左側の他の方を見始めた。其處には、疾くから見覚えのあるものを一額の周圍まはりにある房のやうな蜘蛛の巣を見た。ザハールは蜘蛛を見て、自分の不精に對する生きた譴責であるやうに思つた。

「ザハール！」と、オブローモフは靜かに重々しく言つた。

ザハールは答へなかつた。彼は(何の用事だ？ このザハールぢやねえのか？ 俺は此處に立つてるぢやねえか。)と考へてゐるやうであつた。そしてその視線を主人を掠めて左から右に移したが、其處でも矢張り薄物のやうな厚い埃で覆はれた鏡が、彼自身のことを想ひ出させた。彼は怖ろしい眼附で額越しに、丁

度霧の中から見ると、埃を透して鏡に映つてゐる自分を見た。陰鬱な醜い自分の顔を見た。

彼はこの洗んだ、見慣れ過ぎた者から不満らしく眼を背けて、一寸オブローモフを見ようと決心した。二人の視線は、びたりと出會つた。

ザハールは主人の眼に書かれてゐる詰責を忍び得なかつたので、自分の眼を落して足下を見た。すると、其處の絨毯の上にも埃と汚點とが染み込んでゐるので、再た自分の主人に仕へ方が、熱心を缺いでゐると云ふ悲しい證據を見なければならなかつた。

「ザハール！」と、オブローモフは腹立たしさうに繰り返した。

「何で御座りやすだ？」と、ザハールは辛つと聞えるくらゐの聲で囁いた。そして怒鳴られることを豫感して微かに慄へてゐた。

「クワースを持つて來て呉れ！」と、オブローモフは言つた。

ザハールは漸く安心した。彼は子供のやうに嬉しさうに急いで食堂へ駈けて行つて、クワースを持つて來た。

「お前はとうしたんだ？」と、オブローモフは洋盃コップを一飲にして、それを両手で持つたまゝ優しく訊いた。

「氣分でも悪いんぢやないか？」

ザハールの荒々しい顔色は、顔の輪郭に輝やいてゐる悔悟の光によつて、直ぐに柔らげられた。ザハールは初め、主人に對する崇敬の念が自分の胸に目醒めて心に迫つて來る光を感じ、俄かに主人を真正面に見始

めた。

「お前は自分の過失を感じてゐるのか？」と、オプローモフは訊いた。

（何んだらう、「過失」と云ふのは？）と、ザハールは悲しさに考へた。（何か面倒なことだな、この人がこんな五月蠅いことを言ひ出すと、知らず識らず泣きたくなる。）

「何でがすよ、イリヤ・イリイチさま。」と、ザハールは自分の聲量の一番低い調子で言ひ始めた。「俺い何も言ひまじねえだよ、あれの外には……」

「いや、まア、待て！」と、オプローモフは遮つた。「お前は何を爲たか解つてゐるのか？ さア、洋盃を卓子の上に載せて、返答をしなさい。」

ザハールは何とも答へなかつた。そして自分が何を爲たかを少しも覺らなかつた。然し、これは彼が崇敬の眼で主人を見るのを妨げなかつた。彼は自分の過失を意識して、少し頭を垂れた。

「お前は無論毒々しい人間なんだ？」と、オプローモフは言つた。

ザハールは矢張り黙つてゐた。そしてたゞ二度ばかり大きく瞬をしたゞけであつた。

「お前は主人を悲しませた！」と、オプローモフは言葉を切りながら言つた。そしてザハールのどきまぎしてゐる様子が面白いので、凝つと彼を見詰めてゐた。

ザハールは悲しみの餘り、何處に身體を隠していゝか分らなかつた。「悲しませたらう？」と、オプローモフは訊いた。

「悲しませやしただ！」と、ザハールはこの新らしい「面倒な」言葉の爲めに、茫然として囁いた。

彼は視線を右に向けたり、左にやつたり、眞正面に向けたりして、何處かに救ひを求めようとした。すると再た彼の前には、蜘蛛の巣と埃と自分の反映と主人の顔とが閃めいた。

（地の中にももぐり込めたらな！ あゝ、一層死んで了ひたい！）と、彼は考へた。彼はどんなに淺掻いても、この怖ろしい場面を遁れることは出来ないと思つたのである。

と、彼は何かと五月蠅くチラ／＼するのを感じた。それを見ようとする、涙が迸り出る。遂々彼は散文詩のやうな例の歌で主人に答へた。

「イリヤ・イリイチさま、俺どんなことをしてお前さまを悲しませたぞ！」と、彼は殆んど泣くやうに言つた。

「どんなことをして？」と、オプローモフは繰り返した。「お前は『他の人』と云ふのは、どんな者か考へたことがあるか？」

彼はザハールを見續けながら言葉を切つた。

「どんな者かお前に言つて聞かせようか？」

ザハールは穴の中の熊のやうにのそり身體を動かし、室中を吸ひ込むやうな溜息を吐いた。

「『他の人』——それをお前は誰だと思つてゐるのだ——憐れな裸體者だ。無智で無教育な人間だ。天井裏に住んでゐる汚ない貧乏者だ。其奴は何處かの屋敷の中で、南京袋でも被つて寝てゐるのだ。そんな奴に何が

出来るものか？ 何も出来やしない。其奴は馬鈴薯か鱈を食つてゐる。貧乏の爲めに彼方の隅から此方の隅へと彷徨つてゐる。そして一日ぢう駈けずり廻つてゐる。さう云ふ奴が新しい室に引越をするとする。あのリヤガーエフのやうな者だ。定規を小脇に抱へ、二枚のシャツを手巾に包んでやつて来る……（君、何處へ行く？）——（引越だ）と言ふ。これが所謂『他の人』だ！ ところが、俺はお前の言ふ所によると『他の人』なんだ、——さうだらうか？」

ザハールは主人を眺め、片足から片足へ力を入れ換へて黙つてゐた。

「『他の人』と云ふのはこんな者だ！」と、オプローモフは續けた。「他の人は自分で靴を磨いたり、自分で衣物を着たりするやうな連中だ。どうかすると旦那面をしてゐることもあるが、それは間違ひで、さう云ふ男は召使がどう云ふものかさへ知らない。他人を使はうとはせずに、自分で駈け廻つて用事を辨ずる。薪を自分で燂爐の中にくべる。時によると、埃を拭くこともある……」

「獨逸人にさう云ふ男が多いだよ。」と、ザハールは意地悪く言つた。

「さうだ、さうだ！ だが俺は？ お前は何と思ふ。俺を『他の人』と思ふか？」

「お前さまは全然違ふだ！」と、ザハールは訴へるやうに言つたが、主人が何を言はうとしてゐるのかを覺らなかつた。「お前さまはそれな者に……」

「ぢや、俺は全然違ふと云ふのだな——さうだな？ まあ、待て、お前は何を言ふんだ！ 『他の人』がどんな暮しをしてゐるか考へて見るがよい。『他の人』は疲勞を知らずに働いたり、駈けずり廻つたり、下らない

ことに騒騒したりしてゐる。」と、オプローモフは續けた。「働かなけりや食へないのだ。『他の人』は頭を下げる。『他の人』は願ひ事をする。下卑たことをする……が、俺はどうだ？ さあ、言へ、『他の人』と俺とは同じだと思つてゐるのか——エッ？」

「旦那様、もう澤山だよ、面倒なことを言はれると俺困つて了ふだよ！」と、ザハールは願つた。「あゝ、ああ！」

「俺が『他の人』なら、俺は掃いてゐるだらうか、働いてゐるだらうか？ 食物も少ししか食べないだらうか？ 風采が醜くつて、憐々ぼいだらうか？ 俺に何か不足な點があるだらうか？ 恵んだり、仕事をしてやつた人も少くない！ 俺はお蔭で一度も自分で靴下を穿いたこともない。俺はあたふたとしてゐるだらうか？ 俺に何の不自由がある？ 俺は誰に斯う云ふことを言つてゐるのだ？ お前は俺の子供の時分から俺の傍にゐたぢやないか？ お前は俺が優しく育てられたことも、俺が寒さや餓にとても堪へられないことも、貧乏を知らなかつたことも、自分でパンを働き出したこともなければ、兎に角俺が勞働をしたことのないことなども見て知つてゐるだらう。どうしてお前は俺を他の者と比べるやうな心を起したのだ？ 俺の健康は『他の人達』の健康と同じだと思ふのか？ 俺はいつも斯う云ふことを爲したり、忍んだりすることが出来るだらうか？」

ザハールはオプローモフの言葉を理解する能力を全然失つて了つた。が、彼の唇は内心の動搖の爲めに脹れてゐた。激昂の場面が黒雲のやうに彼の頭上で鳴つた。彼は黙つてゐた。

「ザハール！」と、オブローモフは繰り返した。

「何で御座りやすだ？」と、ザハールは辛つと聞えるくらゐに嘔れ聲を出した。

「クワースをもう一ばい。」

ザハールはクワースを持つて来た。オブローモフがそれを飲んで了つて、洋盃をザハールに渡すと、彼は急いで自分の室へ行かうとした。

「いけない、一寸待て！」と、オブローモフは言ひ始めた。「俺はお前に訊くことがある。お前は主人をひどく侮辱した？ お前は子供の時分に手に抱き、一生涯仕へて、非常な恩を受けてゐる主人を侮辱したが、どうしてそんなことが出来るんだ？」

ザハールは辛抱が出来なかつた。「恩を受けてゐる」と云ふ言葉が彼を悲痛のどん底に突き落した。彼は五月蝭く瞬き始めた、オブローモフが怒號の中に言つたことを、十分に覺れなかつただけ、ますます悲痛を覺えた。

「イリヤ・イリイチさま、俺が悪かつただよ。」と、ザハールは悔いたやうな嘔れ聲で言ひ始めた。「俺が馬鹿だからだ。全く馬鹿だからだよ……」

ザハールは自分の爲たことを了解してゐないので、自分の言葉の終りにどんな動詞を付けていゝか分らなかつたのである。

「だが、俺は」と、オブローモフは侮辱された上に、自分の眞價を認められなかつた人のやうな聲で續けた。

「まだ晝も夜も心配をしてゐる。苦しんでゐる。時によると頭が熱して、胸が詰まることがある。毎晩眠らずに煩悶してゐる。そしてどうかして良くしたいと絶えず考へてゐる……だが、誰のことだと思ふ？ 誰の爲めだと思ふ？ 皆お前達の爲めだ、百姓達の爲めだ。つまりお前の爲めなんだ。お前は、俺が時々頭からすつぱりと蒲團を被つてゐるのを見ると、樹の根のやうに横たはつて、眠つてゐるのだと思つてゐるだらうが、さうぢやないのだ。俺は眠つてゐるのぢやない。どうしたら百姓達が貧乏をしないやうになり、他の百姓達を羨まないやうになり、怖ろしい大審判の時に神様に俺を訴へずに、俺の爲めに祈り、俺の心を感じて呉れるやうになるかと、そればかり熱心に考へてゐるのだ。恩知らずだ！」と、オブローモフは苦々しい詰責で結んだ。

ザハールは最後の「面倒な言葉」ですつかり感動させられた。彼は次第に嘔れ聲を止めた。そして彼の嘔れ聲と涙聲とは、どんな楽器でも出すことの出来ないやうな一つの音譜に融け合つた。そんな音色は支那の銅鑼か印度の太鼓でなければ出すことは出来ない。

「旦那様、イリヤ・イリイチさま！」と、彼は願つた。「もう分りやした！ あゝ、お前さま、ほんとに偉いお骨折で！ あゝ、聖母マリヤ様！ 不幸なことが急に持ち上つたもんだ……」

「だがお前は」と、オブローモフはザハールの言ふことを聞かずに續けた。「お前は少し饒舌るのを遠慮したらどうだ！ お前の胸には蛇が巢をつくつてゐるんだらう！」

「蛇が！」と、ザハールは両手をボンと打ち合せて、急にワツと泣き出した。それは如何にも二三四の甲

蟲が飛び込んで、室の中をブン／＼と飛び廻つてもゐるかのやうであつた。「俺は何時蛇のことなんか言ひやしたぞ？」と、彼は鬨泣きながら言つた。「それに俺は夢にも穢らほしい蛇なんかを見たことねえだ！」

二人はお互に理解を失つて了つた。が、終には自分自身さへ分らなくなつた。

「お前の言葉は全然とんちんかんだ？」と、オブローモフは續けた。「俺は自分の計畫の中で、お前の爲めに特別な家や野菜畑や撒き散らされた穀物などを豫定し、俸給さへ定めて置いたのだ！ お前は俺の家の支配人だ、執事だ、仕事の受託者だ！ 百姓達はお前の言ふ儘になるのだ。皆お前をザハール・トロフムイチさん、ザハール・トロフムイチさんと言ふだらう！ ところが、奴はまだそれに満足せずに、(他の人達)のことを訴へる！ そしてこんな賞與だ！ 立派に主人の名譽を高めたものだ！」

ザハールは獻款を續けてゐた。オブローモフ自身も非常に興奮してゐた。ザハールに言ひ聞かせてゐるうちに、オブローモフは自分が百姓達にした慈善を深く意識し、聲を慄はし、眼に涙を湛へて最後の詰責を言ひ了つた。

「もうよし、彼方へ行け！」と、彼は宥めるやうな口調でザハールに言つた。「さう、だが、一寸待て、クワースを呉れい！ 喉がすつかり乾いて了つた。お前も大概察しさうなものだ——主人が囁れ聲を出してゐるのが聞えないのか？ ひどく興奮して了つた！」

「俺はお前が自分の過失を悟ることを望む。」と、オブローモフはザハールがクワースを持つて來た時に言つた。「今後、主人と他の人達とを比べちゃならないぞ。お前は自分の罪を消す爲めに、家主に交渉をして、ど

うかして俺が引越さないで済むやうにして呉れ。さうすれば、お前は主人の安静を守ることが出来るよと云ふものだ。お前はすつかり俺の氣分を壊し、俺の或る新らしい有益な考へを壊して了つたんだ。而もその考へを誰から奪つたんだ？ 自分からだ。俺はお前達に全身を獻じてゐるのだ。お前達の爲めに職を擲つて、室の中に閉ぢ籠つてゐるのだ……ではもうよし！ そら、三時を打つた！ 晝餐まで二時間しかない。二時間何が出来る？——何も出来やしない。そのくせ仕事は山のやうにある。だから手紙の方はこの次の便まで延し、計畫は明日にしよう。さア、俺は今少し寝るぞ。すつかり疲れて了つた。窓掛を下し、扉をびつたり閉ぢて、人が邪魔をしないやうにして置け。俺は一時間ばかり眠るかも知れないから。四時半になつたら起して呉れ。」

ザハールは主人を書齋の中に閉ぢ籠め始めた。彼は先づ主人に蒲團を掛けて、その端を彼の下に押し込み、それから窓掛を下ろし、どの扉もびつたりと閉めて、自分の室へ歸つた。

「斃つて了へ、何と云ふ悪魔だ！」と、ザハールは涙の跡を拭いて寢煖爐の上に匍ひ上りながら唸つた。「ほんとに悪魔だ！ 特別の家、野菜畑、俸給か！ とザハールは此の言葉だけは分つたので、斯う言つた。「面倒な言葉の名人だ。たまるものか、まるで人の心をナイフで抉るやうなことを言ふんだ……それにしても、愈々俺の家と野菜畑とが出来れば、それで足も伸びると言ふものだ！」と、彼は寢煖爐を腹立たしさうに敲きながら言つた。「俸給か！ 十哥の銀貨や五哥の白銅を拾ひ集めることが出来なくなれば、煙草を買ふ錢も教母に御馳走をする錢もなくなるんだ！ 手前には何もならねえや……だが、死ぬやうなこともあるめえ

から！」

オプローモフは仰向に寝た。が、急に眠れなかつた。彼は種々なことを考へて、頻りに昂奮してゐた……
「突然に二つの災難が来た！」と、彼は蒲團を頭からすつぱりと被りながら言つた。「何處迄も反抗するより仕方がない！」

然し、實際にはこの二つの「災難」、つまり村長の忌はしい手紙と新らしい室への引越とは、オプローモフを惑亂させないやうになつた。そして多くの不安な追憶の群の中へ入つて了つた。

(村長が脅かす災難と云ふのは、まだ今日前のことぢやない。)と、彼は考へた。

(その時までには、種々な變化があるに違ひない。雨が降つて、穀物が生き返るかも知れない。滞納も村長が集めて了ふかも知れない。逃げ出した百姓達も、村長が書いてよこしたやうに、「以前の住家に連れ歸へられる」かも知れない。)

(だが、一體あの百姓共は何處へ行つたんだらう?)と、彼は考へて、この事情を藝術的に益々深く觀察しだした。(待てよ、夜、湿々した中を、パンも持たずに逃げ出したんだ。何處で寝たらう? 林の中ではあるまいか? 坐ることも出来ないぢやないか! 百姓屋の中には、非常に厭な臭氣が満ちてゐるが、でも多少なぐとも温い……)

(どうして狼狽へるんだ?)と、彼は考へた。(程なく計畫も出来る——何故取越苦勞をするんだ? あゝ、俺は……)

引越のことを考へると、彼はもつと狼狽へるのであつた。これは、生々しい最近の「災難」なのである。が、オプローモフの慰撫的精神は、最早この事實さへも歴史の中へ葬つて了つた。彼はタランチェフが干渉し出した以上、茫乎ながらも引越の避け難いことを豫知してゐたが、然し考への上では、自分の生活のこの不安な事件を、一週間だけでも遠ざけて、平和な一週間を得たのであつた!

(或は「ザハールが引越の必要がないやうにするかも知れない。「ひよつとしたら」さうなるかも知れない! 改築をこの夏まで延すか、或は断念するかも知れない。何れ「どうにか」なるだらう! どうしても……引越すことは出来ない!……)

斯うして彼はわく／＼したり、安心したりしてゐたが、遂々この宥めるやうな、そして安堵させるやうな「ひよつとしたら、或は、どうにか」と云ふ言葉の中に、例の通りこんども希望と慰藉とを満たした一つの櫃を——丁度我々の祖先の約櫃のやうなものを——見出し、その希望と慰藉とでこの瞬間に一つの災難から自分を守る事が出来た。

最早輕快な痲痺が、彼の手足を馳せ通つて、怖々した初寒が水の面に霧を立てるやうに、彼の感覚を夢と云ふ霧で覆ひ始めた。そして一分間の後には意識も何處かへ飛び去つた。けれども、オプローモフは、急に我に歸つて眼を見開いた。

「だが、俺はまだ顔々洗はなかつた! どうしたんだらう? さうだ、何も爲なかつたんだ。」と、彼は驕いた。「計畫を紙に書かうと思つてゐたのに、書かなかつた。署長にも書かなかつた。知事にも矢張り書かなか

つた。家主には書きかけたが、終らなかつた。勘定書も調べなかつた。金も支拂はなかつた——斯うして朝は過ぎて了つたんだ！」

彼は考へ始めた……

(どうしたことだ？ だが、「他の人」も矢張りこんなことを爲るかしら？)と、彼の頭の中に閃めいた。(他の人、他の人……「他の人」と云ふのは一體何者だ？)

彼は自分と「他の人」との比較に思ひ沈んだ。彼は頻りに考へた揚句、「他の人」に就いて愈々或る觀念を造り上げた。その觀念は、彼がザハールに言ひ聞かせたものと全く正反對なものであつた。

彼は、他の人ならば手紙を残らず書いて、「居り」と「趣」とを一度も衝突つきたさせず、新しい室へも引越し、計畫も實行し、村へも行くに違ひないと思はないわけにゆかなかつた。

(俺にだつてそんなことは出来るぢやないか)と、彼は思った。(俺にだつて書けるだらうと思ふ。あんな手紙ぢやなく、もつと立派なものを書いたことは、度々あるんだ！ あれは、何處へやつたかしら？ それに引越が何んだ？ 寧ろ希望する所だ！ 「他の人」は室衣なんか決して着やしない。)更に他の人の性格批評を付け加へた。(「他の人」は)……斯う言つて彼は欠伸をした……(殆んど眠りはしない……他の人は生活に依つて慰藉されてゐる。何處へでも行く。何でも見る。何事にも關係する……が、俺は……俺は……「他の人」とは違つてゐる！)彼は最早悲しさに斯う言つて、深い思案に沈んだ。そして頭を蒲團の中から突き出した。

オプローモフの生活に於ける明晰な覺醒の一瞬間が來た。

彼の心の中に、俄かに人間の運命と使命とに就いての考へが、活々と、そして判然はつかりと浮んだ時、それからこの使命と自分自身の生活との比較が閃めいた時、なほ眠つてゐる廢墟の中へ突然に射し込んだ太陽の光に夢を破られたやうな種々な人生問題が、一つ一つ眼を醒まして、小鳥のやうに的もなく怖々おそくと飛び廻つた時、彼はどんなに怖ろしかつたらう。

彼は自分の精神力が幼稚で、その發達が停止してゐる とで、何をしても大儀が妨害することなどを思ふと、哀愁と苦痛とを感ぜずにはゐられなかつた。他の人々は、充實した自由な生活をしてゐるのに、自分の狭い憐れな生活道程には、重い石が投げ出されてゐると云ふやうな嫉妬心も、彼の心を侵蝕するのであつた。

彼の怖々した心の中には、自分の天性の多くの方面は、まるきり目醒めてゐないこと、他の方面も僅かに覺醒してゐるに過ぎないこと、それから何の一面も徹底的に耕やされてゐないこと、之等に就いての惱ましい意識が作られた。

殊に、彼は今は死んでゐるかも知れないが、然し或る立派な輝やかかしい始源が墓の中のやうに自分の中にも、埋められてゐると云ふこと、或はそれが、鑛山の懷にある黄金のやうに、自分の中に横はつてゐるが、遠からず金貨になつて世間に使用されると云ふことを、病的に感じてゐた。

けれども、寶は汚穢と堆積された塵芥とで、深くそして厚く埋められてゐる。世界と實生活とが彼に贈つた寶を、誰か盗み去つて、それを埋め込んだかのやうである。彼が生活舞臺へ突進し、智慧と意志との帆

を残らず揚げて生活舞臺を飛翔することを、何か妨げたのだ。或る秘密の敵が彼の人生行路の最初に於て重い手を彼の上に加へ、彼を人間の眞直な使命から遠く跳ね飛ばしたのである……

そして彼はもう深林と荒野から眞直な小徑に通れ出ることが出来ないらしい。彼の周囲は林である。彼の心の中は、益々繁り、益々小暗くなる。小徑は益々草に覆はれる。明るい意識の覺醒は、益々稀になり、ほんの瞬間だけ眠つた力呼び起す。智慧と意志とは、疾くに癱痺して、助かりさうにもない。

彼の生活上の事件は、顯微鏡で見なければ分らぬ程小さくなつてゐた。が、彼はその事件をどうすることも出来ない。彼は一つの事件から他の事件へ移つて行かず、波のまにまに飄弄されるやうに寧ろ事件に飄弄された。彼はその一つの事件に對しても意志の弾力を以て抵抗することが出来なかつた。また事件を一つ一つ理性で片付けて行くことも出来なかつた。

彼は自分自身に對し斯うした秘密の懺悔をすると、悲しくなつた。過去に就いての無駄な哀惜と燒くやうな良心の苛責とが、編針のやうに彼を刺した。で、彼は全力を盡して、この苛責の鞭を自分から剥ぎ取つて、自分以外にこの責任者を見附け出し、その者に哀惜や苛責の整を向けようと努力した。けれども、誰に向けたらいいだらう？

「これは皆……ザハールだ！」と、彼は囁いた。

彼はザハールに言ひ聞かせた場面を詳細に想ひ出した。と、彼の顔は、恥かしさで火事のやうに燃え出した。

（若し誰かあれを聞いたら？……）彼は斯う考へると、身體が癱痺れるやうであつた。（幸ひザハールは誰にも言やしまい、誰だつて信じもしまい、大丈夫だらう！）

彼は溜息を吐いた。自分を呪つた。寢返りを打つた。責任者を搜した。が、見附からなかつた。彼の嘆息と溜息とは、ザハールの耳にさへ入る程であつた。

そら見ろ、あの奴、クワスでふらく／＼云つてゐる！」と、ザハールは腹立たしさうに唸つた。

（どうして俺のやうな者が出来たのだらう？）と、オプローモフは殆んど泣くやうに自問して、再た頭を蒲團の中に隠した。（本當に。）

彼は、（他の人達の）生活のやうな當然な自分の生活を妨げる敵を搜したが、それは何の効果もなかつた。

彼は溜息を吐き、眼を瞑つてゐた。幾分間か経つと、假睡が再た少しづつ彼の感覺を縛り始めた。

「俺も矢張り……何かを……」と、彼は強ひて瞬きをしながら言つた。「望んでゐたのだ……まさか天性斯う云ふ下らない人間ぢやあるまい……さうだ、そんなことはない……不平を言つちやならん……」

この言葉の次には、もう宥めるやうな溜息が聞えた。彼は昂奮から常態に移り、平靜と冷淡とに歸つた。「斯うした運命だと見える！ どうしようも無いぢやないか？……」と、彼は半ば眠つたまゝ、辛つと囁いた。

（収入が二千留ばかり少く）……彼は突然大聲に寢言を言つた。（今直ぐ、今直ぐだ、一寸待つて呉れ……）彼は半ば眼を醒した。

「けれども……どうして俺が……こんな者になつたかと云ふことを……研究するのも面白いことだ……」と、彼は再び囁くやうに言つた。彼の睫毛は、すつかり閉ざされてゐた。「一體、どう云ふ譯だらう？……それは……斯うに……違ひない……」と、彼は言はうとしたが、言へなかつた。

斯うして彼が原因を考へ出さぬうちに、舌と唇とは、言葉半ばで忽ち力を失ひ、半ば開かれたまゝ動かなかつた。言葉の代りに、また一度溜息が聞えた。そして程なく静かに眠つてゐる人の安らかな聲が響き出した。

彼の夢は、彼の考への徐かな、そして氣憚るい流を止めて、忽ち彼を別な時代と別な人々と別な場所へと運び去つた。次の章で私達も讀者諸君と一緒に、彼の後に随つて、其處へ行つて見ることにしよう。

九 オブローモフの夢

私達は、何處にゐるのだらう？ オブローモフの夢が私達を運んで來た處は、何と云ふ祝福された世界の一角だらう！ 何と云ふ壯麗な處だらう！

尤も、此處には海もない、高い山も絶壁も深淵もない。森然とした林もない——壯大なもの粗野なもの陰惨なもの、少しもない。

さうだ、あの粗野な、そして壯大なものが何になる？ 例へば、海が何になる。何にもなりやしない！ 海は人間に哀愁を與へるに過ぎない。海を見ると泣きたくなる。心臓は見極める事の出来ない水面の前に出る

と、意氣地なく怖々する。單調な無限の光景に苦しめられる眼は、何處にも休み場を見出すことが出来ない。巨濤の咆哮や狂ほしい鳴動は、弱々しい耳を慰めるものではない。此の咆哮と鳴動とは、世界の始めから絶えず陰惨な解き難い意味の歌を同じやうに唄つてゐる。その歌の中には、苦しめられてゐる怪物の呻き聲か哀訴かと思はれるやうな聲が、何時も變らず聞えてゐる。それから、誰かの甲高い不吉な聲も聞えてゐる。小鳥もその周圍では轉らない。たと呪はれたやうな無口な鷗だけが、憂はし氣に海岸を飛んだり、波の上でくるくると廻つたりしてゐる。

自然のこの慟哭に比べると、猛獸の咆哮は何の力もない。人間の聲などは誠に微弱なものである。人間そのものが、既に小ほけで弱々しい。人間は、廣大な光景の一小部分の中に、跡形もなく消えて行く！ だから、人間には海を見るのが不愉快なのだらう。

さうだ、海は何の爲めに在るのだ！ 海の静寂と静止とは、人間の心の中に、喜ばしい感じを生むものではない。人間は一寸した水の動搖の中にも、必ず無限大の力を認める。その力は、眠つてはゐるが、直ぐに人間の傲慢な意志を毒々しく嘲り、人間の大胆な目論見や人間の有ゆる心勞や勞苦を深く葬り去つて了ふ。山や深淵も矢張り人間を楽しませる爲めに造られたものではない。さうしたものは、爪と牙とを露き出して、今にも人間に飛びかゝらうとする猛獸のやうに獐狂で怖ろしい。さうしたものは、人間の無常を餘りに生々と私達に想はせ、私達に生活の恐怖と哀愁とを與へる。また絶壁と深淵との上にある空も、遠く達し得られないものゝやうである。丁度人間の仲間から連れ出たかのやうに。

この小説の主人公が、突然に現はれた平和の一角は、さうした場處ではない。

一七〇

こゝの空は、反對に、地上に低く迫つてゐる。が、それはより強く矢を浴せる爲めではなくして、愛を以て地をより強く抱きしめる爲めである。空は楽しい親の家の屋根のやうに、頭上に低く擴がつて、この選ばれた一角を、種々な不幸から守らうとするかのやうである。

こゝでは、太陽は半年くらの強い焼くやうな光を放ち、やがて次第に遠ざかつて行く。そして如何にも詮方がないと云つた風に自分の愛する場處をなほ一二度見返へる。それは、どんよりとした天候のうちに、秋の晴やかな暖かい日を惠まうとするかのやうである。

こゝの山は、何處かにそゞり立つてゐる恐ろしい山のモデルのやうである。斯うした山は、想像を恐怖させるものである。こゝの山は、急な丘の連続である。戯れて其處から背中で迂り降りるのも面白からう。或は此の丘の上に坐つて、何か考へながら、夕日を見るのも面白からう。

川も、無駄口を敲いたり戯れたりしながら、楽しさうに走つてゐる。その川は、或時は廣い池の中に流れ込み、或時は糸のやうになつて急に流れ、或時は思案に耽るやうに静かになる。小石の上を徐々と匍ふ。兩側に急流の小川を派出して、その水音を聞きながら、楽しさうに假睡む。

周圍十五露里か二十露里もあらうと云ふ此の一角は、油繪のエチュードと楽しく微笑む水彩畫との連続である。澄んだ川の急斜面になつた砂の岸、丘から川の方へ迫つてゐる小さい灌木の林、歪んだ窪地、その底にある小川、樺の森——皆故意と一處に集められ、技巧的に描かれたものゝやうに思はれる。

昂奮に苦しめられた心や或は昂奮を知らない心は、凡ての人が忘れてゐる此の一角に隠れ、誰も味はつたことのない幸福の中に生活することを願ふに違ひない。此處では、白髪になるまでの長い平靜な生活と睡眠のやうに穩やかな死とを約束してゐる。

此處では、一年の廻轉が正確に何の波瀾もなく行はれてゐる。

曆の示す通り、三月には春が来る。汚ない小川が彼方此方あちこちの丘から走り出す。地面は溶けて、温かい水蒸気が煙のやうに漂ふ。百姓は短かい毛皮の外套を脱ぎ棄て、ルバーシカだけを着て戸外へ出る。そして片手で眼を覆ひながら長い間太陽に見惚れ、満足らしく肩を窄める。それから、彼は逆さまになつてゐる荷車の兩方の轆を代る代る引つ張つたり、或は覆の下に横はつてゐる鋤を楽しさうに見たり、足で蹴つたりして、いつもの仕事の支度に取りかゝる。

春の吹雪が突然にやつて来て田畑を覆うたり、木の枝を折つたりするやうなことはない。

冬は、近づき難い冷靜な美人のやうに、定められた春暖の季節まで、屹度其の性質を保つてゐる。時ならぬ暖氣で間諜つかせることもなければ、聞いたこともないやうな酷寒で苦しめることもない。いつも自然が命ずる普通の順序で去來する。

十一月には、雪が降つて寒くなる。その寒氣は洗禮祭頃まで益々激しくなつて、百姓が一寸でも百姓屋から出ると、屹度頸鬚に霜を付けて来る。が、二月になると鋭い鼻は、もう空氣中に柔らかな氣流を感じて、春の近づいたことを知る。

けれども、この地方の夏は、特に陶醉させるやうな夏である。こゝでは、檸檬や月桂樹の匂でなく、たゞの苦蓬や松や木莓の匂に満ちた爽やかな乾いた空気を求めなければならぬ。こゝでは、殆んど晴天ばかり続く三ヶ月の間、焼きつくやうな太陽の光線がなく、軽く暖める晴やかな日を求めなければならぬ。晴やかな日が来ると、三四週間ぐらゐは続く。こゝでは、晩方になると鶉が鳴く。夜は息苦しい。星は空から愛想よく、そして親し気に瞬いてゐる。

雨が降つても——實に恵み深い夏の雨である。勢ひよくどしゃくどと降り瀝ぎ、愉快さうに跳ね返る。丁度突然喜びに合つた人の大粒な熱い涙のやうである。が、降り止むと直ぐに——太陽は再た晴やかな愛の微笑で、野や小山を見、そしてそれを乾かす。地上は再た幸福の微笑で太陽に答へる。

百姓は喜んで雨を迎へる——「雨は濕ほし、日は乾かす！」と百姓は言ひながら、暖かい驟雨の下に、樂しさに顔や肩や背中を曝してゐる。

夕立も怖ろしくはない。たゞ此の地を恵むだけである。そして必ず一定の時期から始まつて、土地の人の有名な傳説を保たうとでもするかのやうに、決してイリヤの日を忘れない。雷鳴の度數も強度も毎年同じで、丁度國庫から此の地方へ出す電氣の一年分の量か、定つてゐるかのやうである。

この地方では、怖ろしい嵐や破壊を聞くことがない。

誰も神の祝福したこの一角に何かさうした事件があつたと云ふことを、一度でも新聞紙上で讀んだものはない。若し百姓のマリーナ・タリーコワと呼ぶ二十八歳になる寡婦が、一度に四人の赤兒を生みさへしなけ

れば、この地方のことは、決して何にも掲載されなかつたらうし、また此の地方について何事も聞いた者はなかつたに違ひない。が、この四人の赤兒を生んだ出來事に就いては、どうしても黙つてゐることが出來なかつたのである。

神はこの地方をエチプトの流行病や普通の疫病で罰しなかつた。此處の住民は誰も怖ろしい天空の異常や火の玉や突然の暗黒を見たものがない。また記憶もしてゐない。こゝには、毒蟲もゐない。蝗もこゝへは飛んで來ない。吼る獅子も唸る虎もゐない。熊や狼さへゐない。林がないからである。たゞ野や村に牝牛は鳴きながら、羊は叫びながら、牝鶏は啼きながら逍遙つてゐるだけである。

詩人や、空想家は、この平和な一角の自然に満足するだらうか。斯うした人達は、誰も知つてゐる通り、月を見たり、鶯の啼音を聞いたりすることが好きである。斯うした人達は、薄黃色で飾られ、神祕的に木の枝を透して來る月の魅力をも、そして銀のやうな光の束を自分の崇拜者達の眼に浴せかける月の魅力を感じてゐる。

が、この地方の人は、誰も月が何であるかを知らなかつた。で、皆月をお月様と呼んでゐた。この月は眼を大きく見開いて機嫌よく村と畑を見てゐるやうであつた。この月は磨いた銅の金盃によく似てゐた。

詩人が感激の眼でこの月を見ても、何の役にも立たない。月はたゞ平氣で詩人を見るだけで、それは丁度

圓顔の田舎美人が都會の美男子の情熱的な意味深い視線を見返すやうなものである。

この地方では、鶯の聲も聞くことが出來ない。こゝには、木蔭の多い休み場と薔薇とがない爲めらしい。

その代り、鶉は非常に多い！ 夏に、穀物を收穫れる時分になると、子供達は鶉を手捕にさへする。

けれども、此の土地の者は鶉を贅澤な料理の材料だと思つてゐない——いや、さうした悪風は、此の地方の住民の習慣に浸み込んでゐなかつたのだ——鶉はこの地方では、規則で食物とされてゐない小鳥であつた。此處では鶉は、その歌で人の耳を樂しませるだけである。だから、殆んどどの家でも、軒の下には、網で造つた鳥籠の中に、鶉を入れて懸けて置くのであつた。

詩人と空想家とは、この地方の一般に貧窮でお粗末な風景に満足することが出来ないに違ひない。彼等は、こゝにスウキツルやスコットランド趣味の夕暮を見ることは出来ない。さうした夕暮には、自然全體は——林でも水でも百姓小屋の壁でも砂の丘でも——皆濃紫色の夕映に燃えてゐるやうである。さうした夕暮には、この濃紫色の畫布の上に、曲りくねつた砂地の路を辿つて行く騎馬の一群が翻然と影づけられる。この騎馬の一隊はレディーを連れて、淋しい廢墟へ散歩に行くのである。つまり堅固な城砦に急ぐのである。其處では祖父から聞かされた二つの薔薇の戦に就いての挿話が、彼等を待つてゐる。それから、夕食に行く山羊と若い娘が琵琶を弾きながら歌ふ小唄——斯う云ふものは、皆ワルテル・スコットの筆が豊かに私達の想像の中に入れる光景である。

ところが、この地方には、斯うした光景は少しもない。

この一角を形造つてゐる三つ四つの村にあるものは、何もかも靜かに睡つてゐるやうである！ その村々は、お互に遠く離れてゐない。丁度巨大な手で偶然に投げ出され、種々な方面に撒き散らされて、其のまま

今日に至つたものやうである。

一軒の百姓屋などは、窪地の崖の上へ落ちて、何時からとはなしにそのまゝ其處に引つかゝつてゐる。家の半分は宙に浮んで、三本の棒で支へられてゐる。その中では、三四代も人々が靜かに幸福に暮して來た。牝鶏でさへその家の中へ入るのが怖ろしくらゐるのに、今はその中に頑丈な百姓のオニシム・スースロフと云ふ律義者が、妻と一緒に住んでゐる。その男は自分の住家の中で、身體をぐつと伸ばすことも出来ない。誰でもオニシムの小屋に入ると云ふ譯に行かない。入る爲には訪問者は「林の方へ小屋の裏を向け、自分の方へ表を向けること」を頼まなければならない。

この小屋の上り段は、窪地の上に懸つてゐた。で、それに片足をかけるには、一方の手で草を掴み、片手で小屋の軒を掴んで、それから眞つ直ぐに上り段へ足を降さねばならない。

も一軒の百姓屋は、燕の巢のやうに、小丘に粘着いてゐる。此處には、偶然に三軒の小屋が並んでゐるが、その中の二軒は、窪地の底に立つてゐる。

村の中は、いつも靜かで恍然としてゐる。百姓屋は人聲もなく開つ放されてゐる。一人も人影は見えない。

たゞ蠅だけは、黒雲のやうに飛んでゐる。そして蒸れた空氣の中で、ブン／＼と唸つてゐる。尤小屋の中へ入つて、大聲で呼んでも、何もならない。答へるものは、たゞ死んだやうな沈黙だけである。尤も、或る小屋の中では、自分の生涯を燧燼の上で送つてゐる老婆の病的な唸り聲や或は微かな咳が聞える。或る小屋の中では、裸足でシャツだけを着た頭髮の長い三歳ばかりの子供が、筒立の陰から俯ひ出し、黙つ

て癡つと入つて来た者を見て、再た怖々と隠れる。

一七六

この深い静寂と平和とは、畑にも溢れてゐる。處々の黒い島には、暑氣に焼かれた百姓が鋤の上で休んだり、汗を流したりしながら、蟻のやうに蠢々してゐる。

静寂と亂し難い平靜とは、この地方の人々の氣風をも支配してゐる。こゝには、掠奪も殺人も怖ろしい偶然な出来事もない。強い情慾も、大膽な計畫も、こゝの人達を掻き亂さない。

どんな情慾と計畫とが、彼等を掻き亂すことが出来よう？ こゝの人は皆な自分自身を知つてゐる。この地方の住民は他の人達と全く没交渉である。隣村も郡の市街も、こゝから二十五露里若くは三十露里くらゐ離れてゐる。

百姓達は一定の時期に、穀物を近くのウォルガ河の船着場へ運び出す。その船着場は、百姓達のコルヒンダであり、ヘルタレスの岡柱であつた。それから或る百姓達は年に一度定期市に出かけて行く。彼等はこれ以外に誰とも何の交渉も有たないのである。

彼等の興味は、彼等自身に集められて、他人の興味とは接觸せず、交叉しない。

彼等は自分達のところから八十露里ばかり距てた所に（縣）、即ち縣の市街があることを知つてゐた。が、其處へ行く者は、極く少ない。彼等をもつと遠くにはサラトフ市やニージニイ市があることを知つてゐた。モスタワ市やピーテル市があることも聞いてゐた。ピーテル市の先にはフランス人や獨逸人が住んでゐて、その先には昔の人が思つてゐたやうに、暗黒世界があり、怪物や二頭の人間や巨人が住んでゐる怪しい國が

あると聞いてゐた。それから先は眞つ暗で、世界の果には一匹の魚が住んでゐて、それが地面を背負つてゐるのだと思つてゐた。

それから、この一角は、殆んど誰一人として通る者がなかつた。従つて、此の土地の者は、何處からも世界に行はれてゐる新らしい出来事を知ることが出来なかつた。尤も、木製の食器を運ぶ運搬人が、二十露里くらゐ距てた處に住んでゐたけれども、彼等も此の村の者以上には知らなかつた。彼等は自分の生活状態を他人の生活状態と比較して見ようがなかつた。彼等は立派な生活をしてゐるのかどうか、彼等は金持なのか貧乏なのか、また他の人が有つてゐるものを望むことが出来るのかどうかと、自他を比較して考へることが出来なかつた。

で、幸福な人達は、それ以外の生活はないし、またあり得ないと思ひながら、他の人達も皆自分達と同じ生活をしてゐるものと考へ、それ以外の生活をするを罪惡だと信じてゐた。

たとへ誰かど、他の人達は、他の方法で耕したり、蒔いたり、刈入れたり、商賣をしたりしてゐると言つて聞かせても、彼等はその言葉を信じないに違ひない。彼等は、どつしても他の情慾や昂奮を感ずることが出来ないのである。

彼等にも矢張り他の人達にあるやうな心配や疲勞や年貢納入や懶惰や睡眠があつた。けれども、これらは皆彼等にとつて面倒なものでもなければ、彼等の血を波立たせるものでもなかつた。

最近五年間に、數百人の百姓の中に、無理に死んだ者は勿論、自然に死んだ者さへ一人もなかつた。